
ネギまで夜天の主(偽)

開店休業状態

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまで夜天の主（偽）

【Nコード】

N8229L

【作者名】

開店休業状態

【あらすじ】

テンプレ通りに死んでしまったと思ったら、目の前に現れた超ファンキーな爺さん。
爺さんは神を自称して、テンプレ通りに死んだのはミスだといいがる。

しかし、異世界でチートオリ主になれるというので、仕方なく諦めてやる。仕方なくだぞ、仕方なく！

この小説というのもおこがましい作品には、原作レイプ、テンプレ、

チート、オリ主最強の要素が入っております。そういったものが嫌いな方はお気をつけ下さい。

プロローグ（前書き）

拙い作品ではありますが。読んで頂けると嬉しいです。

プロローグ

日常。どうという事も無い平和な日々。

俺は日常を楽しく謳歌していた。時折、大事件がおきたりなんかしないかなと、物騒なことを考えたりもするが、楽しく生活していたのだ。

高校に入学し、平凡に生きていた俺は、その日、妙に運が悪かった。朝に靴を履こうとしたら靴紐が切れる、家を出たら、何も無いのに躓く。信号無視の車に轢かれかけ、ヤクザっぽい人にぶつかって謝り倒したり。

朝から散々な気分になって。工事現場の横を歩いているときは、誰かにぶつかったりしないように細心の注意を払って歩いた。

けれど、現実俺を裏切った。

ばつんつ。という、硬いものがちぎれるような音が響いたと思ったら、肩に激痛が走り、地面に倒れこんだ。

ゆっくりと時が流れる感覚を味わいながら、俺は頭上から大量の鉄骨が降り注いで来るのを見た。

次に目覚めたときには、俺は真っ白な空間に居た。まったく何も無い空間だった。

そう、なんと云うか、鋼の錬金術師の真理が居た空間のような場所だった。

「Hey!」

まあ、目の前にキラキラと輝いているおっさんが居るんだがな。キラキラとかじゃないのは、なんと云うかあれだ。

魔法使いが着るようなローブなのに、スパンコールドレスのような装飾がされているのだ。

「じいさん……あんだ、輝いてるな……！」

「ふっ……お主こそ、輝いているぞ！」

自分の姿を見ると、血塗れでぬらぬらとしている。まあ、確かに輝いてる事には間違いないけど、いやな方向の輝きだな。

「さて、わしは神じゃ」

「そうか」

「ふお？なんじゃ、驚かんのか」

「まあ、信じてないし」

「ひどっ！わし、本当に神なんじゃけど？」

「いや、証拠が無いし。だってさ、俺がナイアルラトホテップだって言っても信じないだろ？」

「言われてみれば、それもそうじゃな。というか、よくそんなマイナーな神をしつとるの？」

「いや、デモンベインでな……」

「なるほど」

そういうと、じいさんは手を振るつ。そうすると、目の前に窓のよ
うな物が現れ、そこでは俺が火葬されていた。

俺の姉。ぼやぼやした家族思いの人が、俺が好きだって言ってたハ
ーブを俺の棺に……。

いやいや、人間の香草焼きを作るつもりですか？いや、あの量だと
鶏も香草焼きに出来ない量だけどさ。

「どうじゃ？」

「わかったわかった。信じたよ。で、何かようかい？」

「うむ、実はな。お主が死んだのはこちらの手違いなんじゃ」

ハ？ナンデスト？

「じゃから、お主が死んだのは手違いなんじゃ。ほんとーに申し訳
ない！」

そういうと、じいさんはトリプルアクセル土下座をした。

み、見事！惚れ惚れするような土下座だった……！

クツ、怒るに怒れねーぜ……あそこまで見事な土下座をされちまっ
たら……。

「それでじゃな？おぬしには異世界に転生する権利と、このまま死
んで元の世界に転生するという、二つの選択肢があるんじゃ」

ふむ？

「元の世界に転生するのなら記憶は消すが、様々な才能を君には
付加しようと思っておる」

「異世界なら？」

「うむ、俗に言うチートオリ主になれる」

「異世界でお願いします」

「即決かの。まあ、決断が早いのは美德じゃ。転生する世界と、能力を三つやろう」

世界か。うーむ、そういえば、明日はネギまの新刊の発売日だったな。ネギまでいいか。

えーっと、創作物全ての魔法とかは把握し切れないからやめとこう。そうすると、たくさん魔法が記されてる魔道書とかがあるといいよな。デモンベインは危ないから駄目だな。

ああ、リリカルなのはにいいものがあつたな。夜天の魔道書でいいか。当然、守護騎士プログラムもないとな。

そうになると、魔力とかも欲しいな。それに、肉弾戦もあるだろうか、身体能力も高くないと。

「うむ。分かったぞい」

「え？何も言っていないけど？」

「ここは狭間の世界じゃからの。人と人の精神の狭間もないのじやよ。

まあ、簡単に言うと、エヴァンゲリオンのあれじゃ。融合しないのは人と神という区分にあるからの」

なるほど。

「さて、夜天の魔導書じゃな？それに守護騎士システムは一括りじや。闇の書となっていた時点での魔法は全て記録されておる。

しかしまあ、バグはわしの力で修正しておくわい」

おお、さすがは神様だな。

「誉めるない。照れるじやろ。そして、魔力じゃが……ネギまとやらの世界の木乃香ちゃんの20倍もあればいいじやろ。

気とやらはラカンとやらの二十倍つと。これだけあれば十分じやの。

もう一つあるぞい？」

「む……そうだ、俺の容姿って変えられる？」

「よいぞ」

「えーつと……不老にして、肉体年齢を変えられて、男の娘のような容姿で頼む！」

「オッケー。というか、男の娘かの……」

いいだろ、別に。

「さーて、送る時間帯じゃが、何時頃がいい？」

「そうだなあ。ラカンが襲撃する少し前で」

「あい分かった」

じいさんが手を振ると、空間に黒い穴が。手渡された夜天の書を持ち、俺は穴に飛び込んだ。

プロローグ（後書き）

なんだか急ぎすぎた感があります。

登場人物紹介（前書き）

単行本しか読んでいなかった為、アスナの設定を全然知らずに適当書いてました。修正しました。

登場人物紹介

国後要。

日本人の男。 肉体年齢を自由に変更できる。 容姿はリリなののはやてそっくり。

夜天の魔導書の主。 魔力ランクはもはや測定不能。 はやての三十倍近い魔力がある。

広域殲滅魔法を得意としており、ヴォルケンリッターの主としての戦闘能力に特化している。

だが、近接戦闘が苦手なわけではない。 ラカンをも超える莫大な量の気を持ち、拳の一振りで数十メートルの範囲を更地に出来る。

騎士甲冑のデザインはリリなののはやてと同じであり、違いといえはリインとユニゾンすると、銀髪紅眼になる。

基本的に戦闘中はリインとユニゾンしており、銀色の閃光というあだ名はここから来た。

ネギまの魔法も使えるが、あまり好きではないので使うことは少ない。 リリカル魔法では得意分野は収束。 拡散や広域攻撃とは正反対だが、あくまでも収束が得意というだけなので、問題は無い。

最強といって差し支えない強さの持ち主だが、本人の性格は至って温厚。 趣味は料理と音楽を聴くこと。 また、音ゲーが異常に上手いが、格ゲーは苦手である。

10歳前後の姿で殆どすごしていたので、今となっては年齢を上げると上手く動けなくなる。 なので、基本的に10歳程度の年齢にしている。

生前の幼い頃は京都近くの関西に住んでいたが、七歳の頃に関東地方に引っ越した。 なので、基本的に標準語を使う。 意識すれば関西弁が使える。

使用デバイスは夜天の書。 夜天の書とは、シュベルトクロイツ、リ

インフォース、夜天の書。この三つ全てを総合したユニゾンデバースの事である。

独特の死生観を持っており、本で読んだ『今日は死ぬにはいい日だ』という言葉を書右の銘にしている。

今日は死ぬにはいい日だというのは、その日に心残りを作ったりしない事である。今日死んだとしても悔いは無い。そういう意味である。だからといって死ぬつもりは毛頭無い。

また、彼は一流のロリコンでもある。性転換魔法で女になった場合は一流のショタコンになってしまう。ザフィーラのショタフォームを開発させたのは、潜在意識によるもの。

ちゃん付けで呼ばれる事や女装する事に抵抗はあまり無い。彼の家は古い仕来りのある家だったので、小学校に入る前まで、女の子の格好をして過ごしていたらしい。

また、ぽやぽやした姉に着せ替え人形にさせられていたので、ある意味で女装に慣れてるとも言える。前世では男の娘という程ではなかったが、可愛いという容姿であった事は確か。

転生の際に開き直って男の娘になった。アルにゴスロリメイドやスクール水着を着せられていたりする。しかし逆に楽しんでいる始末。既に80年近く生きている。不老化しているため、ヘイフリック限界が存在していない。その為、細胞の活性化による治癒魔法でもどんなに酷い傷でも治る。

流石に体の欠損は治せないで、魂の情報を元に体を大量の魔力で再構成する魔法を使う。ちなみに、この魔法はAAランク以上の魔導師を五人以上用意して使用する儀式魔法。

本来、人間の脳は150年程度の記憶が限界なのだが、そこらへんはよく分からない神の力で何とかなっているらしい。既に確認済み。基本的に髪型はショートボブ程度。肉体年齢変化の要領で髪を自由に伸ばせる。服装によって髪型を変えろという馬鹿げた真似が出来てしまう。

魔力値の数値化、5600万。ラカン風戦闘力の数値、40〜50万前後。

魔力ランクSSS遠距離戦闘SSS近接戦闘SSS総合評価SSS。

烈火の将、剣の騎士シグナム。

ピンクのストレートヘアーをポニーテールにしており、非常に均整の取れたプロポーションをしている。刃のような雰囲気的女性で美人というよりもカッコイイという形容詞が似合う。

外見年齢は20歳前後。和食好き。バトルジャンキー。剣を振つてれば幸せな人。剣術バカ一代という不名誉な渾名をつけられる始末。使用デバイスは剣型アームドデバイス『レヴァンティン』。魔力変換資質、炎熱があり、ヴォルケンリッターでは最も攻撃に特化している。そもそも防御という考えがあんまり無い。

レヴァンティンはセットアップ時は通常の剣としてのシュベルトフォルムになっている。また、シュベルトフォルムは両手でも片手でも扱えるサイズである。

カートリッジは二重構造になっていると思われる柄の中に装填されており、ボルトアクション式だと思われる。どうでもいいが、放り投げたカートリッジを同じサイズの穴に的確に放り込むコントロールは恐るべき物がある。

カートリッジをロードし、刀身を分離。内部に通されているワイヤーらしきものによつての操作を行うシュランゲルフォルムが存在する。どれだけ伸びるのかは不明だが百メートル以上は確実。

ベルカの騎士は近接戦闘に特化している為に、中距離戦に対応する為のフォルムであり、敵を薙ぎ払うといった事も出来る。しかし、制御が難しくなるため、移動、防御が困難になる。

鞘を柄と接続する事によつて、大型の弓。ボーゲンフォルムとなる。遠距離攻撃が可能になるが、防御は不可能になるし、カートリッジは大量に使つし、移動も口々に出来ない弱点だらけ。

しかしながら、近距離特化のベルカの騎士にしては遠距離の対策を練ったのは賞賛に値するのではないだろうか。ここまで来ると何処らへんがレヴァンティンなのか分からなくなる。

風呂好き。平日休日問わず、家でやる事が無い。料理も掃除も洗濯も得意ではなく（出来ないわけではない）たいていの場合剣を振ってるか、将棋盤か囲碁盤相手ににらめっこである。

日課は新聞の詰め囲碁を解く事。テーブルに向かつてる時はたいていの場合お茶を飲んでいる。恐らくヴォルケンリッターで一番日本文化にかぶれてる。

また、彼女はゲーム全般が得意ではない。そして、誰も彼女にゲームをやらせない。格ゲームやアクションゲームで負けると、自分ならこうだとか言い始め、拳句の果てにはゲームを破壊する。

囲碁や将棋などの理詰めのゲームは得意らしい。何故かオセロは弱い。

羞恥心が薄いというよりも、あまり気にしない。なので、要と風呂に入ったりする事に抵抗が無い。というよりも、要の容姿が男を意識させるような容姿ではない。

十数年間碁を打ち続けるうちに神の一手を会得（本人談）。もうこの人、騎士じゃなくて棋士になったほうがいいんじゃないか。

魔力値の数値化、5400万。ラカン風戦闘力の数値、40〜45万。

魔力ランクSSS遠距離戦闘A+近接戦闘SSS。総合評価SS+。

紅の鉄騎、鉄槌の騎士ヴィータ。

ベルカの騎士にしては珍しく、近・中・遠の全てをこなせるオールラウンダタイプだが、前面での突破を好む。

シグナムは手数が多さで敵を圧倒するタイプで、制圧力は高いが突破力が低いため、ヴィータは突破力に優れ、それを補う事が出来る。

突破力が高く攻撃に優れる反面。防御に徹すれば盾の守護獣たるザフィーラに勝るとも劣らぬ力を発揮する。拠点制圧攻撃に等しい攻撃も出来る万能タイプ。

使用デバイスはハンマー型アームデバイス『グラーファイゼン』ゲートボールのスティックに見えるという人も居るが、まずはゲートボールのスティックの形を調べよう。

グラーファイゼンの基本形態はハンマーフォームであり、両手での打撃が主な戦闘方法になっている。片手で扱う事も出来るが、慣れていないと体が振り回される。

ハンマーフォームは魔法の補助にも優れており、シュワルベフリーゲンの誘導制御や防御魔法の補助も得意とする。

突破力に優れる強襲形態のラケーテンフォームがあり、ハンマーの片方に推進器が、その反対側がスパイクに変形する。

両手でしっかりと握り、回転してからの攻撃のラケーテンハンマー専用のフォームとも言える。また、この形態は魔法補助機能が落ちる。というか、いらなからオミットしたのではないだろうか。

本来ならば変形時にカートリッジを一発使用するが、要のバカみたいな魔力のお陰で彼女は魔力ランクSSSとなっており、カートリッジを使用せずとも即座に変形可能。

とはいっても、カートリッジを使用したほうが攻撃力が上昇するため、相手によってはカートリッジを使用する。魔力ランクは保有量であり、一度に使える量が変化するわけではないのだ。

突破力、面制圧、打撃力の超特化とも言える、ギガントフォームが存在する。ハンマーフォームが金槌ならば、ギガントフォームは杭打ちハンマーである。

更に巨大化し、恐らくは20メートル前後の大きさにまで変化させる事が可能。ただし、重量が増大し、取り回しも悪くなり、上段からの打ち下ろし位しか出来なくなる上に、魔力使用量が多い。

そのため、多用できる形態ではない。はずなのだが、魔力が増えたためにいくらでも使えてしまう。今までの五十倍近い魔力があるの

だから当然ともいえる。

家事はそれなりに出来るが、料理は要の独壇場であり、これといてやる事はあまり無い。なので、家ではたいてい遊んでいる。というか、他の皆も遊んでいる。

要の次にゲームが上手い。しょっちゅうガセ情報に踊らされる。新しいゲームよりも古いゲームのほうが好きらしい。お気に入り星のカービースパデラ。しょっちゅうデータが消えては要に泣き付く原作と同じくのろいうさぎを持っている。店に売っていなかったのて要お手製。ヴィータが欲しがったのではなく、要がふと思いついて作ったもの。

赤毛を三つ編みにしている。毎朝要が嬉しそうにヴィータの髪の毛をまとめている。そりゃあもう、お母さんという表現がピッタリなくらい。

外見年齢は八歳前後。ヴォルケンリッターの中では一番のちびっこ。外見年齢に関しては要に一番近かったりもする。

口が悪く、手も早く、直情的な負けず嫌い。子供っぽい性格をしてはいるが、戦闘の利害を冷静に見極める事も出来る面がある。

また、口が悪く手も早い、別に悪い子ではない。心根は優しい子であり、要に非常に懐いている。この点は原作と変わらないのではないだろうか。

たいていの場合、風呂は要と入る。性的な知識を持ち合わせてはいるが、要に対しての嫌悪感はないらしい。そこらへん、彼女の懐き具合が伺える。

魔力値の数値化、5300～5400万。ラカン風戦闘力の数値、40～50万。

魔力ランクSSS遠距離戦闘S+近距離戦闘SS+総合評価SSS-。

風の癒し手、湖の騎士シャマル。

金髪のショートボブのほんわかした雰囲気の美人さん。美女ではなく美人さんである。ここらへん重要。

外見年齢22歳前後。しかし、三歳くらいの違いでどうという事もなく、シグナムよりも年下に見られる事もしばしば。

全員の中で二番目に年上で、お母さん。というよりはうっかり屋さんなお姉さんという立場がピッタリ。

ほんわか優しいお姉さんで、少しうっかり屋さん。ちょっと気が弱い。ヴォルケンリッターでは直接戦闘に参加しない参謀。

その性格からか、権謀術策をめぐらせるタイプではない。しかし、それは人間としての感情があるからであり、本来のヴォルケンリッター。つまり、プログラムとしての彼女は冷徹非情である。

ヴォルケンリッターの中では唯一家事を担っているが、料理はあまり得意ではない。しかし、食べた人が気絶する程の下手糞さではない。そもそもそんな料理が作れるわけが無い。しかしミラクルでワンドフォーな料理を作る事がある（塩チヨコならぬ出汁チヨコ）

そのため、担当している家事は掃除と場合によっては洗濯。基本的に洗濯は要がやっている。やっぱり要がお母さんである。

使用デバイスはペンデュラム（振り子）型デバイス『クラ ルヴィント』一切の攻撃力を持たない、完璧な補助特化デバイスである。基本形態のリングフォルムは両手の人差し指と薬指にはめており、この形態では強力な魔法補助と妨害機能を有する。

また、公共の通信施設。つまり所は携帯電話等に接続しての通話が出来たりもする。携帯がいらな。と思いきや、受信が出来ない。もう一つの形態であるペンダルフォルムは指輪の石が分離して、紐でつながって動かす事が出来る。これで攻撃も出来るが大した攻撃力は無い。

特殊な転送魔法、旅の鏡はこの形態でしか使用できない。ちなみにだが、旅の鏡は転送魔法というよりも取り寄せ魔法といったほうが正しいかもしれない。

魔力値の数値化、5000～5200万。ラカン風戦闘力の数値、3000～5000。

魔力ランクSSS遠距離戦闘 - 近距離戦闘 - 治癒魔法SSSランク。

蒼き狼、盾の守護獣ザフィーラ。

灰色の頭髮に褐色の肌で男性と、ヴォルケンリッターの中では浮いていたりする。

外見年齢は20代半ば。ヴォルケンリッターの中では一番年上。性格は寡黙で実直。頼れるおとーさんといった所だろうか。

狼形態と人間形態があり、原作とは違って基本的に人間形態で過ごしている。しかし、スーツを着るとホストに見えるのが悩み。

要はザフィーラの狼形態でも人間形態でも背中に乗るのが好きらしい。広い背中に憧れるのだそうだ。

ヴォルケンリッターの中で唯一デバイスを持たない。そもそも、守護獣は使い魔と同じような存在であり、守護獣はデバイスが必要ない。

近接格闘に優れており、ナギやラカンとの殴り合いで勝利した事もある。魔法戦闘では防御に徹する事が多い。

盾の守護獣の名を冠する通り、彼の防御魔法は鉄壁であり、生半な魔法では罅を入れる事すら適わない。

さり気なく要の次に家事が上手い。彼は真面目な性格なので、料理は本の通りにやるので、まず失敗しないのだ。

家では特にやる事も無いので、ウィータのゲームに付き合っている。また、要がドラゴンボールを読ませた結果、自分の戦闘力がサイバイマン程度と落ち込んだりもした。要でもベジータ戦のピッコロ程度だから仕方ない。

物静かな性格で、やる事が無いと読書をしている。また、何でも読む。官能小説を真面目な顔で読んでいてシグナムに殴られたことが

ある。

要が思いつきで言ったシヨタフォームを習得。そうすると魔力の消費が少ないので、家ではその格好で過ごしている。

読む本すら無くなると昼寝を始める。日の差し込む窓際で体を丸めて眠るので、人によつては垂涎の姿だったりする。主に委員長とかまた、要もそれに付き合つて昼寝をしたりする。一番ほのぼのしてる二人組みだったりする。

魔力値の数値化、5200～5300万。ラカン風戦闘力の数値、30～45万

魔力ランクSSS近距離戦闘SS・遠距離戦闘AA+総合評価S+。

強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース

銀髪に暗紅色の瞳。シグナムよりも少し年下に見える女性で、最後の守護騎士。

本来ならば400ページ以上の蒐集を行わなければ、主の魔力が枯渇してしまうので、安全装置として400ページ以降から呼び出せる。

守護騎士とは言うものの、古代に存在した人間を元に形成された人格プログラムではなく、古代ベルカのユニゾンデバイス。

本来ならば、彼女も夜天の書には付加されていない機能。何時、何処で、誰が彼女を追加したのかは不明。

ユニゾンデバイスとしての性能は非常に高い。また、神からの贈り物と言う事になっているので、要とのユニゾンの適合率が100%という馬鹿げた数値になっている。

彼女単体での魔法行使も可能で、性質、運用の方向性は要とまったく同じ。というよりも、要がリインフォースの戦い方を模倣したようなものだ。ただ、要は収束系統に才能があり、リインフォースは拡散系統に秀でている。

なので、二人が戦うと先が読めてしまうので、どっちが上手く不意を突くかしが決着がつかない。大抵の場合は引き出しの多い要が勝つ。

広域殲滅魔法を連射したり、蒐集した魔法を即座に改竄する馬鹿げた処理速度、事実上最高のユニゾンデバイスである。

強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール、というのはリインフォースという名前の意味である。直訳では強化や援軍であるが、意訳の仕方ではそうなるのではないだろうか。

援軍は戦域を支える者達であつたり、仕事を手伝つたり、幸運の追い風というのも後方から来る事であり、援軍とは当然ながら後方から来る。

また、守護騎士であり、ユニゾンデバイスである彼女は戦う為の存在。なので、リインフォースと言う名も頷ける。

要に髪型を遊ばれる人筆頭。ひまな時は本を読むか座つてボーッとしてるので、ゲームをしたり剣を振るか頭を抱えて唸る二人よりも、髪を弄るのに調度よかつたりするのだ。

本人も本人で外に出る事が今までに一度もなかったので、いろいろと新鮮らしい。ファッションにも料理にもお菓子にもお洒落にも何でもかんでも興味を示す。

外に出ればあちこち見回し、あっち行ったりこっち行ったり、まるで子供か外国人。実際のところ外国人ではあるのだが。

物静かな性格だが、不思議な物を見つけたり新しい物を見つけると興味心身で目を輝かせる子供のような人。ヴォルケンリッターの記憶を共有出来ていたりもするのだが、食べる事やお洒落などの、人間的な楽しみをしたのは殆どなかった事なので、かなり楽しいらしい。特に食べる事が好きらしく、暇で外に出ていいのならば大抵おいしそうなものを求めて旅に出る。

また、ヴォルケンリッターはプログラム。厳密に言えば生命体ではないので、太る事がない。質量保存の法則は何処に行ったとか言いたくなるが、デバイスの時点で喧嘩を売っているのでお察しくださ

い。

なので、色々と女性を敵に回していたりする。また、永遠の十代後半なので世の中の女性の百パーセント近くに喧嘩を売っている。合計すると全人類の推定六割以上に喧嘩を売っている。

魔力値の数値化、5400万。ラカン風戦闘力の数値、40～50万前後。

魔力ランクSSS遠距離戦闘SSS近距離戦闘S - 総合評価SS -。

ネギ・スプリングフィールド

ナギ・スプリングフィールドの息子。村を襲撃された折に要に弟子入りした。要は紅き翼の所属だという事を明かしては居ない。

非常に優秀な生徒で、反則レベルの習得速度を誇る。既に上位古代語魔法も扱える。

タイプは魔法剣士で、シグナム、ザフィーラ、ヴィータに武器と拳の扱い方を教えてもらった。とはいっても、ザフィーラは我流で組み上げた技であり、教えられたのは人の殴り方くらい。

レヴァンティンと似た形の剣を使用しており、原作とは違って魔法拳士ではなく魔法剣士となった。原作よりもクソ真面目な性格ではない。

別荘の併用による修行のため、2003年時点で15歳前後の年齢となっている。

現在使用できる魔法は、原作で使えた魔法に加えて千の雷とアクセスルシューター。デバイスが無いので4発程度しか制御出来ない。だが、魔法の射手よりも遥かに緻密に制御出来るので多用される。

魔力ランクAAA+近距離戦闘S - 遠距離戦闘S 総合評価S+。

犬上小太郎

関西呪術協会で捨て駒扱いされていた狗族と人間のハーフの少年。狗族獣化が出来る事からして、人間よりも狗族の血が濃いらしい。我流で自分に合った武術を編み出す事が出来たことからして、豊富な戦闘経験と類稀なる才能がある。

我流で獣化の新たな形態を編み出したのは素晴らしい才能とも言える。非常に優秀な人材だったが、要が関西呪術協会から掻っ攫ってきた。

関西呪術協会はハーフの少年なんぞどうでもいいという事で、引き取ってもらえて喜んだくらいだった。

優れた気の使い手で、大神を使った転移術が使える。大神を使って空を飛ぶことも可能で、非常に優秀。ネギと同列の天才。

ネギと同じく別荘の修行で15歳前後に成長している。ザフィーラに憧れているらしい。群れのリーダーに対する憧れのようなもの？ ザフィーラとは違い、細マッチョ。狗族とは犬の事なので、厳密には狼のザフィーラとは種族が違うのだが、犬は狼が原種なので似たようなものだろう。

魔力ランク不明。 近距離戦闘 S - 遠距離戦闘 A - 総合評価 A A A +。

神楽坂明日菜 アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオ
フュシア

麻帆良学園に通う中学生。魔法世界のウェスペルティア王国の王女。

ウェスペルティア王国の子にのみ現れる異能力、魔法無効化能力を所持しており、攻撃魔法などが一切通用しない。

本人の意思に応じて反応し、本来ならキャンセルされない治癒魔法も意思次第ではキャンセル可能。洗脳や記憶改竄もキャンセル可能だが、本人の意思か特殊な魔法陣を使用すればキャンセルされない。

原作とは違い、記憶を削除されていない。また、魔法生徒として扱われており、ウェスペルタイテア王国の宝物であるハマノツルギを所有している。（オリ設定）

ハマノツルギは何故かハリセン形態と大剣形態があり、ハリセン形態は武器としての性能を持っていないために敵を傷つけないために使用される。

ハマノツルギの効果と本人の能力である魔法無効化能力を最大限に発揮する呪文があり、それを使用することによって大規模魔法を遠距離から無効化可能。

カイ・アナルキアース・トメー・アルケウス
呪文は無極而太極斬。大規模魔力消失現象中でも使用できる王族の魔力を所持し、気も扱える。

また、幼い頃に既に感掛法を習得しており、個人としての戦闘力は非常に高い。非常に優れた戦闘のセンスがあり、一流の戦闘者。

記憶を封印されていないため、クールで知的。オジコンではない。

だが、男にもあまり興味は無い。木乃香のルームメイト。

魔法は使えない事も無いが、魔法の才能は余りない。戦闘の補助として飛行魔法などを取得している程度。生粋の魔法剣士。

好物は要の料理。特技は料理だが、野戦料理みたいなものである。

嬉々として兎を搔つ捌く中学生はかなり不気味。

実年齢は既に百を超えている。弱小国であるオスティアが戦争に勝つ為の道具として使われていた。

詳しい事は不明だが、既に百を超えている為、何らかの不老化を施されていたと考えられる。

タカミチ・Ｔ・高畑

今年で三十歳前後の男性。紅き翼所属だったが、戦闘に出た事は殆どない。先天的に魔法詠唱が出来ない体質で、無音拳と感掛法を習得している。

その後、カナメにデバイスを与えられ、デバイスが呪文詠唱を分担

してくれる為、魔法が使えるようになった。デバイスは最低限の機能のみで、呪文詠唱をするだけになっている。

術式の構成や維持、制御は全て自分でやっている。呪文詠唱専用にしたデバイスのため、こちらの世界の魔法だけしか扱えない。

魔法が使えるようになったため、本国の戦闘クラスはAAA。また、マギステル・マギとしても認められるようになった。

才能はなかったが、努力を積み上げた努力の人。幼い頃にカナメに一目ぼれしていた。後に男だと知って更に修行に打ち込むようになった。

最近では男でもいいじゃないか、いや、むしろ男の娘じゃないと駄目だという意味不明な境地に達し始めている。人間とは進化する生き物だ。

頻繁に出張している。担任としての職務は殆ど果たせていない。

麻帆良学園でも最強だが、魔法世界でもかなりの強者。原作のカゲタロウと戦えばいいとこまでいくレベル。

所持しているデバイス、アイドネウスとはハデスの別名。アイドーネウス（見えざるもの）から来ている。

魔力ランクB近接戦闘A＋遠距離戦闘AA＋総合評価AAA＋。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

600年の時を生きる真祖の吸血鬼。600万ドルの賞金首だったが、カナメの動きによって既に失効となっている。

ナギと戦えばどちらが勝つか分からない程度の強さ。遠距離戦に持ち込めば確実にエヴァの勝ちで、近距離戦に持ち込まれればナギの勝ちとなる。

魔法使いのタイプとしては砲台としての役割である魔法使い。資質としては拠点制圧や面制圧が得意なタイプ。

断罪の剣を同時に五本発生させたり、二十メートル以上の氷神の戦

槌を作り出すのは高位の魔法使いなら珍しくもないが、無詠唱で作り出すのは難度が高い。

それも無造作に作り出しているため、非常に高い技量を持っていることが分かる。事実上、最高の魔法使いとも言える。

反面、必要でなければ学ばないとはよく言ったもので、不老不死であつた為に治癒系統は不得意。解呪は15年間登校地獄を解除する為に学んでいたので、それなりに出来る。

自分自身を見てくれるカナメに一目惚れした。カナメは普段は兎角、占める所は占める奴なので、そこらへんの信頼もある。

恋人になって一目で「千葉滋賀佐賀！」をしたエロゲも真つ青な人。着飾るのが趣味なのかは知らないが、ゴスロリや甘ロリを好んで着る。

暗い色ではなく、明るい白やピンクの甘ロリを好んで着ている。しかも普段着。ゴスロリやら甘ロリを普段着にしていたら、普通は痛い人認定されてしまうが、彼女はそれが似合ってしまう。

隣を歩くカナメはどんな気分かと思いきや、似合っていると絶賛するわ、不釣合いになってしまうから自分も着てしまう始末。

更には顔は八神はやてなので、かなり似合ってしまったている始末。麻帆良学園の双子ロリとは二人のことである。もうやだこのバカップル。

ちなみに、吸血鬼になったのは10歳だが、数え年ではなく満年齢。誕生日の朝に吸血鬼になっていたのだから満年齢だろう。

既に初経は来ているらしい。子供が出来るかどうかは定かではないが、生まれたとしたら、この世界では未だに生まれていないダンピールが生まれるのだろう。

魔力ランクS＋遠距離戦闘SS近距離戦闘AAA＋総合評価SS＋。

ナギ・スプリングフィールド

紅き翼のリーダー。最強の魔法使い。紅き翼はバグキャラの巣窟を表す人間。

元は旧世界の出身の魔法使い。突然変異で生まれた為、莫大な魔力を身に宿す。

究極技法のはずの感掛法を見よう見まねで適当に成功させたりと、理不尽なほどの才能を持つ。

千の呪文の男という二つ名があるが、実際の所、覚えている魔法は雷の暴風や雷の投擲、それに千の雷や魔法の射手などの良く使う魔法だけ。

それ以外は全部あんちよこに記されている。術式構成が感覚タイプの天才なのか、非常に上手い。やっぱり理不尽な人。

適当にやって、忍者でも四人が限界の実体と全く同じ分身を10体以上出したり、千の雷一発で鬼神兵を薙ぎ倒したりと、やっぱり理不尽な人。

卓越した戦闘センスの持ち主。ラカンと13時間以上も殴り合いを続けられるほどのスタミナ。拙作ではヴォルケンリッターの働きで十分前後で終わってしまったが。

直情的な人間。馬鹿だが頭が悪いわけではない。基本的にいい奴。殴り合いをすれば笑って許せる。お人よしとも言うべき人柄。

魔力ランクS遠距離戦闘SS - 近距離戦闘SS + 総合評価SSS。

ジャック・ラカン。

最強の傭兵剣士として名高い。

実は五十歳を超えている。彼は長寿種族のヘラス族なので、人間換算で未だに三十代前半。

元々はそれほど強くもなかったが、努力を積み上げてそこまで至った。タカミチと違って才能はあったが、タカミチと同じく努力の人。

見よう見まねで適当に作った重力魔法で脱出不可能の異次元空間を破砕するなど、かなりの理不尽っぷりを見せる。

適当に作った技で山を吹っ飛ばしたり、真剣に技の名前を考えたり、戦艦並みに大きい剣を操ったりと、紅き翼の三人目のバグキヤラ。アーティファクトは千の顔持つ英雄。ありとあらゆる武具に変ずる変幻自在のアーティファクト。宝具とは言う物の、F a t eの宝具のように理不尽な性能はない。とはいっても十分に優れた武器。

全力で放った技は核兵器を連想させるほどに強力。雷の速度で動くネギをカウンターで迎撃し、殆どの武具を見事に扱い、自分の腕に突き刺さった杭を戦闘に使用するほどの優れた戦闘センスを持つ。ネーミングセンスはない。そよ風爆風拳という矛盾した技名を作る。自分にしかできない技を編み出した拳句に金を払わせようとする。

魔力ランク測定不能。遠距離戦闘A A + 近距離戦闘S S + 総合評価S +。

フィリウス・ゼクト。

詳細不明の謎の少年。ナギの魔法の師匠でもあった。爺臭い言葉で喋る。

非常に優れた魔法使いだが、どちらかというと魔法剣士。フィリウスとは息子という意味がある。

近衛詠春。

元は青山の神鳴流剣士。紅き翼の最初期メンバー。苦勞人。

バグキヤラ揃いの紅き翼で頑張っていた人。とはいっても実際の所、彼は非常に優れた剣士であり、他の面々がバグキヤラ過ぎただけ。クルトに神鳴流を教えた。現在は関西呪術協会の長をやっている。カナメがおふざけで作った波紋の呼吸法により未だに若々しい。

アルビレオ・イマ

紅き翼に所属していた魔法使い。非常に優れた魔法使い。重力魔法を使いこなす。

現在は図書館島の地下にいる。自分の欲望に結構忠実な人。その癖外面はいい人。

カナメにゴスロリメイドやスク水などを着せて楽しんでた。男の娘もイケてしまう人。大戦時はタカミチを煽っていた。

彼のアーティファクトであるイノチノシヘンは他人の人生を蒐集した記録であり、その点では夜天の書に通ずるものがある。

また、その記録を元にその人間を再生し、模倣することが出来る。とはいっても結局は模倣なので、完璧に真似る事は出来ない。

自分の実力以上の人間は一回限りの三十分だけの完全再生が可能。中々にチートなアーティファクト。

カナメの人生も蒐集したが、この世界に来てからの人生しかないの
で、あんまり面白くない。しかも四分の三が修行の記録なのでむし
ろつまらない。

クルト・ゲーデル

紅き翼に半分くらい所属していた少年。天才というべき人物。見よ
う見まねで神鳴流を再現できたほど。

現在はメガロメセンブリアの元老院に所属している。結構熱血漢。
知的に見えるが結構馬鹿。

ガンドルフイーニ。

彼のあだ名はカナメの中では黒ひろゆきである。

登場人物紹介（後書き）

何となく作った。後悔はしてない。本編書かないでなにやってるんだろう。リンク付けはそれなりに真面目に作ったけど適当です。

第一話 ヴォルケンリッターの出会いと紅き翼との出会いと（前書き）

一話目です。結構長いと思います。

第一話 ヴォルケンリッターの出会いと紅き翼との出会いと

次に気が付いたとき、そこは広い荒野だった。

「夜天。セットアップ」

「Ich befreie eine Versiegelung
(封印を解除します)」

何を言ってるのかさっぱり分からないけど、意味だけは頭に伝わってくる矛盾。

「Anfang(起動)」

どうでもいいけど、リリなのベルカ語って、ドイツ語と同じなんだよ。

多分だけど、エースコンバットからのオマージュだね。だって、ベルカでドイツで強力な軍事力って、それしか思いつかないよ。

「夜天の書の起動を確認しました」

赤というか、ピンク色の髪をした人。というか、シグナムさんですね。

「我ら、夜天の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます」

化学兵器（不味い飯）製造機のシャマルさん。

「夜天の主の元に集いし雲」

影が薄い人、ザフィーラ。この時は人型なのにね。

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

エターナルロリータ、鉄槌の騎士ヴィータだよ。どうでもいいけど、俺ってロリコンなんだ……。

つか、こいつら、動かないんだけど。どうしたらいいか……そ、そうだ！それっぽく振る舞ってみよう！

「我が名は国後要。夜天の王。ヴォルケンリッターよ、汝等を我が騎士と認めよう」

右手を心臓の辺りに持っていていき、瞳を閉じ、答える。

「っと、堅苦しいのはここまで。みんな、ちゃんと立ってくれ」

「は、はあ……」

シグナムが一番困惑したが、ヴィータとかシャマルはすぐに従ってくれた。

「さて、俺の名前はさつきも言ったとおり、国後要だ。主とか、畏まらなくてもいいぞ。俺としては、フレンドリーに接して欲しい」

「ですが……」

その後、十分ほどの押し問答の結果。それなりにフレンドリーに接してくれることになった。

まあ、シグナムは結局敬語をやめてくれなかったが。

「カナメ、ここって何処なんだ？」

「うん？魔法世界だな。ベルカでもミッドでもない、この世界特有の魔法が使われてるみたいだよ。次元航行技術はないみたいだけど」

「そうですか……」

その後、この世界について、色々と説明。今は大戦中だとか。

ちなみにだが、リインフォースも呼び出した。今代の主は、歴史上最高の力の持ち主らしく、主の力に依存するヴォルケンリッターも強くなっているらしい。

何しろ、全員が全員、SSSランクになってるんだから……。

話を聞いてみたところ、俺の三十分の一もあれば、魔力量だけでSランク認定されるらしいのだ。なんと言うチート。

そうだとしたら、俺のランク幾つだよ。SSSを超えたEXランクかよ。まあ、細かいことは気にしないでおこう。うん。

ちなみにけど、みんなの騎士甲冑は原作と同じにした。俺もはやてと同じ騎士甲冑だ。ぶっちゃけると設定がメンドイ。スカートだけど気にしない。今の俺は男の娘。

「さて、そろそろ行くとしよう」

「何処にですか？」

「ん、てきとーにな。夜天は旅をする魔道書。だから、主も旅をするのさ」

そう言つて、俺たちはふらふらと歩き出す。二十分も歩いていると、俺でも感じ取れるくらいに大きな魔力を感じた。

多分だけど、アレがナギだね。そう思って歩いていると、俺たちの向こう側から赤毛の馬鹿と、むつつり侍とロリジジイに胡散臭い人が歩いてきた。

そして、俺たちの姿を確認すると、先頭の馬鹿。ナギ・スプリングフィールドが声をかけてきた。

「おい！そこのおまえ！」

「あん？」

シュベルトクロイツで肩をトントンと叩きながらそいつを見る。うーん、若いねえ。

ていうかシグナム。剣抜くな。少し落ち着け。

「おまえ、いったい何者だ？」

「うーん？夜天の王。国後要だ」

「王……ですか？」

「うん。聖王とは違うけどね」

「こまけえことはいい！俺と勝負しろ！」

おい、何だその馬鹿みたいな思考は。明らかな脳筋じゃねえか。

「ザッファイー。相手してやれ」

「御意」

ナギの千の雷を、盾の守護獣らしく、ザッフィーは防いで拳での殴りあいへと発展していく。

「悪いが、こちら相手をしてもらっ

そう言っで、ムツツリ侍こと、近衛詠春が刀を抜く。

「シグナム」

「はい」

剣には剣だろ？

「では、私も」

胡散臭い人。アルビレオ・イマが黒い塊。重力魔法を出す。

「む……ヴィータ。頼む」

「分かった！」

飛び出していくヴィータ。アルビレオは原作でも戦い方がよく分かってなかったからな。

「ふむ、最後はワシじゃ。相手をしてもらおう」

「シャル。下がってろ」

「はい」

軽いなオイ。まあいいか。

「リイン。ユニゾンするぞ」

「はい」

「「ユニゾン！イン！」」

あ、そういえば、平常時の容姿とか確認してなかった。まあいいか。背中から三対六枚の黒い羽が生える。これは余剰魔力を外部で制御しているエネルギーフィンだ。戦艦からの魔力供給を受ける人間とかなら大抵作って使える。

俺の場合は、体外で即座に魔法を起動させるために使われている。歴代の夜天の主は魔力の素質が高いからな。

ちなみにだが、このフィンはイメージによるものなので、人によって形が変わる。

「刃以て血に染めよ！穿て、ブラッディダガ！」

二十一発のブラッディダガを作り出して発射する。

しかしながら、ロリジジのゼクトは軽い身のこなしで回避する。

ブラッディダガは誘導制御が出来るが、弾速が速いので、戻すには直線的にターンさせるしかない。

ヴィータのシュワルベフリーゲンならば弧を描いて戻す事も出来たのだが。まあ、どうでもいい。

俺はブラッディダガの誘導制御を手放し、消滅させる。その隙にゼクトは瞬動で俺に接近していたが。

「闇に染まれ。デアボリックエミッション」

俺を中心に放射された広域攻撃魔法によって、魔力を大幅に削り取られる。

それに、殴られたとしてもバリアジャケットを貫くほどの腕力が出せるわけもない。

多分だけど、ナギがラカンくらいじゃないと無理だと思う。あるいは、豪殺居合拳ならいけるかも。

魔力を削られたことに驚いたゼクトは後ろに下がり、距離を持って魔法を使おうとしている。

詠唱の言葉が発音がよくわからないけど、多分だけど雷の暴風とかだと思う。

「パンツァーシルト！」

軽く腰を落とし、プロテクションを斜めに展開する。

発射された雷の暴風らしきものを軽々と吹き飛ばす。残念なことに、そちらの魔法と違って純粋な防壁だからね。

属性の相性とか、展開時間とかの欠点があるんだろうけど、こっちはそんなものはない。純粋に術式の構成と魔力量の問題だから。リインと俺が同時に制御をしているので、なれていない俺が展開しても、これだけのふざけた硬度があるのだ。

「鋼の軛！」

拘束魔法をゼクトの足元から展開。幾本もの鋼の鎖のようなものが飛び出し、ゼクトを拘束しようとする。

やはり、身軽なステップで避け続け、俺は更に数を増やしていく。そのうちに、どんどんと身動きが取れなくなっていく、少しずつ攻撃が命中していく。

鋼の軛の制御は俺が担当し、リインにはもう一つの魔法を担当してもらう。

空に銀色の魔法陣が幾つも展開され、そこに強大な魔力が集中していく。

「響け終焉の笛……ラグナロク！」

そして……ゼクトは光に包まれた……。あ、俺は非殺傷にしてるか
ら死んでないよ？

思念通話でもみんなに非殺傷にするか、殺傷設定でも殺さないように
しろって言ったし。

というか、非殺傷設定という設定が存在するかどうかも分からなかつたので、出来るだけ傷つけないようにと置いて置いた。

一人でも死んだら原作がどうなるか分からなかったからな。

三十分ほどして、全員が全員フルボッコになっていた。

一番魔力が強いナギですらS+の使い手で、詠唱もアンチョコ頼り。
つまるところ、デバイスなしで魔法を使っているようなものなのだ。
それを補って余りある戦闘センスがあるのだが、SSSランクとい
うふざけたレベルのヴォルケンリッター相手では分が悪かった。

というか、シグナム達が居れば、恐らくは国を落とせると思う。だ
って、リリなのだと、Sランク同士が戦うと町が壊滅するって話だ
し。

SSSランクともなるとどうなるか分からん。だって、こいつら力
ートリッジ無しでカートリッジが必要な魔法使ってたもん。

ギガントフォルムをカートリッジ無しとかふざけてるんですかあな
たは。流石に時間掛かるみたいだけどね。

「主力ナメ。この者達はどうすれば？」

「ん？まあ、眼が覚めるまで待とうか？どうやらだけど、この人たちがかなり強いみたいだし、仲間に入れてもらうのもいいかもね」

「なるほど」

「カナメ、腹減った」

「む……」

ヴィータに騎士甲冑の裾をつかまれて、上目遣いで頼まれたら我慢しろともいけない。

シャルとかだったら即座に我慢しろと言い捨てるのだが。俺は幼女には優しいんだよ。

「仕方ないな。ここらへんは森があるし……つってもさっきの戦闘で殆ど焼け野原だけど、何か動物が居るかもしれない。

大物を見つけたら思念通話で連絡すること。それじゃ、みんなで森を探そう」

一応、シャルを見張りとして残した。だってシャルって拘束魔法くらいしか使えないんだもん。

まあ、ナギたちは大分魔力も削られてるし、拘束するのは難しくないだろう。彼女もアレでも百戦錬磨のヴォルケンリッターの一員なのだから。

三十分程森を飛び周り、兎を捕まえたが、全員で食べるには足りないので逃がした。

シグナムの思念通話で竜が出たと言われたが、それほど強い相手ではないそうなので、バトルジャンキーの彼女に任せることにした。シグナム以外の全員が一箇所に集まり、今まで一言しか喋っていなかったザファイラと話して見る事にした。

「ザッフィー。君って守護獣なんだよね？」

「はい」

「素体は？」

「狼ですが？」

「ふむふむ。ところでだけど、青い狼って見たことないけど、ベル力では結構居たの？」

「いえ、違います。守護獣の毛色は魔力光に依存します」

なるほど。だからアルフの毛色がオレンジなんだな。どうでもいいけど、使い魔と守護獣の魔力光って主の魔力光に依存するんだろうか。

アルフしか使い魔が出てないから詳しくは分からないけど、アルフとフェイトの魔力光って似てたしな。

ザッフィーは誰かが作った守護獣をヴォルケンリッターに組み込んだとも考えられるし。

「うーん……ザッフィーには気を習得してもらいたいよなー……」

かめはめ波とか出来そうだし。シグナムにはヒテンミツルギスタイルとか使ってみて欲しい。飛天御剣流じゃないのがミソ。

俺としてはこの世界の魔法を覚えてみたい。そして、指パッチンと
いっしょにカマイタチを！

「手伝ってやるのか？ 真つ二つだけだな！ フハハハハハ！」

「あ、主？」

「あ、ごめん」

いつのまにか声に出してたっばいな。何かザッフィーがおびえてる。
今は人間形態なのに、耳をピン！と逆立ててる姿はなんとなくだが、
かわいく思える気もする。

うーむ、アルフがロリフォームが出来たんだから、ザッフィーはシ
ョタフォームが出来てもおかしくはなさそうだが。

というか、アレって変身魔法なのか、使い魔としての特性なのかよ
く分からないんだよな。

「使い魔……使い魔か……」

くるりと辺りを見回し、フェレットっぽい動物を発見。シュベルト
クロイツで拘束魔法を発動し、引き寄せる。

「なあ、シャマル。守護獣作成の術式って知らな！？」

振り向くと、ザッフィーが漢泣きをしていた。

「あ、主！ 捨てないでください！」

「捨てね よ！ うおお！ くつつくなあああ！……こ、こら！ 見てな
いで助ける！」

「ザッフィーは、強いね」

「ありがとうございます」

そこは唸り声のような咆哮を上げようぜ！いや、ザッフィーだと駄目かな。筋肉と身長とロマンが足りない。

「あーてて、いきなりなにしゃがる！」

「それはこっちのセリフだ馬鹿野郎。いきなり喧嘩は吹っかけてくるし」

「あー……わりい。でだな、おまえ、名前は？」

「国後要だ。要でいいぞ」

「じゃあ、カナメ。紅き翼に入らないか？」

「ん？みんなはどうする？」

「主の意向に従います」

「あたしはカナメについてくぜ」

「ん、私はカナメちゃんの言うとおりに」

「主の願いが我等の願いです」

「私もです」

上から順に、ザフィーラ、ヴィータ、シャマル、シグナム、リインフォースだ。

「んじゃあ、俺達は紅き翼とやらに入るぜ。おまえらとなら、退屈はしそうにない」

「よっしゃ！」

んゝ原作だと七人しか居なかった紅き翼が一気に13人に増えたな。いや、でもな。七は孤独な数字で、魔術的な意味を持つけど、13って言うのも魔術的な意味を持つからな。

13って言うのはかなり不吉な数字だからな。西洋の忌み数。十三番目のアルカナは死神。ジェイソンの蘇る日は忌み数が元だし、十三は死刑台の段数でもある。どうでもいいが、ゴルゴ13も忌み数を元にしてると思うんだ。果てしなくどうでもいいけど。

第一話 ヴォルケンリッターの出会いと紅き翼との出会いと（後書き）

改行が難しい……

6 / 8 23 : 17 修正しました

第二話 脳筋と姫君とストーカーと

今、俺はゼクトにこの世界の魔法を教えてもらっている。別に使い道は余り無いんだけど、何かに使えるかもしれないし、

「ふむふむ、カマイタチって結構初歩の魔法なのな」

「うむ。じゃが、初歩だからこそその魔法でもあるのう。無詠唱で連続して放つ事も可能じゃし、消費魔力も少ない。

風属性の使い手ならば、大量のカマイタチを一瞬で発生させることも可能じゃ」

そういえば、グラサンヒゲオヤジが既に指パッチンでカマイタチをいや、だけど、今なら俺がやれば、俺がオリジナルになるはずだ。

「よし、素晴らしいきフィッツガラルドごっこの力を見せてやる！」

ぱっちいーん。と、素晴らしい音が響き、素晴らしい切れ味のカマイタチが発射され、素晴らしい木が素晴らしい切れる。

素晴らしいがいらぬ所もあつた気がするけど、気にしちゃう駄目よ。

「ふむ、初めてにしては中々じゃな」

実際のところ、演算はシュベルトクロイツに任せてあるんだよね。ちなみにだが、この世界の魔法は、大気中の精霊に魔力を与えることで使っらしい。

属性というのは本人の性格などから決まり、精霊との親和性の高さを示すらしい。精霊にすかれ易い体質の人間なども居るらしい。

また、上位古代語魔法。たとえば燃える天空や千の雷は、はるかな

昔に人間に倒された精霊王に力を借りる魔法らしい。

契約に従い、我に従え高殿の王。などの呪文で分かると思うが。

「でもまあ、使いにくいからパス。これはネタで使うとしよう」

ザフィーラは詠春に気の使い方を習っている。というか、俺が進めたのだ。

ヴォルケンリッターのみんなはプログラムではあるが、確かに生命ではあるのだ。詠春の話では、気もあるらしいし。

「はあ~~~~！か〜め〜は〜め〜波アアアアアア！！！」

「ぶほおっ！」

「ぬおお！？汚いわ！」

ザッフィーにネタで教えた掛け声が実際に使われて、思わず水を噴出してしまった。

というか、実際に何か飛び出してるし。いや、飛び出してるのは魔力か。

うーん……なるほど、感掛法の応用か。気と魔力は反発するから、魔力で気を反発させて勢いよく放射する。

なるほど、それは面白そうだな。気の扱いが上手くなれば、反発させないでも飛ばせそうだけど。

「よし、手本を見せてやる」

「なんじゃと？」

手のひらに生命エネルギー。気を大量に集中させていく。普通の気

の使い手千人分ほどの量を手のひらに凝縮し、それを魔力で包み込む。

内部で魔力は反発し、乱反射し、勢いを増していく。超高密度のエネルギーの塊は輝きを増していく。

「フハハハハハハ！！ここに銀河系が吹き飛ぶほどのパワーが溜まって来ているぞ！」

出来るだけ声を低くしてみたけど、女の子が無理に男声を出してるような声しか出なかった。

うーむ、年齢を十前後で固定してるからなあ……。

ってこら、誰だ、パワーの前にストレッチとかつけ足したの。俺がストレッチマンみたいじゃないか。

あれか、元氣玉を作る為に、みんなのストレッチパワーを分けてくれとかいうのか。どうだあ、腕の辺りがじんじんしてきただろお。ってか。イヤだな、そんな奴に元氣わけたくない。

「いや、そこまではいかんじやろ」

「そこはノリだよ。ゼクト。なんなら太陽系でもいいけど」

「そうかの」

魔力弾核の前面を開放し、そこから乱反射し、加速された高密度のエネルギーが放出された……。

ズドオオオオオオオオ……！！！！

えーっと……銀河系は吹っ飛ばなかったけど、山は吹っ飛んだわ。その後、詠春に拳骨を食らった。思わず頭を抑えて、詠春を上目遣

いに睨んだ。

「ぐっはああああ!!!!」

何故か詠春の方が致命的なダメージを受けていた。

ああ、そういえば、今の俺って男の娘だっけ……。

ちなみにだが、俺の容姿を軽く説明しとくよ。

髪の色は茶色でショートボブ。ぶっちゃけるとはやてだな。

顔は綺麗やカッコイイというよりも可愛いという系統だ。ぶっちゃけるとはやてだな。

目の色もぶっちゃけるとはやてだな。

ユニゾンすると銀髪紅眼になるのが違いといえば違いだな。ユニゾンすると、眼が少しつりあがるのでカッコイイ系になるかもしれないけど。

神よ、ちょっと手を抜きすぎじゃないかい？まあいいか。

「おい、飯が出来たぞー」

お、飯が出来たか。いやー、今日はなべかー、楽しみだなー。

うわー、いい匂いじゃー……それに、しょうゆに大根卸しという日本人の心のような料理があるのだ。

欲を言うならば米と味噌汁が食いたいところだな。後、ファーストフードの安っぽいハンバーガー。たまに食いたくなるんだ。

って、アレ？そういえば、なべの時にラカンが来たような……。

そう思っていると、空から剣が飛来し、なべを吹き飛ばし……スロ
ーモーションで俺へと飛んできた。

「うきゃああああああ!!!!」

あつちいゝゝゝ！！ちくしょう！騎士甲冑の設定で液体の通過設定が未設定のままだった！

ちつくしょゝ！火傷の跡が残ったらどうしてくれんだ！ぐらぐらに煮立った鍋だったんだぞデメエ！

騎士甲冑の耐熱保護のお陰でやけどはしてないけど、めちゃくちや熱かったんだぞ！

「平気ですか？カナメ」

「う、うう……大丈夫じゃない……」

うう、アル。いつもは胡散臭い上にうざったくて強いかどうか分からない上に、変態なおまえだけど、優しいんだな。

「なんだか心配したのが損な気がしてきました」

「ありがとう、アル……」

「ええ、あなたの顔に火傷が出来たら大変ですから」

「へ？」

「へ？ではありません。ほかの皆も怒り狂って筋肉達磨をボコボコにしていますよ？」

言われたとおりに見てみると、ラカンがリンチされていた。

だって、原作ではナギと相打ちしてたけど、そのナギと一対一で圧勝する守護騎士が五体ですよ？

勝てる人間はこの世の何処にも存在しないって。

「いや、ナンデそんなに怒ってるの？」

「なんでとは……カナメ。可愛らしい女性の顔に火傷が出来たら大変でしょう？」

「いや、俺は男だけど？」

「……………すみません、もう一度言っていただけますか？」

「いや、だから俺は男だよ？」

「ふむ。男の娘というのでもいいかもしれませんがね。ちょっと、これを着てみませんか？」

何処からともなく取り出されたゴスロリ調のメイド服。

スカートの騎士甲冑を身につけていた俺に、メイド服を着ることに抵抗は無いッ！

しかしまあ、今はそんなことしてる場合じゃないので、あとにすることにした。

ちなみにだが、俺が男だというのはアルはほかの皆に教えるつもりは無いらしい。面白そうだからいいよ、それで。

ああ、ヴォルケンリッターの皆は俺が男だって知ってるよ。夜天の書を通して全員がリンクしてるわけだからね。

俺からの情報は意図的に止められるけど、とめる必要も無いから止めていない。リインはユニゾンするから分かるし。

原作では半日くらい続いた戦闘も全員の手にかかれば十分以下で終わりを告げた。

ラカン俺に対して土下座で謝り倒した。スカートの中を見られた

ので踏み潰した。

言っておくが、俺に女装趣味は無い。だが、この騎士甲冑は元がリ
ンフォースのもの。なので、下着も女物である。

ちなみにだが、紅き翼は滅多に町に逗留しないので、数日風呂に入
らない事はザラ。たまに体を洗えても外での水浴びである。

俺は水浴びが好きではないので、全員が体を洗い終えた後に水を魔
法で暖めている。温泉最高ーーーーッ！

ちなみにだが、シグナムも風呂好きなのでいっしょに入る。ヴィー
タは俺と一緒に入るたがるのでいっしょに入る。シャルも一人で
入るのが嫌だからといっしょに入る。

10歳程度の体にしてあるので、性欲も湧かないからねー。こんな
風に、俺は女性たちと一緒に入っているので女だと思われるの
かもしれない。

ついでに言うと、たまに勘違いしている人が居るのだが、魔法で火
や氷を出せるのは変換資質がある人間だけではない。変換資質とい
うのは魔力を放出すると、その資質に応じた物に無意識で変換する
事なのだ。

なので、変換資質が無くても工程を組んで使えば、炎や氷を出すの
も可能だ。実際のところ、クロノがエターナルコフィンを使ってい
るし、ヴィータが炎を出したこともある。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
い……………」

「反省したか？ だったら許す」

「ありがとうございますっ！」

泣きながら走り去っていく、殆ど全裸の筋肉達磨。さようなら。

「カナメ大丈夫だったか？」

「大丈夫大丈夫。火傷にもなってないし、ちょっと赤くなっただけだよ」

うーん、ヴィータは優しいなあ。頭をなでてやろう。ちなみにだが、ヴィータのデフォルト設定年齢は6〜7歳程度。つまり、小学校一年生程度である。

なので、俺よりも背が少し低いのだ。小さい頃は女の子の方が発育いいからねー。

「なんだよう、撫でるなよお」

嫌がるそぶりは見せるが、嫌よ嫌よも好きの内〜とな。ああもう、ヴィータはかわいいなあ！

ぎゅ〜とヴィータに抱きつき、くるりくるりと回転する。古代ベルカ仕込の肉体強化は伊達じゃないよ。

「いいですね、美少女の絡み合いというのは」

かたっぽ男だけどね。

数日毎にジャックが強襲してきて、いつその事仲間になった方が速いと言う事で仲間になっていた。お前等の理屈が俺には理解できないよ。

グレートブリッジ奪還作戦。

原作の大戦ではかなりの大規模な戦いで、かなりの大きさの拠点だ。実際のところ、かなりの高さから見ているのに凄く長い。

何しろ、全長300キロというふざけた規模の要塞だ。

ヘラス帝国は実験すらも済んでいない大規模転移魔法の実践投入でグレートブリッジを奪い、俺達はそれを奪還するのだ。

ぶっちゃけると、原作のメンバーだけで奪還できたのだから、俺たちが居れば楽勝だ。

実際楽勝でした

俺は遠距離からの砲撃の連射。ラグナロクやスターライトブレイカー、他にもフリースヴェルグに破壊の雷や大規模デアボリックエミッションなどの広域殲滅魔法の連射。

前衛二人とザフィーラは呐喊していき、シャマルはメンバーの回復を担当していた。

俺は初の実戦ではあったが、仲間達の手前、怯えて何も出来ないなんて出来ない。必死で魔法を使いまくった。

どうかでタガが外れてしまったのか、ゲタゲタ笑いながら魔法を連射していたらしい。

ちなみにだが、この戦の少し後にガトウとタカミチが仲間になった。握手した時にタカミチの顔が赤かったけど、風邪でも引いたのだろうか？

もしかすると、俺に一目ぼれしたとか……さすがに無いか。

そうそう、この頃に俺達のファンクラブが出来た。ラカン是最強の奴隷剣闘士だったので、大分前からファンクラブがあったみたいだけど。

おまけに俺達の二つ名までついた。

俺が、「白銀の閃光」「魔道の賢者」「騎士達の幼き王」「マスタ
ー・オブ・グリモワール」とかだ。

シグナムが「烈火の騎士」「爆炎の剣姫」「紅の華」「メロンボム」

ヴィータが「鉄槌の騎士」「破壊の鉄槌」「蹂躞の姫」「漢の浪漫
武装」

ザフィーラが「守護の騎士」「鋼の獣」「猛る獣王」「剣がさん
ねーの二人目かよ。いや、あんたら何もんだよ」

シャマルが「癒しの騎士」「深緑の姫君」「紅き翼のお姉さん」

リインフォースが「白銀の騎士」「蹂躞せし女王」「同体の姫君」

最後の方に出てる二つ名はネタ的なものだ。リインフォースのは俺
とユニゾンするからだと思う。

大体の場合は俺とユニゾンしないで戦ってるからこそ、二つ名がつ
いたんだけどね。

ある日、俺たちはガトウにウェスペルタティア王国の首都にまで呼
び出された。

「何だよガトウ。わざわざ本国首都にまで呼び出して」

「あつて欲しい人が居る。協力者だ」

「ッて言うと、結構な立場の人なのかね」

本国の首都じゃないと来れない人というと、結構な立場の人しかないだろう。

俺は原作知ってるから、王女様だって知ってるけどね。

「協力者？」

「そうだ」

声のした方を向くと、そこには特徴的な髪型をしたおっさんが居た。

「マクギル元老議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

わしちゃう。って、こっちにも関西弁ってあるんだろうか？

「ウエスペルタイア王国……アリカ王女様だ」

ラカンが声を掛けると、気安く話し掛けるな下郎と言われていた。俺は話し掛けなかったよ。だって興味ないし。

その後、惚れた腫れたの騒ぎになったが、俺たちはどうでもよかった。さつさと戦争終わらせてゆつくりしたいよ。

さてさて、紅き翼は休暇になり、ナギやラカンにヴォルケンリッターの皆は調査向きじゃないので、他の皆で調査することになった。

「ふわあ~~~~……久しぶりにゆつくり出来るなあ」

「なあなあ、カナメ。あれ食ってみよーぜ」

ヴィータが指差した先にはアイスのような氷菓子。幸い、金は結構あるので買ってみた。

ヴィータはバナラ、俺はチョコ、シグナムは抹茶、シャマルはストロベリー、ザフィーラは甘いものは苦手だそうだ。

というか、この世界に抹茶なんてあるんだな。案外旧世界の文化も流れてきてるんだろうか。

「ん、ヴィータ。一口交換しないか？」

「んー、ほら」

ヴィータのを一口もらい、こちらも一口食べさせる。うん、バナラもうまいなあ。

なんと言うか、こっちの世界の食い物ってあんまり美味くなかったんだけど、お菓子系統だけは美味いんだよなあ。

ズズンッ……

なんだか随分と大きな地響きがしたと思ったら、なにやら爆発が起きたらしい。

あー、今日がナギが敵の秘密基地を潰す日だったのか。俺たちはバカンスを楽しんでたからなあ。

その後、急いで拠点に戻るとナギが詠春にビビシと怒られていた。何でも一晩中姫様を連れ回して、敵の基地を潰したのだそうだ。馬鹿じゃないのか。どんな危険な夜遊びだよ。

その過程で、テロに関与してると思われていた執政官。メガロメセンブリアのナンバー2がテロに関与してる証拠を手に入れたらしい。

その数日後。

俺たちが詠春と一緒に部屋でくつろいでいると、いきなり捕まえられるそうになったので、全員非殺傷のデイバインバスターでぶっ飛ばした。

なるほど、原作では詠春たちはこんな風になってたんだな。脱出してナギたちと合流しないと。

「昨日まで英雄だったのが一転して反逆者か……」

「我等は最後まで主の傍に」

「ありがとう、みんな」

俺達紅き翼は、アリカ姫の救出のために、夜の迷宮へと襲撃を仕掛けた。

最上部の部屋に捉えられていたのだが、俺たちはゲームのようにまじめに進んだりはしなかった。

天井をぶち破り、壁をぶち破り。正直な話崩れるんじゃないかと思っただ、案外平気だった。

「助けに来たぜ、姫さん」

「遅いぞ、我が騎士」

奥の方には角の生えたヘラス族の第三皇女テオドラが居た。そういえば、ラカンもヘラス族のはずなんだが、角は生えてないんだろうか。

それともアレなんだろうか。奴隷のヘラス族は角を折られるなんていう決まりでもあるのだろうか。

案外ありえるかもしれない。他の種族には無いものだし、無くても問題が無いのだから。

まあ、どうでもいいか。そして、俺たちは紅き翼の秘密基地へと二人を連れて行った。

「なんだ、これが噂の紅き翼の「秘密基地」か！どんなところかと思えば……掘っ立て小屋ではないか」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ、このジャリは」

ラカンが額に青筋を立てながら言う。シグナムは苦笑している。

「何だ貴様！無礼であろう！」

「へっへ〜ん！あいにくとヘラスの貴族に貸しはあっても借りはないんでね！」

ガキがおまえは。子供相手にムキになってんじゃねえよ。

「何い！？貴様何者だ！」

アハハ、面白いやつらだ。それとラカン。おまえの精神年齢は幾つなんだ。

「あのやけに元気な少女が……」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女ですね。アリカ姫と交渉の為出向いたところを一緒に敵組織に捕縛されていたのです」

完全なる世界にとって、生かしておく必要があったって言うことだ

よなあ。何の意味があるのかよく分からないんだけど。

いや、世界を無に還す術式の中で魔法を使える王族の魔力に関連があるのか？

それとも、世界を無に還す術式に必要な黄昏の姫巫女に関連があるのか？

いや、そんなことを気にしても今は無駄か。

「さーて姫さん。助けてやったはいいけど、こつからは大変だぜ？連合にも帝国にも……あんたの国にも信用できる味方はいねえ」

それどころか、国の人間こそ信用出来ないのかもしれない。

「恐れながら事実です、王女殿下。殿下のオステシアも似たような状況で……最新の調査ではオステシアの上層部が最も「黒い」……という可能性さえ上がっています」

そもそもオステシアの第二王女を戦争の道具に使おう。なんていう答えが出てる時点でおかしいんだよな。

上層部所か最上部。それこそ、今代の王も完全なる世界の傀儡になつてる可能性がある。

「やはりそうか……我が騎士よ」

「だあら、その「我が騎士」って何だよ！姫さん！？クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？」

「もう連合の兵ではないのじゃろ？ならば主は最早私のものじゃ」

「な……」

おうおう、照れてるぞwwwwwwうおお!?魔法の射手が飛んできやがった。

「連合に帝国…そして我がオステイア。世界全てが我らの敵という訳じゃな」

常識的に考えて勝ち目はねーわな。

相手は数千数万。対するこちらはたったの十三人。タカミチには戦闘力はあまりない。実質的な戦闘メンバーは12人だ。

「じゃが…主と主の「紅き翼」は無敵なのじゃろ?」

一瞬ナギが呆けたような顔をして、その後ろに居るラカンは無敵という言葉に反応している。

おい、頭の上のテオドラがおまえをハゲにしようとしてるぞ。

「世界全てが敵　よいではないか。こちらの兵はたったの十三人。だが、最強の十三人じゃ」

宣言するように言い放ち、アリカ姫は強い意思を込め、言った。

「ならば我等が世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が盾となり、剣となれ」

その言葉に、ナギは驚いた表情を浮かべ

「……へっ。だから俺は魔法使いだっつーのに……。やれやれ、相変わらずおっかねえ姫さんだぜ」

すぐに勝気で獰猛な笑みを見せた。

「いいぜ、俺の杖と翼。あんたに預けよう」

夕焼けの中。ナギは忠誠なる騎士のように、アリカ姫の足元に跪いた。

どうでもいいけど、この頃にクルトが俺達を追っかけてきた。

第三話 最終決戦と真の黒幕と

俺たちは頭脳労働担当と肉体労働担当に分かれた。

頭脳労働はタカミチ、アル、姫様一人と偶にガトウ。

肉体労働はナギ、ラカン、ゼクト、俺達だ。

肉体労働担当が敵だと判明したやつらを片っ端からぶっ飛ばしていき、映画なら三部作。単行本なら十四巻は行くであろう六ヶ月の死闘の後 遂に奴等の本拠地を突き止める。

そこは世界最古の都、王都オスティア空中王宮最奥部「墓守り人の宮殿」

まあ、簡単に言つとラストダンジョンだな。

「不気味なら位静かだな、奴等」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「案外、とつくの昔に尻尾巻いて逃げ出してるのかもね」

「ハッハッハ！そうかもしれねえなあ！」

まったく、最終決戦だつて言うのに。おまえらちつとも緊張してねえなあ。

かく言う俺も大した緊張はしてねえ。ヴォルケンリッターの皆もだ。シグナムとヴィータは不適な笑みを浮かべ、ザフィーラは相変わrazの無表情。

シャマルは変わらず柔和な笑みを浮かべている。うーん、シャマルお母さんって感じたな。

「ナギ殿。帝国・連合・アリアドネ 混合部隊、準備完了しました」
んー、確か、セラスさんだったっけ。

その後、ナギとザフィーラがサインをねだられていた。実を言うと、ザフィーラは案外もてるのだ。

ラカンと違って下品でもない。寡黙ながらも誠実で、役目はきちんと果たすと。

俺達のファンクラブでシグナムの次に女性ファンが多いのだ。シグナムはお姉さま的な意味で女性ファンが多い。

俺はというと、男女共に人気があるそうだ。ちなみにだが、ファンクラブのサイトを見てみたら、俺の性別は不明となっていた。

確証が無いから、そのうち登録するのだろうな。だが、紅き翼にバラしてからでないとな……クッククック。

つと、通信か？ガトウからか。詠春とアルが通信をキャッチする。

「連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう、決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

ちっ、後一時間もあればよかったんだが……いまさら言っても始まらないか。

「ええ、彼らはもう始めています……「世界を無に帰す儀式」を。世界の鍵「黄昏の姫御子」は今、彼等の手にあるのです」

姫子ちゃんか。そういえば、アスナに会った事ってないんだよね……

…。

「ああ」

「さて、最初に俺が突破口を開く。最大最強の魔法を全力全開でぶっ放す」

「なにっ！？今まで使ってたのが最強じゃないのか！？」

詠春が驚いているが、仕方ない事ともいえるだろう。

「ああ、俺の後ろに居ろよ。あたれば最後、消し飛ぶぞ」

俺はリインフォースとユニゾンし、詠唱を開始する。

「咎人達に、滅びの光を。天空に掛かりし弧。七色の虹よ。歪めよ極光！ アルカンシエル！」

何故か夜天の書に記録されていたアルカンシエル。アレは本来ならば艦載兵器なので、個人の魔力で放てるようなものではない。

しかしながら、俺のチートな魔力量によって、数百キロを消し飛ばすなどというふざけた事は不可能だが、数キロを消し飛ばすくらいは出来る。

放たれた極光は大量の召還魔や魔族達の中心に着弾した……が。

「おい、カナメ。何もおこらねえぞ？」

「見てろ。もうすぐだ」

そうだった瞬間。空間が歪む。

みしりみしりと空間が歪み。その直後。
中心から半径約二キロ程度の敵が消滅した。

「あなたも大概バグキャラだとは思っていましたが……空間ごと敵を消し飛ばすとは思いませんでしたよ」

「はは、さあ、行こう！」

俺たちは墓守り人の宮殿に突入し、フェイト・アーウェルンクスとの戦闘に突入する。

原作とは違い、こちらの人数は本来の二倍近い。ラカンとナギ以外の戦闘を手伝い、あつという間に敵を殲滅する。
最後の一人、フェイトもナギに敗れた。

「見事……理不尽なまでの強さだ……」

「黄昏の姫巫女は……どこだ？消える前に吐け」

後ろから、仲間達が歩いてくる音が聞こえる。
そう、ここだ。ここで、ライフメイカーの……。

「フ……フフフ……まさか君は、いまだに僕が全ての黒幕だと思っているのかい？」

「なんだと……？」

一瞬にして膨れ上がった魔力の感覚。俺は全力でナギに飛んで近づき、ナギを突き飛ばした。

「ガッ……！」

俺とフェイトの腹を貫通していった黒い閃光。

「カナメエッ！」

「主っ！」

「カナメちゃん！」

駆け寄る仲間達。クッソ、胃が完璧に消し飛んでるぜ、この場所は閃光が飛んできた方向は、俺の正面。仲間たちから見て右側。

「誰だっ！？」

いち早く気づいたのはラカン。紅き翼でのヴォルケンリッターを除いて、最も多くの修羅場をくぐりぬけた奴だからな。
ヴォルケンリッターは俺の怪我に動転して気づいてねえ。

「全、員っ！防御魔法をっ！」

叫びながら、俺は二つの最強防護を展開する。俺とリインがいるからこそ出来る芸当だ。

一瞬遅れて、ゼクトとアルが二人で最強防護を展開し、ザファイラとシヤマルも最強防護を展開する。

四つの最強防護で第一波と第二波の魔力の波動を防いだが、第三波でそれも崩壊する。

ラカンの両腕が吹っ飛び、詠春やアルも軽くは無い傷を負う。

だが、俺が突き飛ばしたナギは先ほどの攻撃で無傷だった。

「ぐっ……バカな……！」

「まさか……アレは……」

霞む視界の先、そこには、黒く暗い、真の敵が。ライフメイカーが居た。

アレには、絶対に、勝てない……絶望が心を覆いかける。だが、それでもだ。

負けるかもしれない、勝てない。そんなんじゃない、あ駄目なんだ。

御伽噺の勇者は強かったから勝ったんじゃない、負けなかったから強かったんじゃない。

諦めない。それこそが強さの象徴。絶望的な戦力差でも、圧倒的な龍が相手でも。

勇者は絶対に諦めなかったから、勝てた。

「諦めんなよ……！」

「……え？」

「絶対に諦めんなよ！勝てないからって諦めんなよ！負けるかもしれないなんて思っても、戦わなきゃいけないんだよ！」

「そう、だ……負けらねんだよ、俺たちは……」

ナギが立ち上がる。額から血を流し、足が震えていても、立ち上がる。

「ここで諦めちまったら、全てが終わっちまうんだよ！俺たちが守りたかった世界が！何もかも、消えちまうんだ！」

デバイスコアがひび割れ、機能停止寸前のシュベルクロイツを血塗れの手で握り締める。

膝が笑う。立つな、立つたら死ぬぞ。心のどこかで声が聞こえる。それでも、立ち上がる。立ち上がってみせる。

「負けらねんだよ……皆と一緒に駆け抜けた戦いも、バカやって一緒に笑った日々も、酒飲んでドンちゃん騒ぎした日も。

ここで負けちまったら何もかも全部が消えちまうんだよ！」

口から大量の血を吐き出しながらも、俺は立ち上がった。

「アル、シャマル。残った魔力で俺を治療してくれ。三十分。三十分だけ戦えればいい」

「無茶です！カナメ！ナギやラカンならともかく、貴方では死にます！」

「そうよ！カナメちゃん！休んでいて！」

「駄目だ。ナギ一人に任せちゃったら、駄目なんだよ」

デバイスに魔力を流し、リカバリーを掛ける。だが、損傷した部位は大きく、リカバリーは急場凌ぎにしかないだろう。

「ふふ、よかるう。ワシも行くぞ、ナギ、カナメ。ワシも傷は浅い」
傷が浅い。とはいって、それは皆の中でだ。ゼクトの脇腹は大きく抉れていて、僅かな身動きですらも激痛が走るだろう傷だった。

「私も行きましょう。主を前に出して、将たる私が後ろに下がって

いるわけには参りません」

血を流し、罅割れたレヴァンティンを支えにしても、シグナムは立ち上がる。

その瞳に燃え立つ気炎は紅き焰の如く。烈火の将たる彼女に相応しい勇猛さを湛えていた。

「アタシも行くぜ。カナメには死んで欲しくねーし……絶対に帰って決めてるんだ」

比較的傷の浅いヴィータも立ち上がり、グラーファイゼンを肩に乗せて、口から血の混じった唾液を吐き出す。

カートリッジを取り出し、それをグラーファイゼンに挿入する。

幼き少女に見える、鉄槌の騎士ヴィータ。彼女の瞳は蒼き怒りの炎を燃やしていた。

「私もだ……守護獣たる私が、主を守らずしてどうするのか……たとえこの身が砕けようとも、主は守りきって見せます」

満身創痍のザフィーラも、手の平から血を流す程に手を強く握り締め、口から血を流す程に唇を強くかみ締め。

体中に走る激痛を耐えてでも、ザフィーラは立ち上がった。

その瞳には盾の守護獣としての誇りを激しく燃やし、主を守るために立ち上がった、傷だらけの狼だった。

「みんな……」

俺は左の手元に浮かぶ、夜天の書へとコマンドを送る。

その途端に、半分以下へと減じていた魔力が更に減少し、三人の傷とデバイスを完璧に修復していた。

プログラム体である彼女たちは、主たる俺さえ居れば復活できる。それでも、それでもだ。死んで欲しくない。

シヤマルとアルに治療されたが、それは急場凌ぎ。内臓は滅茶苦茶なままで、呼吸をするたびに体の芯から激痛が走る。

「ゼクト！無理です！そんな無茶はやめてください！」

「ここで奴を止められなければ世界が全て無に帰すのじゃ。無理でもいくしかかるう」

ゼクトは呼吸を整えて、ライフメイカーを見据える。

その瞳には淡く燃える決意が見えた。

「待て！奴はマズイ！奴は別物だ！死ぬぞっ！態勢を立て直してだな……」

「馬鹿野郎！今戦わなきゃ駄目なんだよ！

今ここで戦わなきゃ全てが終わっちゃうんだ！

帰るんだよ！皆で帰って、またバカやって笑って、酒飲んで騒いで、そんなもって疲れて眠って。

そんな日々を過ごすために俺達戦ってたんだよ！世界を救うって言ったじゃねえかよ！」

「ハハッ……カナメの言う通りだぜ……態勢を立て直してたら間にあわねえよ。らしくねえな、ジャック」

「ナギ（カナメ）と俺は」

声がかぶり、ナギと顔を見合わせ。二人で笑った。

「無敵の魔法使いだぜ？俺達は勝つ！！任せとけ！！！！」

「そう、我等が主居る限り、必勝は揺るがない」

「アタシ達ベルカの騎士が、ヴォルケンリッターが居るから！」

「盾の守護獣たる俺が居るから！」

「主は絶対に負けない！！」

一丸となり、俺たち六人はライフメイカーへと呐喊する。

圧倒的なまでの敵。この世界の人間には倒せぬ敵。

だが、だがしかし。そう、俺達はこの世界の人間ではない。

ナギは旧世界出身の人間であり、俺は並行世界の人間。ヴォルケンリッターにいたっては人間ですらないプログラム生命体。

ゼクトは分からないが、俺たちが勝つ。それでいい。

「刃以て、血に染めよ！ブラッディダガー！」

42の魔力で構成された弾丸がライフメイカーへと発射され、ライフメイカーは黒い閃光で全てを打ち落とす。

「ナギッ！おまえは千の雷は使うな！体術か雷の投擲で的確に狙え！

シグナム！シュランゲフォームで、あの衣を叩き切れ！

グイーター！動きを見極めて、動きを止めた瞬間に最高威力の攻撃をぶっ放せ！それ以外は防御するだけでいい！

ザフィーラ！鋼の軀で移動範囲を狭めてくれ！出来れば攻撃も！」

俺の声に従い、各々が行動を始める。

黒き閃光が打ち出される前に、ミストルティンを放つ。

障壁を貫通することは適わずに、そのままに受けきれぬが、行動は確かに止まった。

「レヴァンティン！カートリッジロード！」

シグナムが鞘に剣を収め、レヴァンティンへと命ずる。

「Expression」

レヴァンティンはデバイスコアを煌かせ、その命令に従って、高圧縮された魔力が込められた弾丸を撃発する。

打ち出された弾丸に込められた魔力は圧縮され、レヴァンティンにこもる

「飛竜一閃！」

鞘から抜き放たれると同時に剣は分離し、剣の中心に通されたワイヤーを支えに蛇のように伸び、ライフメイカーの伸びる衣を切断し、障壁を幾枚も破る。

「おおおお！！！！攻撃なんぞせん！！！！」

ザフィーラが咆哮と共に、様々な場所から鋼の軋を飛び出させる。ライフメイカーの黒い衣を貫通し、障壁を幾枚も破り、拘束する。

「ラアアアアア！！！！」

ナギが六本の雷の投擲を撃ち放ち、それが障壁を破る。いったい何枚の魔法障壁を展開してるんだ！？

そのままナギは追撃へと移り、感掛法を発動し、惚れ惚れするほど

に冴え渡った技で殴り、蹴り飛ばした。

「響け終焉の笛！ラグナロクッ！」

頭上のベルカ式魔法陣にチャージされた莫大な魔力。

本来ならば広域に拡散するラグナロクを収束し、貫通力を高めた一撃を打ち放つ。

大量の魔力が込められ、威力はSSランクにも及ぶその一撃。

障壁を貫通し、打ち破り、ついにその身へと攻撃が及ぶ。

それを見逃さずに、鉄槌の騎士ヴィータは叫ぶ。

「グラーファイゼン！」

「Jaw h o l l !」

グラーファイゼンのデバイスコアが煌き、幾発もの弾丸が装填、激発され。膨大な魔力がグラーファイゼンに籠る。

グラーファイゼンのハンマー部は消失し、一瞬の後に巨大なハンマーへと変ずる。

そして、ヴィータがそのグラーファイゼンを振り上げると同時。数十倍もの大きさへと変化する。

「轟天爆碎！」

振り落とされる巨人族の一撃。ライフメイカーは飛行魔法によって逃げ出そうとするが、ナギが掃射した魔法の射手と、俺が放ったアクセルシューターが命中し、動きが止まる。

「ギガントシュラアア

クッ！！！！」

ライフメイカーに激突した巨大な鉄槌。ライフメイカーはいとも容易く吹き飛ばされ、宮殿の壁面へと激突する。

「百重千重に重なりて走れよ稲妻！千の雷！！！」

「空より来たりて敵を滅ぼす鉄槌となれ！破壊の雷！」

俺とナギが放った二つの莫大な雷光。

それは狙い違わずライフメイカーへと命中し、巨大な土煙を上げる。警戒を解かずに土煙の向こうを睨みつけ、フェイトごと貫かれた、あの瞬間と同じ反応を感じ取る。

「パンツァーシルト！」

展開された防御に任せて突っ込み、ナギも魔法障壁を展開して突っ込む。

後ろのシグナムはボーゲンフォルムへと変じさせたレヴァンティンを構え、シュツウムフルケンを発射直前で構えていた。

ザフィーラは俺たちの後ろに続いて回り、鋼の軛で黒い閃光を弾く。ヴィータも俺たちの後ろをついてきている。

墓守り人の宮殿は俺たちの攻撃に耐え切れずに、轟音を立てる。

土煙の向こう側で、ナギが渾身の力を込めて放ったアッパー。それによってライフメイカーの顔は吹き飛んだ。

「……クック……フフ……フフはは！」

地の底から響くかのような罅割れた声。

それは確かに、頭を吹き飛ばされたライフメイカーから放たれていた。

「はははははは！！！！私を倒すか人間！それもよからうッ！」

心底おかしそうに。悦楽の声で。ライフメイカーは嘲笑う。

「私を倒し英雄となれ！羊たちの慰めともなるう……」

24発のアクセルシューターと、ヴィータの放ったシュワルベブリーゲン8発。

それを受けてライフメイカーは吹き飛び、背後に展開された巨大な魔法陣から幾筋もの黒い閃光が輝き、今か今かと放たれる時を待つ。

「しぶてえ奴だぜ！」

「まっただ！」

俺とナギの呆れとも怒りともつかぬ声。

それを意にも介さずライフメイカーは続ける。

「だが、ゆめ忘れるな」

今まで心底おかしそうに笑っていた声が、途端に平常へと戻る。

「全てを満たす解は無い。いずれ彼等にも絶望の帳が落ちる」

黒き閃光が放たれるが、俺達は真正面から突き抜ける。

俺とナギとヴィータとザフィーラの四人が展開する鉄壁の守りを、黒い閃光は貫けずに弾かれる。

「貴様等も、例外ではない」

「ケツ」

「うつせえ！」

「ペラペラとしつけえんだよ！この黒助が！」

「かあああああ！！！！！」

黒い閃光を突破し、俺達は完璧に無防備となったライフメイカーの前へと出る。

「グダ、グダ、うるせえええッ！！！」

ナギの拳がライフメイカーを捉え、鈍い音と共に殴り飛ばす。ヴィータが放ったシュワルベフリーゲンがライフメイカーの衣を吹き飛ばし、ナギの放つ雷の投擲も衣を吹き飛ばしていく。

「たとえば、明日世界が滅ぶと知ろうとも！！！」

俺とナギの拳がライフメイカーを同時に殴り飛ばし、鋭く放たれた蹴りがライフメイカーを吹き飛ばす。

そのたびに響く轟音は既に生物を打ち据えた音ではなく、まるで無機物。そう、金属を叩くかのような音だった。

「諦めねえのが、人間ってモンだろうがッ！」

「そうっ！俺たち人間は歩いていける！滅びの道を防げるかもしれないのが人間なんだ！」

『そう、滅びの運命から逃げ出すことも、立ち向かうことも出来る

のが人間。そして、最後に勝つのも人間だ!』

俺の体の中から、リインフォースの叫びが響く。

その声は、悲痛な叫び。そして喜びの歓声。幾度も幾度も世界を滅ぼしてきた、闇の書と言われたロストロギア。

けれど、その絶望の運命から、滅びの運命から救い出してくれたのは三人の少女。

ここではない、何時か、何処かの世界で。けれど、確かに。救われ、今ここへと至っている。

ナギの持つ、長柄の杖にナギの持つ、最後の魔力。けれども力強く脈打つ力が、杖を、神々しく輝く槍へと変じさせる。

俺は体に残る、最後の魔力を周囲にばら撒きいていく。

ヴィータは最後のカートリッジを装填し、激発し、魔力を最高まで圧縮させていく。それこそ、グラーフアイゼンを崩壊させかねないほどに。

ザフィーラも、最後だと、体に活を入れ、魔力を集中させていく。

シグナムは、最後の最後の一瞬まで気を抜かずに、その心を鋼の如く尖らせていく。

「くつくく……貴様もいずれ、私の語る「永遠」こそが「全ての魂」を救い得る、唯一の次善解と知るだろう……」

次善解。それは、最良の選択ではない。ベストではなく、ベター。

「人間を！舐めんじゃねえええーッ！……」

「スターライトオッ！！！！ブレイカアアアア ツ！……」

「轟天爆碎！ギガントツシユラアアアア クッ！……」

「翔けよ、隼ッ！」

「うおおおおおおお

ッ！！！！」

紫電を纏って放たれた槍。

周囲の大量の魔力を収束させて放たれた、白銀の収束砲撃。

天空より振り落とされた、巨人族の鉄槌。

地より放たれた、空舞う者を地へと引きずり下ろす、鋭き猛禽の一撃。

囚人を繋ぎ、身を縛り、肉を抉らせていく、冷たき鋼の軛。

それが、今。確かに、その黒き衣を身に纏った、ライフメイカーを、貫いた。

「へ、へへへ……」

俺は最後まで意識を保つ事が出来ずに、少しずつ、意識が闇へと落ちていった。

後ろからザフィーラに抱きとめられ、ヴィータの泣きそうな顔を見せられ、シグナムが血相を変えて飛んでくる。

シャマルは泣きながらこちらへと思念通話で確認を取ってくる。

終わった、終わったんだ。

俺は安堵しながら、意識を失った。

第三話 最終決戦と真の黒幕と（後書き）

こいつはくせえー！話の内容が臭くて顔から火が出るぜえーっ！

第四話 終戦と旧世界とやっぱりテンプレと

「……………」

ここ、何処だろう。石造りの天井が見える。そうだ、天井といえば、なんかネタがあつたような気がする……。

「大丈夫だよ……天井の染みを数えてる間に終わるから……」

これで合つてたっけ？なんか違うような気がするけど、ふざけてないで、状況を確認しよう。

体を起こそうとして、激痛が全身を貫く。ああ、そうだった。内臓がズタボロのまままで戦つてたんだつたな。

体を見てみると、包帯を巻かれているという事もなく、傷も殆ど無かつた。

俺の騎士甲冑は大量の魔力で保護してあるからな、流石にあの閃光は防げなかつたけど。

体を動かすのが億劫なので、仕方無しに集中してサーチャーを作り出す。

部屋を見渡すと、俺の眠っているベッドのすぐ横にシャルルが座っている。

「シャルル、シャルル」

「ん……………」

『シャルルッ！……！』

思念通話の音量を最大まで上げ、俺の思える最大の思考を飛ばす。

「わきやあああああつ！！！」

「起きたか？」

でかい声出すと体に響くからなあ。

「か、カナメちゃん！！！」

シャルが思念通話で全員に呼びかける。

そして、全員が喜びを露にし、涙目になりながらも部屋へと飛び込んできた。

「カナメ！カナメえ！よかった、よかったあ！」

ヴィータが涙を拭いながら、震える声で喜ぶ。

ごめんな、随分心配かけちまって。

「主……よくぞご無事で」

シグナムが涙を隠しながらも、俺の無事を喜んでくれた。

ありがとうな、ついてきてくれて。

「主……私は盾の守護獣としての本懐を果たせましたか？」

ザフィーラも喜びを前面に押し出しながら、俺へと自分の役割についてのを聞いてくる。

ああ、おまえは最高の守護獣だ。最後まで俺を守ってくれた。

「カナメちゃん。本当に心配したんですよ……？もう……！」

シャルは涙を拭いながら、ちよつと唇を尖らせて俺を咎めた。
ごめん。でもさ、あそこで無理してでも戦わないと駄目だっと思っ
たんだ。

「主……もう二度とあんな無茶はしないでください……ですが、絶
望へと立ち向かう、その心。確かに私にも伝わりました」

リインフォースも無表情ながら、喜びを浮かべた。
絶対に負けられなかったからな、絶対に諦めない。そうすれば、き
つと人間は何処までもいける。そう思うんだ。

「それで、ライフメイカーを倒してから、どれくらい経ったんだ？」

「もう半日ほど経ちますよ。カナメちゃんはずっと眠ってたんです
から」

「そうだったのか……。他の皆は？」

そう聞くと、皆の顔に一瞬影が落ちる。

「ゼクト殿は……」

そう、か……やっぱり、救えなかった、か。

いや、覚悟はしてたんだ。俺たちが泣いてたら、ゼクトが浮かばれ
ねえ。

そう思っていると、廊下が騒がしい。扉の前で足音が止まり、一気
に扉が開かれる。

「カナメ！」

でかい声で叫ぶバカは、ナギとラカン。おまえ等元気だな。見た目はズタボロの重症なのに、動きは元気そうだ。

「ナギ！ラカン！」

「目が覚めたのか、カナメ。大丈夫か？」

「まあ、何とか。体はうごかねえけど」

「ぬつ、これから受勲式だったのに。テメエには気合が足りねえ！気合が！」

「シグナム。このバカ放り出せ」

「御意」

「あ、てめ！何しやがる！」

ラカンはシグナムに蹴っ飛ばされたり殴られたりしながら後退していく。

さっきシグナムたちは俺が治療したからな。ズタボロのラカンに負けるわけが無い。

「受勲式までどれくらいなんだ？」

「ん、後六時間ってとこだな。けど、一時間は前に準備しないと駄目だぜ」

「そうか……」

夜天の書呼び出し、魔法を検索する。なるだけ回復力の高い奴をな。

「ん、こんながあるのか」

魂の情報を元に肉体の欠損部位を魔力で再構成する魔法だ。

魂自体を削る武器はこっちの世界には滅多にねえからな。悪魔の呪いとか位しかない。F a t eだと沢山ありそうだけど。

というか、リリな世界の魔法は科学に準ずる魔法なので、そういった神秘的な方向の魔法は全くとっていいほど存在していない。なので、この魔法はかなりの古代。それこそ、デバイスが作られて間もない頃とか、その家の秘伝の魔法とかだった可能性。

「んぐぎぎぎぎ……！」

大量の魔力が抜けていくのが分かる。そもそもこれ、五人以上のA Aランク魔導師が儀式魔法で数時間かけて行う施術だからな。一人で少しの時間でやろうとするから無理が生じるのだ。魔力はいつもの二十分の一程度しか回復していないし。

「はぁー……疲れた」

怪我は治って、痛みもなくなったけど、体力が無いのだ。

「すげえなその魔法！後で俺にもかけてくれよ！」

「後でなー」

ひとまず、シグナム達に飯を持ってきてもらった。いつもの三倍は

食ったと思う。

そんで寝る。体力を回復させるには食って寝るしかないのだ。そして、大体五時間後。受勲式まで一時間はある。体力は大分回復して、歩くのには支障ない。

魔力はあまり回復していない。ラグナロクを十発撃てるくらいだろう。それでも大概チートな量だが。

立ち上がり、ベッド脇に置いてあった果物をいくつか齧る。うん、瑞々しくて美味い。

ベッド脇に置いてあったシュベルトクロイツを拾い上げ、魔力を一念に流して、念入りにリカバリーする。

そのうち、分解して総点検しないと駄目だよなあ。でも、俺ってデバイスの知識なんてゼロだし。

いや、リインフォースにやってもらえばいいかな。うん、それがいい。なんか出来そうだし。

まあ、今は全て後回しだ。戦いは終わったのだから。

色々と事後処理はあるだろう。けれど、確かに戦いは終わったのだ。騎士甲冑をセットアップし、俺は歩き出す。

部屋の前にはヴォルケンリッターの皆がそろっていた。

「行きましょう。主」

「ああ！」

受勲式。何故かアルは参加せず、ナギと俺とラカンと詠春にヴォルケンリッターの皆がレッドカーペットを歩く。

遠く離れた場所に居る民衆の声が、まるで津波のように押し寄せてくる。

戦いは終わったと。喜びの声を、歡喜の歌が洪水のように国に渦巻

く。

兵士に混じり、紅き翼の皆で杯を酌み交わす。10歳くらいの年齢にずっと固定してあるが、酒には強いので問題ない。入り口の扉が静かに開き、赤毛をローブで隠した男。ナギ・スプリングフィールドが店に入る。

ワアアアアア……！！！！

祝福の聲に包まれ、ナギは驚いたような顔を浮かべる。

「テメエ！傷はもういいのかよ！」

「テメエこそ両腕ねえくせに偉そうに！」

ナギが唯一あがる右腕で、ラカンの左腕の断面を殴りつける。ラカンは右腕で黒い閃光で貫かれた左肩を殴りつける。

「傷をド突き合うな貴様らあーッ！」

止めを刺しあうような行為をする二人に詠春が怒鳴りつける。

「詠春！てめーも一番怪我ひでえのに、よく式典とか出るぜ！ワハハ！」

ラカンは詠春の肩もつかみ、傷をド突く。

「だから傷をド突くな！！死ぬわ！！」

だが、詠春も殴って止めたりはしない。それは、ラカンの行動が喜びを表していると分かっているからだ。

「つーかアル！てめえはなんで受勲式出ねんだよっ！！！！」

「私、上がり性なもので……」

「嘘つけーっ！」

平穏な日々。今日はいいい日だ。

「ふうー……なあ、皆。ちょっとさ、旅にでも出てみないか？」

「旅……ですか？」

お茶を飲んでいたシグナムが問い返す。

「ああ、俺たちさ、あちこち行っただけど、観光とか全然してなかったからな。

それに、戦いはもう終わった。だから、いろんなところを見て回ろっぜ？」

「おお！いいなそれ！賛成だ！」

氷菓子を食べていたヴィータが賛成の意を表す。

「いいですねえ、旅行ですかあ……」

「うんうん。お金もあるし、温泉めぐりとかもいいかも」

「行きましょう。ぜひとも行きましょう」

いきなり乗り気になるシグナム。彼女は風呂好きなのだ。

「ザフィーラは？」

「私は主の意向に従います」

「そうじゃなくてさあ。ザフィーラはどんなところに行ってみたい？何か美味しいもんを食いたいとかでもいいぞ？」

「……では、美味しいものを食べてみたいです」

「リインフォースは？」

「そうですね。色々な所を歩いてみたいです。壊すこともなく」

「よし、じゃあ行こう！」

こうして、俺たちの突発的な旅は始まった。
人に見られると英雄だなんだと五月蠅いので、変身魔法で姿を変えた。

シグナムは12歳くらいに。シャマルは15歳くらいに。ヴィータは18歳くらいに。ザフィーラは10歳くらいに。リインフォースは小型サイズになった。

もともと彼女はユニゾンデバイスで、人間大の大きさの方がおかしいのだ。

俺は20歳くらいの年齢になった……が、やはり女に見える。胸が無いし、肩幅もあるけど、鍛えてる女性。くらいにしか見られないと思う。

だって、この世界の人たち筋骨隆々な人ばっかなんだもん。身長180ある女の人はザラだよ？

ちなみにだが、肉体年齢を変える要領で髪の毛を伸ばすことも出来る。

「さーてと、まずは南の方に行つて見よう」

というわけで、行き当たりばったりな旅を開始した。

前方に障壁を展開し、騎士甲冑で体温を保護して、俺達は結構早めで飛んでいた。普通に音速域に到達してたりするから困る。方向転換すると内臓が潰れるけど。

全力で飛ぶと、超音速域に到達出来たりするから更に困る。急停止も出来ないから、物にぶつかることミンチになりかねない。

これは、誰が一番速く飛べるか。そんなバカな事を俺が言い出した結果、シグナムとヴィータが言い合いになり、仕方なしにそうなったのだ。

結果はシグナムの方が早かった。つっても僅差なんだけどね。そんなこんなで僅か二十分程度で町に到着。

その町は結構活気にあふれた場所で、拳闘大会が開催されてた事もあるんだそう。今は戦乱の影響で中止になってるらしいけど、来年には再開されるらしい。

「お！結構大きな温泉宿があるみたいだぞ」

「本当ですね。では」

るんるん気分のシグナムに半ば引きずられるようにして、俺達は宿に向かった。

予約が必要な宿だったが、宿泊料金の十倍の金を叩き付けてやったから無言で鍵を差し出してくれた。

荷物を適当に放り投げ、着替えを持って温泉に。ここは日本ではないので浴衣はなかった……。

ここらへんは、風呂は聖域。とまで呼ばれているらしく、高額賞金首が居たとしても攻撃は許されないのだそうだ。

ちなみにだが、賞金首＝犯罪者。というわけではない。貴族の馬鹿息子が家出したりした場合に、そいつに賞金がかけられる事もある。どうでもいいが、この宿の温泉は混浴だそうだ。なので、全員で入る事に。

「ザッフィーの背中。地上最強の生物みたいだ……」

「……？」

流石に鬼は浮かんでいなかったけど、物凄い筋肉がついているのは事実だ。

シグナムも筋肉ついてるけど、スマートなイメージだしな。シャマルは戦闘タイプじゃないのでそのまんまだ。

ウィータはまあ、まな板ですね。だがそれがいい。リインフォースは筋肉はないけど、シャマルとは違って戦闘タイプ。けど、後ろでの砲撃手だからな。大した筋肉は無い。

「シグナムがたれしぐなむに」

たればんだと同じように、たれしぐなむになってしまった。どうでもいいけど、俺って男だけとたればんだ好きだったんだ……。そんなこんなで、楽しく俺達は旅を続けていった。

「アリカ姫の処刑、か」

大々的に放映されたニュース。それは当然といえたのかもしれない。アリカ姫は傀儡となっていた王をクーデターのような形で追いやり、王位についた。

その後、オスティアの避難民を救う為に、奴隷としての扱いになる法律を制定。本来の奴隷とは異なり、待遇はかなりいいものの、奴隷。という言葉に人は拒否を示した。

やがては戦争はアリカ姫が原因だとまで言われ、最終的には処刑とまでなったのだ。

俺達は紅き翼の面々が集まっている場所へと向かった。

「ナギ、助けに行かなくてもいいのか？」

詠春が吼える。助けに行きたいだろう。ナギは自覚は少ないのかもしれないが、アリカ姫に恋心を抱いている。

そして何よりも、杖と翼を預けたのだ。未だに杖と翼としての役割は残り、枷をはずし、空へと羽ばたき、何処までも飛んでいく翼としての自負がある。

「処刑まで時間はありませんよ」

「分かってる」

それでもナギは答えを出せずに居る。

「なあ、カナメ。正義ってなんだろうな」

「自分の行動を正当化する為の言い訳。俺はそう思ってる。俺の正義はお前達、仲間を守る事。家族を守る事だ。

孤児の少年が飢えに耐え切れずにパンを盗んだとしよう。それを捕まえる警察は正義だ。

それを哀れだと言って、代わりに代金を払う奴も正義だろう。正義は人それぞれ。汝の欲する事を成せ、だ。

お前が本当にしたい事。何をして、何を守りたいのか。それはお前にしかわからない事だ」

「そう、か。ありがとう、なんか、分かった気がする」

「どう致しまして、だ」

時は流れていく。聖人にも罪人にも、英雄にも悪人にも。

時は流れ、アリカ姫の処刑前日。

大量の兵士達が居る中で、粛々と処刑は進行していく。

「それじゃあ、行くか」

誰からともなく。武器を構える。

「お姫様を助ける王子様の手助け。俺達は小人かなんかかよ」

「そついうな、ジャック」

魔法をぶっ放し、兵士達が蹂躪されていく。ちなみにだが非殺傷設定だ。

あらかた兵士をぶちのめしまわると、魔獣の蔓延る穴から、アリカ姫を抱えたナギが出てきた。

なんとゆーか、リア充だよなあ。

細かい事は省くが、ガトウとかが交渉し、俺は哄笑し、ジャックは剣を素振りし、詠春は頭痛をこらえる。

そんな感じで、処刑された事となり、ナギは約束を果たすために、旧世界の詠春の故郷、京都に来ていた。

京都は修学旅行で一度来た事はあるが、こんなVIP待遇じゃなかったな。詠春の関西呪術協会の地位ってどうなってんだろ。

封印されていた姫子ちゃんこと、アスナも連れている。

「楽しそうだな、アスナ」

「ええ、本当に」

俺とアルは後ろの方でほえましげに見ている。こら、誰だ。元氣な子供たちを見守る親みたいって言ったのは。

タカミチも大きくなったなあ。俺は大きくなってないけどさ。無音拳も習得したらしいし。

「平和、だな」

「ええ、本当に」

ヴィータは八橋を食べていて、シグナムとシャマルは京野菜の漬物を。ザッフィーは何か酸っぱい物でも食べたのか悶絶している。

「ナギとアリカ姫は見ててうざくなるほどにラブラブだなあ」

「ええ、本当に」

「詠春にも嫁が出来そうだな。英雄だし」

「ええ、本当に」

……テープレコーダーをセットした人形じゃないだろうな？

「俺も結婚しようと思ってる」

「ええ、本当に？」

「ああ、アル。結婚してくれ！」

「えええええええ！？」

アルが驚いた顔をしたのは初めて見たな。

「冗談だ」

「そうですか。私はいつでもウェルカムですよ」

「考えとく」

その後、清水の舞台について、清水の舞台から飛び降りる気持ちでという慣用句を皆に教えたところ、ナギ、ラカン、シグナム、ヴィータ、俺が飛び降りた。

更には誰が一番カッコヨク飛び降りたとか言う意味不明の採点をしたりもしていた。詠春に怒られたがな。

ラカンが何を勘違いしたか、仏像にのぼり、詠春に刀を持って追い掛け回されたりもした。

「なんで旧世界に来てまで戦わなあかんのじゃ」

「知らん」

俺たちは今、リョウメンスクナの前に居る。でけえ。どんくらいかという50メートル以上はある。ビッグザム並？

まあ、普通に勝ちましたけどよね？だって弱いんですもん。いや、俺たちがおかしいだけだけどさ。

スクナには及ばないけど、一般兵が数十人。下手すると数百人がかりで倒す鬼神兵を一発の魔法で数体同時に倒すナギとか居るからね。そのあと、京都の隠れ家で全員集めた写真を取った。前に魔法世界で撮った写真と違うのは、タカミチとアスナとアリカ姫が居る事だな。

この写真はそれぞれ、自分たちだけで持っておく事になった。最後の写真だからな。

そして、俺たち紅き翼は、ここで解散した。

仲間の絆は永遠に。 駆け抜けた戦乱で培われた絆は、永遠に切れる事はない。

死も、別れも、俺たちの絆を断ち切れたりなんかはしない。

第四話 終戦と旧世界とやっぱりテンプレと（後書き）

もう少しばかり原作の過去が続きます。

第五話 原作崩壊の序章とネギ強化フラグ

相も変わらず旅から旅への根無し草。あっちこっちに行っては適当に遊ぶ生活が続いている。
で、まあ……幼女拾いました。

「何故、助けた」

しかも原作キャラでした。

「いや……普通目の前で崖から人が落ちそうになってたら助けるだろ？常識的に考えて……」

それが反射的な行動じゃなくて、2700メートルほど離れた場所から美幼女だと察知した俺が瞬間移動に等しい速さで助け出したとしてもだ。

いや0.8秒で2700メートルを移動したという事は時速6500キロ程度で移動したという事になるのだが、一体どんな方法で移動したのだろうか……？ギャグ時空……？

「あ、どっこいしょっと」

金髪ツンデレ美幼女を引きずるようにして引き上げ、俺の胸の上に落とす。おお……素晴らしい光景だ……。

「おっと……涎が」

「気味が悪いな……なんなんだ貴様は……」

「全少女の味方です」

「喧嘩を売っているのか貴様は！」

胸倉を掴まれてがつくんがつくと揺られる。ものすげえ怪力。流石は吸血鬼。頭を揺らされてアヘアへになった所で真剣な顔つきになる。

「生きてるのなら、神様だって殺してみせる」

「何を言つとるかー！」

やべえ、間違えた。

「まあ、兎に角。俺は全少女の味方だ！神が少女を殺すというのなら、その神を殺してみせよう！生きてるのなら、神様だって殺してみせる」

直死の魔眼はないけどね。

「き、貴様は……私をおちよくっているのか！？」

「違うつ！愛でている！素晴らしきかな少女！俺のストライクゾーンは6〜12歳！なんかペドフィリアのような気がするけど果てしなく気のせい！」

君は例えて言うなら、私のストライクゾーンのと真ん中！100マイルのストレートだ！心臓を打ち貫かれた！おぜうさん！君のお名前は！？」

「……………（こいつは一体なんなんだろうか…………）」

「さあさあさあ！君のお名前は！？早く答えたまえ！」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ！これでどうだ！」

「なん……だと……？あの、闇の福音の？」

「フン、そうだ。怯えろ、竦め。モビルスーツの……モビルスーツ？」

何故ネタに走る？というか、本人も分かってないんじゃないか……？

「素晴らしい！永遠の幼女とはこのことか！是非結婚してください！」

「ふざけとるのか貴様ああああっ！」

「ぐへあ」

殴られた、いてえ。いや、常人なら顔がなくなるくらいの威力で殴られたわけですが。

「くっ……今の俺では駄目か……分かった、俺も君に相応しい男になろう！俺の名前は国後要！紅き翼の国後要だ！」

「なにぃーっ！？」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル！次に会ったときは君を惚れさせて見せる！それまでにこれを預けておこう！」

夜天の書のシステム上からシュベルトクロイツを切り離し、エヴァンジェリンへと放る。単純な砲身と演算の役割しかないデバイスなので、リリナの魔法は使えない。

しかしまあ、魔力の伝導率は最高レベルのものを使用してるので、魔力通した武器としては最適だろう。

「それではな！」

ハッハッハッハッハ！と笑いながら去っていく。そして森の中で一人自己嫌悪。何で初対面で俺はプロポーズしてるんだろうか……。そもそも相応しい男になるにはどうすればいいんだ？吸血鬼になればいいのか？夜天の書にそんな術式はなかったし……。

難しい事は考えないで、冷却期間を置きましょう。大体二十年も置けばいいかな……。不老になって別荘とか使って修行してる所為か、時間の感覚が超適当で困る。

突発的にエヴァにプロポーズしてから一年ほどして、詠春が結婚すると言うので出席する事となった。サインねだられて困ったわー。詠春の嫁さんは美人だった。魔力の保有量は少ないみたいだけど、結構な気の使い手っぽい。物腰が剣振ってる人のそれだもん。

「出席してくれてありがとう、要」

「いやいやなにに。仲間の結婚式に行かないわけにはいかんだろ」

「ハハハハ、そうか。要は結婚しないのか？」

「……………以前に初対面でプロポーズした人が居る」

「なにっ！？どんな人だ？」

「金髪の女の子」

「は？」

「あ？」

「いや、そういえば、要の性別って知らなかったなあって」

「男だぞ？」

「は、はは、そうだったのか。ずっと女だと思ってたぞ。タカミチも、要の隣に立てるくらい強くなるって言って修行してたし」

「マジすか！」

その後、俺は麻帆良のタカミチに誤解を解きに行った。面白そうだからって黙ってたのが悪かったな。

ちなみにだが、その後しばらくタカミチは抜け殻のようになり、更に修行に打ち込むようになったらしい。

俺達はどうという事もない、閑静な住宅街に家を買って、そこに住み始めた。

ちなみにだが、戸籍はこうなっている。

父 国後要。

長男 ザファイラ。

長女 リインフォース。

次女 シャマル。

三女 シグナム。

四女 ヴィータ。

普通に母は居ません。だって結婚してないもん。養子と言う事になっ
っている。

たまにマギステル・マギとしての仕事が入る以外は家でぐだぐだと
遊ぶ。平穏な毎日。

俺はヴィータとゲームしたり、シグナムと碁や将棋をしたり、シャ
マルに料理を教えたり、ザファイラと一緒に昼寝をしたり、リイン
フォースとお菓子を作ったり。

偶に別荘で感謝の正拳突きをしたら、最初から音を置き去りに出来
ていたり。シグナムと剣で打ち合ってみたり。

詠春の子供が生まれたと聞いて見に行ったり、タカミチをしばき倒
してみたり。

詠春の子供が生まれて五年程経ち、そーいえばあのイベントが起こ
る頃だよなー、と思って遊びに行った。

「おーっす、詠春！」

「おや、要じゃないか」

詠春は接客モード。もとい、長モードから変わって詠春モードに。
フレンドリーな口調になった！

というかまあ、昔なじみの仲間なんだから、そんなくらいフレンドリ
ーに接して欲しいよね。

「ひまだったから遊びに来たぞー」

「そうか。娘を紹介しよう」

「おー、木乃香ちゃんかー。大きくなったかな？」

「元気に育ってるよ」

呼ばれてきた木乃香ちゃんは礼儀正しくぺこりと挨拶をしてくれた。うんうん、可愛い子やのん。しかしまー、大きくなったなあ。

「始めまして、近衛このかです！」

「あはは、さすがに覚えてないかー。このかちゃんが赤ちゃんだった頃に会ったことあるんだけどねー」

「そやったのー？」

「うん、そういえば、自己紹介だまだだったね。国後要だよ。よろしくね」

「せやったら、かなねえやなー」

そーいえば、俺つては十歳児くらいの姿だから、男に見えないんだろうな。まあいいか。

そんなこんなで、俺はしばらく関西呪術協会に逗留する事となった。途中でシグナムたちもやってきたりしたが。

川イベントも華麗に回避してやったぜ！というか、シグナムとかも居たからね。

「そろそろ、うちらも帰る事にするわー」

「そうか？」

「あんま長く逗留してると、いらんやつかみ買いそうやしな」

「それもそうか……また遊びに来てくれ」

「ま、遊びにいかへんでも、そのうち会いそうやけどな」

なんか、こつちに居るうちにこのちゃんの京都弁に引きずられて、俺の訛りが出てきた。

昔は京都近くに済んでたから、柔らかめの関西弁が出るんだよな。ここらへんまではやてに似なくてもいいんだけどな。

別れる前に、また会う事を指きりげんまんて約束した。

ガトウが死んだ。そんな連絡が入り、俺は姫子ちゃんことアスナのところへと向かった。

「記憶を消す！？どういいうつもりだタカミチ！」

「そうするしか平和に暮らす方法がないんだ！」

「なぜ平和に暮らす方法だけを考える！アスナは本当に平和に暮らしたいのか！？

なぜアスナの意思を無視する！そんな独善的な行為は俺は認めない！」

「それが師匠の意思だからです！」

「だからってアスナの意思を無視していい事にはならない！本人に聞いたのか！？」

記憶を消して、平和に生きていたいと！記憶を消さずに、皆の事を覚えていたいと！

そのどちらかでもアスナは言ったのか！？」

「けど……！」

「お前だって……自分の意思で紅き翼に入ったんだろう！そこに後悔があつたのか！？」

自分の人生は自分で選び取るものだ！記憶を消して生きる生活が本当に幸せなのか！？」

幸せとは誰かに与えられるものじゃない！自分で掴み取ってこそ価値があるんだ！」

「クッ……分かりました……僕も、少しばかり気が立ってみたいですよ……」

「いや、俺も少し気が立ってた。わりいな……」

「いえ、僕も悪かったんです。さ、行きましょう」

タカミチに促され、俺はアスナが居る部屋へと入る。アスナは相変わらずの無表情だった。

いや、少しばかり表情が暗い。ガトウが死んだ場所を見ていたか……。

「や、久しぶり。アスナ」

「カナメ……？」

「覚えてた？ところでさ、聞きたい事があるんだ」

「なに……？」

「君には今、二つの選択肢がある。一、戦いの記憶を全て消し、平和に生きる道。

二、記憶を消さずに、このまま魔法に関わり抜く。どちらを選んでもいい。

記憶を消しても消さなくてもいい。俺達は君を軽蔑したりはしない」

「消さないっ！忘れたくない！皆のこと！忘れたくない！」

それは感情の吐露。辛い記憶も悲しい記憶も。楽しい記憶も嬉しい記憶も。全てが自分を創ったものだから。

忘れると言う事は、死ぬと言う事。今まで自分を創ったものが、全て消え去ると言う事。

そして何より。あの辛い戦いの中でもあった、嬉しい記憶。ナギやガトウ、タカミチ。皆が居たその思い出。

たとえ死に別れても、それは確かな自分の一部だから。

「分かった。なら、俺達は君の記憶を消さない。それでいいな？タカミチ」

「ええ……それが本人の意思なら……」

「他の馬鹿共が勝手に記憶を消したりしないように、他の奴等には俺が説明しておく。」

それでも無理やりやろうとしたら、その時はお前が止めてくれ」

「ええ、分かりました」

結局、アスナの記憶は消さないことになった。とは言っても、アスナの名前はそのままではアレなので、ガトウのミドルネームを貰い、神楽坂明日菜という名前になった。

「なんと言っ誰得魔法」

暇つぶしに夜天の書を探っていたら、とっても誰得な魔法を発見した。その名も性転換魔法。ただし、性転換するだけ。

顔なんかもそのままだから、おっさんとかが試したら凄く悲惨なことになるに違いない。しかし、俺は男の娘だ。

というわけで、性転換魔法を使ってみた。どうせ戻せるらしいからいいよね。

「なんという八神はやて。これは同一人物としか言いようがない」

元々そっくりだったしな。肉体年齢を変えてみれば、あら不思議。すっかり胸も膨らんでます。何故か騎士甲冑の胸が膨らんだりするけど、あれって偽乳だからな。

これで本当の乳になったぜ！そんなに大きくないけど。まあ、原作だと貧乳貧乳言われてたけど、そんなんでもないんだよね。普通の

部類に入ると思っただ。

単純に他の二人が大きすぎただけで。戦う相手が悪かった、そういう事だ。いや、そうとしか言いようがないのだが。

まあ、んなことはどうでもいい。一先ず肉体年齢を10歳に戻しておく。なんと言う八神はやて……顔が男のときより少しだけふくらしているのが分かる。

目も少しばかり垂れ下がっているし、体型も更に華奢になったように見える。これは純粹に女性ホルモンの影響だろう。顔立ちは変わってない。ちよつくらアルでもからかって来るか。よし、転移魔法起動つと。

「遊びに来たぞコノヤロー！」

ワイバーンを指先一つでノックダウンして、アルの部屋に呐喊してやる。

「おや、カナメですか。お久しぶりですね」

「見よ！男の娘から女の子になってきたぞ！」

「……ハハハ、馬鹿も休み休み言いなさい」

どうやら変身してるかどうかを見破ろうとしたらしい。残念ながら性転換魔法はアルハザードが存在していた時代の魔法。肉体変性などお手の物よ。

「よし、ちよつとこつち来い」

「ええ、望む所です」

しばらくお待ち下さい。

「ゲホッゲホッ！ゲハッ！す、すいません。そちらの布巾を取って頂けますか？」

「ほらよ」

一先ず裸になってやったら、鼻血を撒き散らして襲ってきたので、フルボッコにしてやった。正直な話、ライフメイカーの時より酷い怪我なんじゃないかと思う。

「ふう……やれやれ、恐ろしい破壊力でした……普段の男っぽい言動を知っていて、更には男と知っていたのが、唐突に女の子になってくるとは……」

「まあ、あれは冗談抜きで恥ずかしかった」

アルにニヤニヤと見られてる前で服を脱ぐのは当たり前だが、結構というか、かなり恥ずかしかった。

しかしまあ、この魔法って本当に誰得だよなあ。女に使ったら男の娘という事になるんだが、男に使ったら漢女おとめになってしまう。

そーいえば、アルって中性的な雰囲気おとめの奴だよな。男ではあるんだろうけど、女って言われても信じそうな雰囲気があるから……。

「アル、ちょっと動くなよ」

「はい？」

夜天の書を起動して術式を奔らせる。どうでもいいが、俺とアルは魔導書を持ち歩いていた仲間である。というか、紅き翼で純粋な魔

法使いって俺が入る前はアルしか居なかったんだよな。

とはいっても、アルだって肉弾戦はそれなりに出来るし、重力魔法は使い勝手がいいから、魔法剣士に近い戦い方も出来たからな。まあ、体が魔法使いタイプの肉付きだったし。

俺は俺で、どっちも関係なかった。後ろで砲台としての役目を果たす魔法使いではあったけど、近接戦もそれなりに出来るからな。

バインドでアルを拘束して、魔法を起動してアルを女にしてやった。

「なっ……これはっ！」

なんと言っ破壊力。アルは見た目はあまり変わらないものの、肌のキメ細やかさや無駄毛などが無くなって、中性的な雰囲気更に中性的になってしまった。

よく見えないが、胸もわずかばかり膨らんでいるのが分かる。顔は変わらないと言っても、女性の象徴のような場所くらいは変わるのだ。しかしまあ……普通に美人だな。

「アッハッハッハッハ！！アル、よく似合ってるぞ！」

「こ、これは……あまり変わりませんね」

鏡を差し出してみせるが、確かに余り変わらない。そもそも顔はかわら無いのだから当たり前だ。というか、お前は男でも女でもあんな感じだったと思う。

「さて、戻す前に記念写真でも取るか」

「そうですね」

そんなわけで、記念写真を取って、アルを男に戻してから帰った。

「えー……ナギの息子が居るという情報を掴みました」

「唐突ですね。主」

「俺のやる事が唐突じゃなかったことがあるか？」

「ありませんね」

という訳で、実際の所ナギの息子が居るのは知ってたけど、何処に居るのかは知らなかったからな。ナギの故郷だとは想定GAYでした。

「という訳で、今からしつかりとナギの息子を教育すれば、ナギのような馬鹿にはならないんじゃないか……そう思っただけ、どう思う？」

「それはまあ……そうですね」

「なんであたしらがそんな事しなくちゃいけねんだ？」

「話は最後まで聞く！さて……ナギの息子善良的バグキャラ育成計画に賛成の人は挙手を」

ぴぴっと手が三つ上がる。上げたのは俺とシグナムとザフィーラだ。

「さて、拳手した理由を」

「はい。男子であるならば、誇り高い騎士に……」

五分ほどシグナムの高説が続くのでお待ち下さい。

「というわけです」

「次、ザフィーラ」

「はい。ナギの息子であると言う事は、やはり将来的にはメガロメセンブリアに利用される可能性があります。であるからして、今のうちに力をつけておくべきです。

強い力は敵を生みますが、同時に守るべき人を守る楯となります。思慮深い知恵は敵であるかを見抜く力となり……」

やっぱりザフィーラの高説が五分ほど続くのでお待ち下さい。

「最後に俺だが、ザフィーラと殆ど同意見だ。その内、使いづらい英雄よりも、使いやすい英雄の卵として扱われる可能性もある。

俺達は平和の為に戦ったんだ。だったら、あいつらの子供達が平和に暮らせる世界を作れるならいい。

けれど、ナギの息子は既に魔法に関わってる。だったら、メガロメセンブリアの老人共に喰われない様に力をつけて欲しい」

「主……なんとお優しい……！」

なんで泣く？

「そこを踏まえてだ……協力してくれるか？」

手を上げなかった三人へと視線を向ける。

「分かった。カナメがそういうんならあたしも手伝う」

「私もよ。やっぱり、男の子は強くなっちゃ」

「私もです。その、ナギの息子とやらにはみっちりと教育をしてやらねばなりません」

主に私達の精神の平静の為に。とリインフォースが続ける。そうだね、そうだよね。しょっちゅうナギの馬鹿に喧嘩売られてたもんね。あとラカンにも。

ネギが強くなれば、まず間違いなくラカンの矛先はネギに向かう……俺達への被害も減って一石二鳥！ああ、素晴らしきかな寝込みを襲われない人生！

「というわけで、早速行きましょう」

有無を言わず転移魔法を起動。割り出しておいた座標へと転移。

「のうわっ!？」

転移したら何故か火の海でした。どうやらだが悪魔共に襲われている真っ只中だったらしい。面倒だから仕事断つといてよかった。

「ザフィーラとリインフォースは赤毛の子供を探し出して保護！シ

グナムと俺は村を回って悪魔の殲滅！シャマルはヴィータと一緒に怪我人を探して治療だ！解散！」

こちらへと襲い掛かってきた悪魔を殴り殺し、俺は一気に駆け出す。転移魔法のセオリーを守って騎士甲冑装着しといてよかった。

ラカンインパクトのパクリ技、カナメインパクトで集まっている悪魔を木端微塵に砕く。シグナムはというとシュランゲフォルムのレヴァンティンで悪魔共を薙ぎ払っている。

「数が多いっ！」

こいつら、大して強くは無いが（とは言っても一般魔法使いなら苦戦する程度の強さはある）数が滅茶苦茶に多い。恐らくは百人単位の召喚術師を使いやがった。

シュベルトクロイツで悪魔の頭をぶち割り、コピーしたグラーフアイゼンで悪魔の頭をホームラン。時折広域殲滅魔法を放つが、村人の影響を気にして威力を絞らなければいけない。

探查魔法で人の有無を確認しようにも、石になった人間は生体探查には掛からないし、人型の物体の探查を行った場合、悪魔が引っかけられる可能性もある。かといって熱源探查を行おうにも村は火の海で上手くは行かない。

「邪魔だデメエ！」

下半身を消し飛ばした悪魔が足に食いついてきたのでサッカーボールキック。ナイスシュート！なんてふざけてる場合じゃない。

直線状に人型の物体がいるかを確かめて、闇の吹雪を放つ。まるでレーザーのような一撃が悪魔を一掃し、それと同時にこちらへと位置を知らせるように魔力反応。

この魔力の大きさと周波数はナギか。

「シグナム、こちらへん任せた！」

「はい！」

シグナムに一言断りをいれ、最大速度でナギの元へと到着する。ここでは丁度、大型悪魔がナギへと拳を放っているところで、ナギがそれを受け止めていた。

俺は背後から大型悪魔へと踵落としを叩き込み、一撃で粉碎する。その時、ちらりとナギの後ろに赤毛の子供。つまりはネギが居るのが見えた。

一斉に襲い掛かってきた悪魔へと、魔力で最大限に強化された蹴りをナギが叩き込み、悪魔の集団を吹き飛ばす。そして横からの雷の斧の薙ぎ払いで悪魔を一掃。

「響け終焉の笛！ラグナロク！」

続けて俺が固まった悪魔どもに直射型の砲撃魔法をぶつ放す。

「助かったぜ、カナメ」

「気にすんな。って、お前の息子は何処行つた！？」

「なにいいい！？」

何時の間にか消えたナギの息子。俺達はそいつを探して飛び出した。そして俺がネギを見つけたとき、丁度悪魔がネギへと石化魔法を放とうとしているところだった。

「死ねっ！」

「ギャヒッ!？」

そいつへとさつきと同じように踵落としを叩き込む。足が短いから蹴りよりも踵落としの方が決まりやすいんだ。

しかし、先程の悪魔よりも強度が高いのか。それとも俺の気の込め具合が足りなかったのか。完璧には死に至らなかった。

直下でどうやらこの悪魔……たしかヘルマンと言ったか。そいつの配下らしきスライムが動き出し、ネギへと襲いかかるうとする。

「やめんかクソアメーバ!」

咄嗟に魔力弾を適当に形成して牽制として放ち。こちらへと走ってきた二人の魔法使いが封魔の瓶で封印を施す。

「助かった! あんたらは早く逃げろ! 大体は一掃したが、まだ残ってる!」

「あんたは大丈夫なのか!? 老いばれといえども、抗うくらいは出来るぞい!」

確か、原作だと石になってた人だよな? なんだっけ? スタン・エルロン?

「任せろ! 俺は紅き翼の国後要! そいつはシャマルとヴィータ! 頼んだぞ!」

こちらへと思念通話で連絡を入れたので到着していたヴィータとシヤマルに二人を任せ、悪魔の殲滅を再開する。

そして、悪魔を殲滅し終わり、他の皆が先に逃げいてた場所へと戻

った。何があつたのかは知らないが、ネカネとジジイは気絶してる。ヴィータが気まずそうにしてるから、ヴィータが殴つたんだろ……。

「ナギ」

「ああ」

何も言わず、ナギはネギへと近づいていく。

「すまん……くるのが遅すぎた……いや、謝って済む問題じゃねえ……」

そう言つて立ち去ろうとするナギへ、ネギが杖をむける。初心者用の練習杖だ。

「お前……そうか……お前がネギか……」

それは何の皮肉か。自らの息子の顔すらも分からない父親。それは何の理由があつたのかは俺には分からない。けれども、それは悲しいこと。

「大きくなつたな……」

ナギがネギの頭に手を載せ、少しばかり乱暴に頭を撫ぜる。不器用な奴だ、相変わらず。

「そうだ……お前にこの杖をやろつ。俺の形見だ」

「お……父さん……?」

渡された長い杖は、ナギが戦乱を駆け抜けた頃から愛用していた杖。

「もう時間が無い……わりいな、お前には何にもしてやれなくて……」

そう言うと、ナギは浮遊術で浮き上がる。それでも名残惜しそうに、手を伸ばす。

「こんなこと言えた義理じゃねえが……元気に育て！幸せにな！」

走り出したネギは転び、その間にはナギは消えていた。空間転移つてわけじゃねえな……雷を利用したゲートを使った形跡も無い。ただ、漠然と消滅……。分身つて訳でもなさそうだ。精神体か？

「お父さあ　　ん！！！」

ネギの悲痛な声が空へと木霊する。静かに涙するその姿は、本当にただの子供だった。俺はそのネギへと近づき、胸倉を掴み上げた。

「お前は弱いな……反吐が出るほどに」

その言葉を聞いて、ネギの涙が一層強くなる。

「力が欲しいか？」

「ちか、ら？」

「そうだ、力だ……悪を成す為の力でもない。正義を成す為の力でもない。ただただ純粋な力が欲しいか？」

憎い敵を殺すための力を、守りたい物を守る為の力を……力が欲

しいか？」

「ほしい、です……ぼくはちからがほしいです！強くなりたい！もつともつと強くなって！おねえちゃんを、おじいちゃんを守りたいです！」

「力が欲しいか……上等だ。ならば俺達がお前を鍛えよう。血反吐を吐くほどに辛いぞ？」

「それでも、強くなりたいです！」

「二度と杖を握れぬ体になるやもしれんぞ？死んだ方がマシと思える事になるかもしれんぞ？」

「だれもまもれないほうが……こわいです……！」

こいつ、本当に四歳のカキか？

「いいだろう。合格だ。事態が収束し、落ち着いたらお前の修行を始める。いいな」

「はい！」

そして、報告を受けてようやくやってきた魔法使い達に事情を説明し、何故かサインをくれと言われたのでくれてやる。

ようやく終わった頃に、ネギがウェールズの町に移住するというので俺もついでに家を買っておく。そして別荘を用意して修行が始まる。

第五話 原作崩壊の序章とネギ強化フラグ（後書き）

アスナの記憶が消されたのは、ネギが生まれた頃、だと思うんですよ。

確か記憶が消された後はアスナは小学校に入学しましたし。

まあ、細かいことは気にしなくてもいいでしょう。

ネギ君強化フラグ。ネギではなくNEGIEになる予感。

第六話 修行開始と日本と人間の醜さと（前書き）

修行風景をキングクリムゾンしたけどいいよね。

第六話 修行開始と日本と人間の醜さと

「さて、まずはお前は未だに四歳児。無茶な運動は後に影響を残す。という訳で、体を鍛えるのは軽めだ。まずは二十キロほど走れ。魔力で強化してもいいぞ」

「はい！」

素直に走り始めるネギ。ネギは初等科なので授業の終わりは二時頃。それから六時まで修行。休憩して飯を食ったら11時まで修行。そして就寝の毎日だ。大体ネギは五倍の速度で年を取る。

とは言っても、程ほどで調整するつもりなので、学校の卒業の頃は15歳前後だろう。その位で十分だ。実質十年間俺達と修行したことになるわけだし。

「終わったか？次は座学だ」

別荘のと真ん中にわざわざホワイトボードを用意し、色々と書き込んでいく。

「いいか？魔力総量っていうのは生まれつきのものだ。こればっかりは鍛えようが無い。ただし、術式の効率化、精神力の強化によって魔力消費量が変化する。」

魔力をどれだけ上手く扱うか。それで魔法の使用できる割合が変化する。そうだな、お前が最大の効率で魔法が使えるとしたら、千の雷を百発は放てるだろう。

まあ、今の段階だと雷の暴風を放てるかどうかも怪しいがな。ちなみにだが、千の雷の魔力消費量は雷の暴風の二十五倍。威力は十倍だ。どれだけの魔力があるか分かるだろう？」

「はい！」

「さて、お前は魔法学院に入り立てだから、ロクな魔法が使えない。逆に考えれば、これから何にでもなれるって事だ。

大まかに分けて、魔法使いには四種類ある。まずは前衛での高速戦闘や無詠唱魔法を用いた魔法剣士。後衛の長い詠唱を使用するが、強い威力を持った魔法を使う魔法使い。

次に補助職。回復や他の人間への魔力による身体強化、魔力供給、結界や防御魔法に秀でた補助術者。強力な存在を召喚して使役する召喚術師。後者二つは特殊な例だ。

基本的にお前は前者の二つから選んだ方がいい。魔法剣士になるか、魔法使いになるか」

「お父さんは、どっちだったんですか？」

「ナギか？あいつは一応魔法剣士だったが……ある程度以上の実力者になるとその線引きは必要なくなる。現にナギは千の雷なんかの魔法も使えたし、無詠唱は得意じゃなかった。

俺も一応後衛型の魔法使いではあるが、ナギと殴り合いで勝った事もある。実際の所、俺は剣も拳も槌も使える」

「ぼく、魔法剣士になります！」

「そうか。好きにしろ。だったら肉体面のトレーニングを重視した方がいいな。ただし、俺はそんなんじゃ満足せん。

ナギに憧れるんなら、逆に追い越してやるくらいのつもりになりな。というわけで、普通に魔法使いとしての修行もやる」

「はい！」

「さて、まずは魔法の習得だ。お前の適正は雷、風、光、火、氷、闇の順番だ。例外的に重力や予知なんてのもあるが、そこらへんは気にするな。」

まずは魔法の射手。こいつは魔法学校でも習うな。ま、初等だからまずは火よ灯れくらいか？」

「あ、火よ灯れくらいなら……プラクテ・ビギナル・アールデスカット」

そう言うとおぼつと火が灯る。というかそんなのは知ってる。こないだやらせただろうが。

「んなこたあどうでもいい。まずは詠唱で魔法の射手が使えるようになれ。最初はお前の得意な雷とか火からでもいい。」

幸いにして、この別荘は大気のマナが濃い。魔力の使い方さえ分かれば、なんとかなる。最初の課題は十個以上の魔法の射手を作れるようになること。

ただ、そんな事をはじめからやってもやりにくい。というわけで、まずは一本を詠唱で使ってみろ。

呪文は「光の精霊1柱、集い来りて敵を射て・魔法の射手」だ」

「はい！」

という訳で、詠唱をして何度か打とうと頑張っている。こればかりは出るまで頑張るしかないよな。と思ったら十回目くらいで出した。流石はナギの息子って所か。

魔法に関してのセンスはナギを上回る。それに、原作でもあったように、体なんて鍛えたこともなく、拳の握りも分からないというのに、ある程度接近戦も出来たのだ。

間違いなく格闘のセンスもあるだろう。更には魔法を新しく開発するだけの脳もある。なにこのチートキャラ。

「うーん……ネギじゃなくて、NEG Iとかになりそうだな」

「は？」

「いや、なんでもね」

疑問符を上げたシグナムに手をぴらぴらと振り、魔法の射手を今度は三本に挑戦しているネギへと目を向ける。魔力の運用は案外上手い。

この調子なら、明日には十本到達も難しくはなさそうだ。本当に育て甲斐のある弟子だよ。

一週間ほどして、ネギが三十本の魔法の射手が使えるようになった。次の段階に移ろうか。

「次、無詠唱の魔法を使えるようになれ。無詠唱っていうのは本来なら呪文によってイメージを固定、また呪文による精霊の誘導を行うものだ。

これを詠唱しないで、自前の制御力だけで行う事を無詠唱という。詠唱を必要としないのは接近戦では大きなアドバンテージになる。

また、魔法の射手は半アストラル状の物体であり、肉体への融和性がある。その為、拳に乗せて放つという事が可能だ。

魔法の射手の威力次第では、拳の威力を何倍にも出来る。魔法剣士が良く使う技だ。覚えておいて損は無いぞ」

「えっと、コツ、みたいなのは無いんですか？」

「知らん。俺は魔法の射手を無詠唱で使ったことなんぞない」

「ええええ！？」

「いいからやれ！」

「はいいい！」

うんうん唸って、十分ほどして一本完成。

「出来ました！」

「遅いわボケエーッ！」

「あーっ！」

「何処が無詠唱だ！詠唱よりも時間かかってんだろっが！一矢を一瞬で出せるようになってけよ」

ネギから離れ、ネギの修行についての案を練っていく。

「うーむ……」

魔法剣士になるとは言ったが、ネギは遺伝的に細身になるだろうから、一撃の重さよりも身軽さを高めた方がいいよな。

となると、拳の方がむくのだが、リーチが短いからそれが致命的な差になりかねない。だとするとやっぱり武器を使った方がいいだろう。

別に武器だけというわけではないのだ。肉弾戦闘も仕込めばいい。

ラカンだって剣は使えるが肉弾戦闘の方が得意なくらいだ。

「よし」

「あ、師匠！」

「よし。無詠唱は大体出来るようになってきたな。数は出来るだけ増やしていけ。それから、後でザフィーラに拳の握り方と殴り方。シグナムには剣の握りから振りまで全部教えてもらえ」

「はい！」

「お前はどつちかというと剣よりも拳が向いてる。剣は基本を齧る程度でいい」

修行開始から一年。キングクリムゾンしたけどいいよね？だって、基本的な戦い方を教えたり、魔法の運用やら精神力の強化。それから剣の握り方を教えて位なんだ。

まあ、一年とは言っても既にネギは10歳になってるんだけどね。ああ、ついでに犬上小太郎捕まえてきたよ。原作キャラでネギくらの強さって言うたらこいつくらいしか思いつかなくて……。

「さて、お前等もだいぶ体が出来て来た。これから、実践的な戦い方の修行に入る」

「ホンマか!？」

「ホンマや」

「実践的な戦い方……ですか？」

「そうだ。お前等に今まで教えてたのは基本。詰まるところは道場剣術やら道場拳法みたいなもんだ。これからお前等には自分の力でそれを実践的な業へと昇華してもらう。実戦の中でな」

「よっしゃ！」

「頑張ります！」

意気込みは十分か。

「まずは、お前等二人で俺にかかって来い。遠慮はいらん。殺す気でやれ」

軽く体を解し、構える。それに呼応して二人も構える。

「いくでえっ！」

瞬動術で飛び込んできて、拳に犬神を乗せて小太郎が拳を放ってくる。その腕を掴み、自分は体を低くして、小太郎の勢いを利用して放り投げる。

「光の11矢！」

ネギが無詠唱で光の11矢を放ち、その後に続いて走りよってくる。自分の体に当たるものだけを居合い拳モドキで叩き潰し、ネギの拳

を横に滑るようにして回避。

そしてネギの背中へと向けて貼山靠を放つ（八極拳の技の一つ肩と背中を使った体当たり）。そのまま吹っ飛び、貼山靠で出来た隙を見た小太郎が犬神を放ってくる。

それを無詠唱の魔法の射手で潰し、放ってきた正拳を上弾く。弾かれた勢いをも利用したサマーソルトモドキを身を逸らして回避する。

（やはり接近戦では小太郎の方に分があるな。野生の勘とでもいうのか、直感的な動作が鋭い）

さっきのサマソもどきは少しばかりヒヤっとさせられた。そもそも弾かれたタイミングにあわせて蹴り上げるなんて、まともな人間には出来ん。ラカンやナギなら出来そうだけど。

背後から放たれた白き雷を魔法障壁で防御。一瞬気を逸らされた瞬間に小太郎が再び瞬動を使って俺の顎へと拳を放ってくる。それをやっぱり身を逸らして回避。

その勢いを利用した小太郎の後方左回し蹴りを腕でガードし、飛び込んできたネギに後ろ蹴りを放つ。その足を回避し、ネギが背面へと魔法の射手を乗せた拳を放つ。

流石に避けるのは無理と悟ったので、魔力障壁を集中した右手で受け止める。一瞬のネギの硬直にあわせ、足を絡めるようにして蹴り飛ばす。

俺から既に離れていた小太郎は半獣化し、膂力と速度を増した拳を叩き付けて来る。恐ろしい膂力だ。拳に手を絡めるようにしてこちら側へと引き倒し、そのまま後ろへと振り落とす。

こちらへと飛行魔法で加速しての蹴りを放とうとしていたネギの蹴りが見事に小太郎の脇腹へと命中する。

「ぐげっ!？」

「あつ！」

一瞬目を見開いたネギへと延髄狩り。そのまま気絶し、シャマルを呼んで小太郎を治療してもらう。

そして、二人が気付いて昼食なのか朝食なのか夕食なのかも分からない食事を取り、反省会を始める。

「さて、お前等の戦い方で不味かったのは何か分かるか？」

「えっと……攻め込みきれなかった事でしょうか？」

「分からん！」

少しは考えろよ犬ッコロ。

「はあ……まず、小太郎の悪いところだ。お前の戦い方は悪くなかった。状況把握も出来ていたし、ネギとのコンビネーションも上手くいった。」

だが、お前はネギに合わせてもらってるだけだ。自分から歩み寄ってみる。相手の呼吸と目線の動きを見極めるんだ。

それと突っ込みすぎだ。ネギが攻め込みきれなかったのはお前が原因でもある」

「えー、せやけど、ワイの速さについてこれるんか？」

「そんなもんは戦いの歌の錬度次第だ。次にネギ。お前は人を心配しすぎだ。小太郎を気遣いすぎてる。少しくらい強引に攻めてみる。それと無詠唱魔法に少し時間が掛かっているな。今回は問題なかったが、次からは無理をし過ぎるな。隙さえあれば詠唱してもいい。」

そして、威力のある魔法を使わなかったのも問題だ。お前が使った最高のレベルは中位の下位呪文だったな？雷の暴風くらい撃つてもいい。

時間は掛かるが、千の雷だって撃てるんだろうが。まあ、それは小太郎を巻き込んだろうが……俺はその程度じゃ死なんし、実戦で相手を殺さないなんてのは無理だ。

もしもお前がそいつを殺さなかったら、そいつは恨みを抱いてまた襲撃してくるだろう」

「だったら、また倒せるくらい強くなります！」

「阿呆。相手は人間だぞ。幾らだって卑怯な手段をとる。お前の仲間を洗脳して人質にするかもしれない。罾を仕掛けるかも知れない。賞金を掛けられるかも知れない。

殺す覚悟が無いなら、魔法を執るのはやめろ。自分の手を汚すことは厭ってはいかん。本当に守りたい物の為に手を汚すくらい、甘んじて受ける。

手を汚す覚悟すらないのなら、守ることなんぞ諦めろ。守って、守った相手に罵倒されてでも守ると決めたんだろ？」

「はい……」

「何の覚悟もなければ喰われるぞ。相手だって死にたかない。どんな卑怯な手を使ってでも命乞いをするだろう。うちには年老いた両親がいるとか、幼い妹がいるとかな。

大抵は嘘だ。たまに本当の場合もあるが……慈悲を掛けるな。残酷かも知れない。だがな、敵は虎視眈々と一瞬の隙を狙っている。まるで獵犬のようにな。殺すと決めたら殺せ。

お前らが死ぬと寝覚めが悪くなる。というわけで、死んだら地獄から引きずり戻してもう一回ぶっ殺すから覚えておけ」

「はいっ！」

「えらい酷いこといつとるのう……」

「うるせえ。俺はやると思ったらやるからな」

シグナムとザフィーラに二人の相手をするように言って、外に出る。そして転移魔法で麻帆良へと向かう。アスナのところに行くのだ。こっちはこっちで色々と変わっている所がある。まずはタカミチが魔法を使えるというところだ。居合い拳だけではなく、魔法の射手なんかも使える。

アスナは記憶を失って居ないし、自分の能力を完璧に自覚しているので、それを操れる。ある程度はだが。

「よっ、やってるか？」

何時もの修行場所に転移すると、丁度いい具合に二人が修行をしていた。

「あ、カナメさん」

「カナメ？」

どうでもいいのだが、要と呼ばれたことが少ない。

「調子はどうだ？」

「ええ、いいですよ。アイドネウスの調子も」

アイドネウス。俺が作ったストレージデバイスだ。タカミチは呪文詠唱が出来ないだけで、魔力や気はある。つまり、呪文詠唱さえ出来れば魔法も使えるのだ。

デバイスというのは元々魔導師が演算と詠唱を肩代わりさせる為に作ったもの。流石に儀式魔法のサンダーフォールなんかは必要だがそれを利用して、アイドネウスに呪文詠唱をさせるようにしてみたところ、タカミチにも魔法が使えるようになったのだ。随分と喜んでいたなあ。

ちなみにだが、形状はネックレス型だ。ガントレット型にしようかとも思っただけど、居合い拳は拳の速さが必要だから、重いと駄目だからね。カートリッジは無い。邪魔だ。

「アスナもどうだ？」

「うん、いい感じ」

アスナも最近大分表情が増えてきた。麻帆良の学校に通い始めて五年ほど。今は小学校四年生だ。ちなみにだが、学校の成績は優秀だそう。

そりゃまあ、原作とは違って新聞配達のアルバイトをしていないから、勉強もちゃんと出来ているのだろう。元々の頭の出来はいいのだから。

NEGIだけではなくASUNAになってしまったな……というか、タカミチも魔法が使えるようになってるからTAKAMITTIか？いや、もううちのヴォルケンリッター異常な強さだから、VITAとかSINGUNAMUとかだろうな。英語表記じゃないのがミソ。

「ハマノツルギは使えそうか？」

「まだ、無理」

ハマノツルギ。アスナ専用のアーティファクトだ。アスナ専用というよりは黄昏の姫御子専用といった方が正しいか。所有者の名前が刀身に刻まれる。

これは魔法無効化能力を外部へと放出する特製を持っており、持つだけで無意識に伝導させる事が可能なほどに能力との相性が良い。材質不明だ。

難点といえば、魔法を無効化してしまうので認識障害符や影の倉庫に仕舞えないことだろうか？魔法世界ならそれでいいんだが、こっちだと無理だな。

その意思に呼応したのか、ハリセンという形を取っているが、使用者の意思次第で剣の形を取り戻す。しかし重くなるので使えない。今のアスナは小さいしな。

感掛法を使えばいいのだが、今のアスナではあつという間にバテてしまう。中学生くらいまでになれば、気の使用だけでも十分なんだろうけど。

「うーん……」

「どうしたんですか？」

「うん。ネギと小太郎も丁度いい具合に育ってきたし、アスナと戦わせて見るのもよさそうかなって」

その言葉に、タカミチがこちらへと顔を寄せて耳元で喋る。

「それ、大丈夫なんですか？」

「……やっぱりまずいかな？」

アスナはナギと一緒に旅をしていたのだから、当然の事ながらナギを知っている。趣味とかも。

そして、自分の姉であるアリカ姫と結婚した……つまり所ネギはアスナの甥である。逆を言くとアスナはネギの叔母である。

それだけならいいのだが、ネギには故意にその事を秘密にしてあるというか、俺は紅き翼所属だと言う事は話していない。昔の知り合いだという事しか言っていないのだ。

スタン爺さんやネカネさんにも話さないように言っている。両親のことは知りたいだろうが、今は話さないほうがいいのだ。

確かにナギは素晴らしい功績を残したが……自分がやりたいが為にやったのだ。気に喰わないからと言って戦争に参加したくらいだ。義なんぞ無いも同然だ。

その事をネギには理解して欲しい。自分自身の意思が重要だと言う事を。子供の頃からナギの英雄譚を刷り込まれたら、盲目的にマギステル・マギを目指すだろうから。

「まあ、アスナに口止めしとけばいいだろ」

「まあ……大丈夫ですかね」

アスナにはギアスも掛けられないからなあ。まあ、アスナは賢い子だから、いやASUNAは賢い子だから。

「んじゃあ、つれてくるからちつと待ってるよ」

転移。こっちのゲートは面倒だが、リリなの転移魔法はそれほど難しい魔法ではない。Aランクあれば使える魔法だ。まあ、全体からすると十分に難しいが。

で、別荘に入ってフルボッコの二人をザフィーラに担いでもらって外に出る。普通は中に入ったら一日は出れないのだが俺の別荘はそ

こらへんの制約は無い。

「そういえば、夕飯はどうしましょうか？」

「ああー……麻帆良の食堂を使えばいいだろ。いい加減イギリス料理は飽きた」

一年もコツチに住んでるので、日本食が恋しくて仕方ない。態々転移魔法で家まで帰るのもアレだし、時差があるし。

「フフ……日本食は久しぶりですね。楽しみです。ええ、楽しみです」

シグナム、和食党だからなあ……俺も和食党だけど。

「グイーター！今から日本に行くぞー！」

というと、物凄い勢いで扉が開かれてコツチにやってくる。背中には水銀燈が乗ってる。

「いやった！行こう！早く行こう！」

テンションたけえな。なんでかというところ日本のアイスが食いたいらしい。日本でしか売ってないアイスもあるからなあ……。

転移魔法で買いに行けばいいんじゃないかとも思うが、こらへんはそれ、らしい。よくわかんねえ……。

「シャマルは？冷蔵庫にでも入ってるのか？」

冗談がちやりと開いてみると、何故か涙目でこっちを見ているシ

ヤマル。俺はそつと扉を閉めた。

「俺は何も見なかった」

『あけてくださいよう！誰かたすけてええええええ！！』

オープンチャンネルで念話が響く。実を言うと、この世界で念話が通じるのは俺とヴォルケンリッターだけだ。術式を理解して無いと使えないから。

あんまりにも五月蠅いのであけてやると、騎士甲冑を身に纏ったシヤマルが出てきた。騎士甲冑には体温保護機能もあるからな。

「はうう……く、暗くて寂しかったんですよ！そ、それなのに！」

「いや、分かったから。泣くな。んで、なんであんな所に居たんだ？」

「え、えつと……入れそうかなって思ってたたら、勝手に扉が閉まっちゃって……」

まあ……冷蔵庫って内側からは開けられないしな……そもそも入るなよ……というか、旅の扉を使えばよかったんじゃないか？手だけ外に出して。

そこらへん忘れてたんだろうな……うっかりシヤマルだし。シヤマルを泣き止ませる頃にはリインフォースも来ており、全員が集合していた。

「それじゃあ、行くか」

転移魔法を起動して全員で転移。リリカルな転移魔法は同時に複数

転移も可能だからな。ちなみに戦闘中に使えるようにも出来たりする。失敗すると悲惨な事になるが。いしのなかにいる。みたいな。夜天の書はそこらへんの処理能力が馬鹿げているので、魔法の同時使用は不可能になっても、高速で連続転移が可能だったりする。やらないけどね。

んで、先程と同じようにアスナたちの所へと連れて行く。

「ネギ・スプリングフィールドです。よろしくおねがいしますね」

「犬上小太郎や！よろしくな！」

「神楽坂明日菜。よろしく」

今考えると同年代だよな。どうでもいい話ではあるのだが。

「さて、俺はちょっと用事があるんでな。ほれ、ヴィータ。お小遣い」

「ありがとう！」

ヴィータに五千円札を手渡し、他の皆も久しぶりの日本を好きなように楽しんで来いと言って解散。

目と鼻の先にエヴァンジェリンの家があるが、エヴァンジェリンに相応しい男になるべく今は会えない。身が引き裂かれる思いとはこの事か……。

るーと涙を流しながら、学園長室へと向かい。あいも変わらずエイリアンのような爺さんと暮を打つ。打倒シグナムを目指して修行中なのだ。

「ほっほっほ、中々の腕前になってきたのう」

「まあ、こつちも別荘で練習してるんでな。そうそう、別荘で過ごした年数を計算したら今年で73歳だった」

普通に外で過ごしていたとしたら、34なのだが。別荘を使いすぎている。別に不老なので問題は無いのだが。俺は寿命で死ぬことは無い。

病気には掛かるが、基本的に魔法で治せない病気は無い。とはいっても既に遺失魔法に含まれる魔法なので、俺以外には使用できないんだが。

細胞が癌化することも無いし、死ぬとしたら殺されるか自殺くらいだ。とはいっても俺を殺せる人間が居るかは知らないが。出来るとしたらヴォルケンスくらいだが、管理者権限で俺は襲えないし。

「ワシより年上になってしまったのー。カナメさんと呼んだ方がよいのかのう?」

「よせ、気持ちわりい。普段どおりでいい。単純に俺も練習してるんだって言いたいだけだ」

「そうじゃのう……むっ、待った」

「却下」

「むむ……」

顎に手を当てて考え込む学園長。全く、暮というのは奥が深い。使えない石や意味の無い石を死んでいる。あるいは使えなくして死なせる。と言っのだが、その後の動き次第でよみがえらせる事も出来る。

そして、最悪の一手すらも後に最良の一手へと変える。相手の考えを読み、相手の思考を誘導し、相手の邪魔をする。

まるでピアニストが奏でる旋律のように盤面は刻一刻と変化を遂げていく。それはまるでワルツを踊っているかのように。

「これでどうじゃ？」

「はい」

「ぬおおお……ま、待った！」

「却下」

うーむと頭を抱えるジジイ。

「ムッ？これどうじゃ！」

ビシッとジジイが石を打つ。む、これはいい手だ。これからの動き次第では挽回出来るかも知れないな。

「まあいいか……ほれ」

「ここじゃっ！」

「むづ……ここどうだ？」

「そりゃっ！」

一々ウルセエなこのジジイ。遮音結界張っておこつ。

「ほれ」

「……………！」

「ふむ……………これでどうだ？」

「……………！……………！」

「それ」

「……………？……………！」

「参りました……………」

「ギリギリだったな」

二半目の差で俺の勝ち。結構厳しかった。あのまま終わってれば九目差くらいで俺の勝ちだったのだが。

「流石じゃのう。これでワシの十六勝八敗かの」

「そうだな」

碁石を全て片付け、時間を見ると丁度いい時間だ。そろそろ帰らないとネギが明日の学校に遅れてしまう。

「そんじゃあな」

「またの」

ぴらぴらと振られた手を見てから外に出る。

森へと向かうと、どうやらネギ達は結構やられたみたいだ。アスナは昔からナギたちに連れまわされてたからな、運動神経はいいし、王家の魔力がある。

ナギたちの戦いも見ていたのだから、そこらへんが動きにも反映されてる。

どうやらだが、一対二を何度も繰り返していたようだ。ネギ&小太郎VSアスナ。小太郎&アスナVSネギなどを繰り返したらしい。時には三人で組みタカミチ相手をしたりもしていたようだ。中々頑張ってるな。

「ネギ、小太郎。そろそろ帰るぞ」

「あ、師匠。もう帰るんですか？」

「えー、なんや、もちよつとくらいええやんか」

「早く帰らないとネカネにお仕置きされるぞ」

「うわーはやくかえりたいなー」

「そやなーはよかえらんとあかなー」

虚ろな目をして何処か諦念にも似た感情が込められた声で呟く少年二人。そんなにネカネが怖いのか。
名残惜しいが、転移で家へと戻り、二人は眠りについた。さてさて、そろそろ卒業としてもいいかな……。

マギステル・マギとしての仕事。仕事を凱旋してくるのはメガロメセンブリアの老人共だが、そこには確かに救える命がある。

老人共は自らの権力を高め、保身の為に大抵の事を行うが、中には気概に溢れた義憤に燃える人間も居る。

元老院の下位であるレイル・アーカイドもその内の一人である。俺は彼からよく仕事を頼まれる。

元老院の一人である彼にはマギステル・マギを動かす権限があるのだ。今年で68にもなるというのに精力的な人間だ。

彼自身、元々は戦災孤児である。今から約59年前に行われた戦争の被害者なのだ。ただの孤児が元老議員になるなど、生半な努力では不可能だったろう。

一人でもいいから、自分のような人間を生みたくないと思っただけで笑っていた。

今日の俺も、彼からの仕事で動いていた。違法研究機関を潰すために。

魔法世界は旧世界とは全く違った文化を築いている。町並みは18世紀を彷彿とさせていても、空間モニターや空中を飛行する戦艦など、旧世界を遥かに上回る技術がある。

また、旧世界とは違って半人半獣が酷い迫害を受けてもおらず、闘技場などの文化もある。そこには当然ながら信仰も含まれる。

所々に旧世界と同じようなもの……例えば狼族ウェアウルフの信仰する宗教に魔狼フェンリルが居たりもする。不思議な共通点だ。こちらでは信仰の最高神として扱われてるなんて。

さて、信仰というのは案外重要である。精霊魔法もあるが、陰陽術のような魔法もある。そこには信仰魔法もある。

例えばだが、パンとワインがキリストの体と血に変化したという伝承があるように、ワインを魔法薬の材料に使ったりもする。

また、聖書には人間や動物の事は書かれていても、魔獣や吸血鬼は書かれて居ない。それを利用し、神の教えには吸血鬼など存在していない。だからお前は存在していない。

という風に存在否定の魔法もある。これは仙術の禁術（禁じられた技術ではなく存在を禁ずる技術）に近いものがある。禁術の方が汎用性があるが。鳥を禁ずれば飛べなくなるし、炎を禁ずれば燃えなくなる。熱いけど。

そして、信仰魔法の最たるものに再誕がある。イエス・キリストが復活を遂げたように、神もまた復活すると。それを利用し、人間に神を下ろし、神にしようというのだ。

当然ながら、人間はそんなものに耐えられない。片っ端から魔獣や異形へと変ずるだろう。だが、狂信者が恐ろしいように、それを平然と行う組織もあるのだ。

「灰は、灰に。塵は、塵に。土は、土に」

実験場の人間は死ぬことすらも許されない。灰は灰に帰り、塵は塵に。そして最後は土へと帰り、新たな生命の芽吹きを促す。

異形へと変じた人狼族らしき女性をレヴァンティンで一刀両断し、火で焼き払う。そこには骨すらも残らず、濃密な魔力と灰のみが残っていた。

死は開放か、それとも新たな旅立ちか。それはわからない。けれども苦しみからは逃れられたのだろう。そう思わなければやってられなかった。

神を卸す。それは神聖な言葉でありながら醜悪な意味を持つ。神を卸すには子供でなければいけない。それも胎児でなければ。

神の子であるイエス・キリストは処女懐胎であつた。現実的には不可能でありながらも、魔法を使えば出来ない事ではない。

そうして孕んだ子へと神を卸す。俺は信仰魔法について詳しくないから説明は出来ないが、それが生贄を伴う邪悪な儀式である事は間違いない。フェンリルは魔狼であり飢狼であるから。

そして母体として使われた女性性は神の力の一端を受け、その力に耐え切れずに異形へと変ずる。けれども神の一端であるから死は許されない。自殺とは最も罪深い行為であるから。

生まれた子供は神の力を宿し、けれどもやはり、その力に耐え切れずに死ぬ。あるいは異形へと変じていく。

呻き声と悲鳴、嚙り泣きが聞こえる。時折赤ん坊の弱弱しい泣き声と醜悪なバケモノの唸り声が聞こえる。精神が削れて行く。十五年前の自分。平和に暮らしていた自分には耐え切れまい。

最初に人を殺した。手が震えた。血を浴びたわけでもない、直接殺したわけでもない。それでも震えた。怒声と悲鳴が耳から離れなかった。

凄惨な光景に目を背けた。信じなくなかった、人がここまで残虐になれるなんて。壮絶な陵辱の光景に涙を零した。何故人はこうまでして人を貶めることが出来るのか。

今ではもう、震える事も、目を背ける事も、涙を零す事も無い。覚悟が出来たから。守りたいと、そう思ったから。仲間を、家族を、守りたいと。

震えていたら、仲間を守る為に手を動かせない。目を背けていたら、仲間の危機に気付けない。涙を零していたら、仲間には笑われてしまうから。

だから、耐えなくちゃいけない。けれども慣れてはいけない。人を殺す事に、凄惨な光景に、陵辱に。慣れてしまったら、壊れてしまうから。耐えなくちゃいけないから。

俺は確かにチートオリ主ではある。けれども人間だ。人を殺して笑ってなんか居られない。平然と力を振るう事も無い。それが暴力だ

と分かっているから。

一步踏み出す。足の下の羊水と血液の交じり合った液体が気持ち悪い。夜天の書に命令を送り、周囲に強力な火炎魔法を放つ。出来ない事はしない。それは残酷な事だから。

一步一步踏み出す。ここまでで殺した人間は全員が人狼族だった。珍しいことに研究者も全員が人狼族だった。狂信的だった。目はギラギラと輝き、人狼族の誇りである筈の毛並みすら手入れなどしていなかった。

気分が悪い。ここから早く出たい。襲い掛かってきた研究者の頭をシュベルトクロイツで叩き割り、戦意を喪失している研究者をバインドで縛り上げる。事情を聞く奴も必要だからだ。

最後の部屋。今まで機械的な雰囲気が一変し、古代の神殿のように石造りの部屋だった。部屋からむっとした血の匂いが零れて来る。十や二十では足りない。夥しい数の人間が死んでいるのだらう。

だというのに一切の腐臭がしない。扉を開く。血の匂いが更に濃くなる。そこは石造りの浴槽だった。大量の血液が満たされている。そこには巨大な肉塊。母体の成れの果てだ。

母体の腹、と思わしき部分が裂けている。これは明らかに特別待遇だ。大量の血液から魔力を感じない。恐らくは餌に使われたのだらう。だとしたら、既に生まれている可能性もある。

「居た……」

何故気がつかなかったのだらう。母体の顔に当たると思われる部分に、灰色の髪の毛を後ろに流している少女が居た。

その顔には表情もなく、ただ、自分の母体であった物体へと目を向けていた。禍々しいまでに強い神気。気を強く持っていないと食い殺される。

「おい、何をしている？」

「わふ……」

喋れないのか……？体つきは殆ど人間。耳と尻尾が生えている以外は人間だ。どちらかというハーフであるといわれた方が納得できる容姿だ。

いや、それとも、ハーフの子供にフェンリルを卸したのか？だとしたら、完璧な人狼族になってもおかしくないのだが……。

そもそも、仮にハーフや完璧な人狼族だとしても、喋れないと言う事は無い。小太郎だって喋るし、原作のメイドチーフだって喋ってた。メイドやつてるよか傭兵やつてる方があつてるけど。

「わう！わわう！」

「いや……意味がわかんねえよ」

敵意は無い。むしろ、尻尾をふりふりしていることからご機嫌なことが分かる。年の頃は12歳くらいに見えるが……生後数日所か数時間って所だろうな。

軽く魔法で探査してみる。なるほど、体の構成からすると、やっぱりハーフのようだ。ただ、そうなっているだけだが。実体はどちらかというと、ハーフの形をしているというのに近い。

フェンリル本体を卸したわけではないが、どうやらフェンリルの分霊を降ろしたようだ。分霊とはいっても、帝国の軍隊が出てきても勝てないレベルの強さだが。

で、まあ、さつきからずっと母体を見ていたのは、これが自分を生んだものだというのは分かるが、生物だとは思えないということからだろう。

生粋の人狼族だったならば、本能だけで気付いたのだろうが、ハーフだった所為で気付けなかった。そして始めて目にした自分と似た

存在を親だと思った。そういう事のようにだ。

ちなみにだが、理解不能の言葉を喋っているのは言葉が分からないわけではないようだ。単純に声帯が狼のものに近いからのようにだ。魔法生物の狼に酷似した生態を持っていたのだ。

「わうわう！わふふ！」

「やれやれ……一緒に来るか？」

手を差し伸べる。救われぬものに救いの手を。これはただの偽善だ。救えなかった命があった、だから変わりの命を救った。偽善だろうと為す事に意味がある。

「わう！」

「じゃあ、行こう。お前等も、行くぞ」

後ろで嘔吐を繰り返しているネギと小太郎に声を掛ける。認めたくなかったのだろう、魔法使いがこんなことをしてるなんて。

ネギは魔法使いは皆須らく立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指していると思った。魔法とは正義の為に。独善的な考えに。小太郎はこの状態の邪悪さに。人を人とも思わぬ所業。西からコイツを引き取った時、原作とは違って仕事はしていなかった。現実の辛さに、耐え切れなかった。

「覚えて置けよ。これが人間の邪悪さだ」

俺の言葉に二人は言葉を返さず、呆然とこの邪悪な場所を眺めていた。捕縛した研究者も交えて転移魔法で外に出て、レイルに仕事の終了の連絡をする。

近場の拘置所へと研究者を連れて行き留置してもらい、仕事は終了だ。

これは二人の卒業試験だ。試験とは名ばかりで、実際は現実の厳しさを知って貰うための試験だった。

これ乗り越えられるか、それ次第だ。

第六話 修行開始と日本と人間の醜さと（後書き）

ネギの強さはラカン戦前のネギと戦ったらギリギリで勝つくらいです。

闇の魔法を習得したら、ラカンに勝利することも可能でしょう。

小太郎の強さも同じくらいでしょう。我流でも師匠が居れば大分変わるらしいので。

アスナは原作でリーダーを決める戦いのところで、ネギに完勝できるくらいには強いです。ただ原作での話なので、この作品ではない勝負。で終わるでしょう。

タカミチは魔法が使えるようにはなりましたが、元々が魔法剣士だったので、あまり変わっていません。ただ、遠距離での攻撃手段が増えているので手ごわくなっていますが。

やっぱり水銀燈に関して削除しました。なんで出したんだろう。ちなみにですが、後半に出てきた狼娘は今後一切登場しません。ご了承ください。

ストックがなくなったので、更新は遅くなります。

第七話 転校生と変態と初恋と（前書き）

今回は物凄く暴走した気がします。

あと、前々から主人公は変態だと言っていましたが、更に磨きが掛かってしまっています。

あと、砂糖吐きそうです。

第七話 転校生と変態と初恋と

「詠春から頼まれたことがあるから、麻帆良に行かなきゃなくなつた」

「唐突ですね」

「まあな。しかも、期間が長い。なので、いつそのこと麻帆良に移住しようという事に」

「ああー、それもいいかもな」

最近ここの目がキツイのである。まあ、ヴィータとか年取らないしな……。

「それに、麻帆良は大きな街だし、結構美味しいものも多いんじゃないかなと」

「行きましょう」

即座に返事を返してくるリンフォース。彼女は食いしん坊キャラである。

「家に関してはジジイを脅して用意させてある。それと、皆には裏側の警備員になってもらうことになる。嫌なら断るんだけど、どうする？」

「私は異論ありません」

「あたしも」

「えーっと……私は治療係ですよ？それだったら大丈夫です」

「問題ありません」

「ええ、是非とも行きましょう。ええ」

お話聞いてたかな？リインフォース？まあいいよね。それじゃあさつそく行こうか。夜天の書の格納領域に家財道具を全て放り込む。いやあ、梱包とかしなくていいから楽だね。

あつという間に家から物が無くなり、引越し準備は完了となる。転移魔法で麻帆良の何時もの場所に移動する。

そして事前にジジイに用意させておいた家で部屋の割り振りをし、家財道具を設置するように夜天の書を置いていく。格納領域のものはヴォルケンスでも出せるように設定してあるからな

俺は学園長室に赴き、仕事を請ける旨を伝える。

「それで、どういう形で木乃香に関わるんじゃ？」

「うーん、妥当なのは教師だな。しかし！俺はここで予想外な札を発する！そう！それは転校生！生徒として転入すれば万事OK！」

「な、なんじゃってー！」

「安心しろ！俺には男の娘という無駄な自負がある！今年で79歳だろとかいう無粋なセリフはうけつけない！」

「来た！これで勝つる！黄金の鉄の塊であるカナメが女装程度できぬわけが無い！」

なんだか妙なテンションになりながら、事前に性転換魔法で女になっておいたので、肉体年齢を14歳にして（今アスナは中学二年の一学期である）着替え始める。

下着が男物だが、そんなもの後でどうとでもなる。今日は土曜日だから明日買ってくればいいだろう。

「どうだ！似合うかこのえもん！」

「似合っておるぞ。不気味なくらい」

わるうござんしたね。ちなみにだが俺は寮には住まずに家に住むことになっている。面倒だったから適当な理由でそうしてもらったのだ。

「よっしゃ！ちょっとアルに見せてくる！」

ひゃっほうと言った調子で学園長室を飛び出し、時速80キロ前後で走る。麻帆良では日常茶飯事の数値だから困る。

図書館島まで最高速度で駆け抜ける。時々矢とか飛んでくるけど、そんなもん楽勝で回避してやるぜ。

そう思いながら走っていると、図書館島を探索しているらしき女生徒を発見。女三人と男四人。妥当なチームって所かな？

まあ、関係ないけどね。ささっとトラップを回避しながら奥へと進み、アルが居る部屋のドアを蹴破る。

「おや……カナメですか。結婚してくれませんか？」

「断る。どうだ？似合うか？」

「ええ、似合ってますよ。意味不明なほどに」

なんでジジイとこいつは似たようなことを言うんだろうか。まあ、どうでもいいか。

「ほらほら、似合うやろ？私も学校の制服を着るんは初めてやから、似合ってるか不安やったけど」

「とても似合ってますよ。ええ、所で結婚を前提にお付き合いしてくれませんか？」

「断る言うてるやろ。なんば言うたら分かるんや」

「所で、その関西弁はなんですか？」

「うん？キャラ作りや！私が転入する予定の2-Aは個性的なメンバーの集まりや……ここには方言の一つでもあらへんと、飲み込まれるからな」

「普通に英雄という時点で十分なキャラだとは思いますが……あと、私と付き合っていただけませんか？」

「だが断る。そこらへんは人に言えへんしな……あえて男のままで転入するとか？両親の方針で女の子として育てられていたとかはどっや？」

「なるほど。いいかもしれません。そして男の子に告白されて暴露するんですね」

「むしろ男じゃないと駄目だって言われるんか？」

「私なら間違いなく言いますね……それはそうと、先っばだけでいいので……」

「二十万」

「円ですか？ドルですか？」

「いや、冗談なんやけど。貴様に処女などやらぬわ！というか、男とやるなんて冗談じゃない。所で79歳で童貞っていうのは不味いんだろうか？」

「貴方が死んだら医者を洗脳して童貞を拗らせて死んだとカルテに書いてあげますよ」

なにその最悪の死因。なにがなんでも死ねねえ。

「おや？厨二病の方がよろしかったですか？死因・心臓のインフルエンザの暴走により死亡。なんてどうです？」

「それは医者厨二病なんじゃないか？」

「では、右目のコキユートスブラッドを限界を超えて使用した為に脳に負荷がかかり死亡。ではどうですか？」

「だから、それは医者が……」

「ああ、雰囲気暗いと？ダーク系ではないとすると……セントス・ザナドゥ・アルカディアの拒絶反応により死亡。なんてどうでしょうか？」

だめだ、自分の世界に入ってしまった。自分の影を媒体にしたゲートを作り、来る時もこれを使えばよかったと今更気付く。やれやれだな。

自分の部屋を片付けた後、女性物の下着類を買っておく。自分の体のサイズは解析魔法で診断できるので計測の必要は無い。

なんだかいけない事をしているような気がしてドキドキした。今年で80になるのに……一人称もワシとかにした方がいいんだろうか？にあわないからやめとこ。

男の時は大きな目の服を買っておくだけで済んだけど、女の場合はそうはいかんよなあ。大きな目の服を買っにしても、下着は流石にどうにもならん。

別に男のまま転入してもイケそうな気がするが、流石にそれは不味いだろうと思う。女になっておけば、意識せずとも女性らしい振る舞いも出来るからな。変身魔法なんて目じゃないぜ。

今日は俺が転入する日だ。2・Aの一学期の始まりの日。俺は少々緊張しながらも入り口の前で待っていた。

「さて皆、今日、このクラスに転入生が来る」

「えー！あたしの情報網には何も情報が……」

「新しい友達が増えるね！」

「やったねたえちゃん！」

たえちゃんって誰？ちなみにだが、俺は本名ではなく偽名で転入することとなっている。英雄って言うのはうぜーからな。単純に偽名を使いたくだけでもあるが。

その名も八神はやて！当然ながら関西弁を喋ります。実を言うと、前世では関西圏の人だったからね。まあ、標準語に慣れてるから、意識しないと使えないんだけど。

「じゃ、入ってきてくれ。八神さん」

「はいな」

俺はガラリと窓を開けて中に入る。当然ながら設置された罫は正規の入り口に設置されているので意味を成さない。というか、いつの間に仕掛けた？ギャグ時空って奴か。

「……なんでそこから？」

「いや、普通、転校生に罫を仕掛けるんはお約束やる？引つ掛かるのは嫌やし、一発ウケを狙わなあかなーって」

「そういう意味不明な事はいいですから……自己紹介を」

「建前を教えてもらうために存在する学校に通うことになった八神はやてです。よろしゅうな」

「ねえ、なんで思いつきり学校の存在を否定するのかな？そう思ってたも少しは黙っておこうよ、ねえ？」

「建前を教えてもらうために存在する学校に通う事になったという本音を隠し、家の都合で転勤してきたという建前で学校に通うこと

になった八神はやてです。よろしゅう」

「全然隠せてないから！」

「家の都合で転勤してきた八神はやてです。よろしゅうおねがいします」

「今更隠しても遅いから」

「あんま五月蠅いとエクストリーム耐久バトルが火を噴くぜ」

「アハハハハ、それじゃ、HRははやてさんについての質問とかなしょうか」

見事なスルー。エクストリーム耐久バトルとは文字通りの耐久バトルである。別荘を使い、一日中戦い続ける修行である。

たとえ致命傷を負ったとしても、待機している医療班（シャマル一人だけ）が即座に回復。魔力がなくなってもシャマルが回復。気が無くなったら誰かが供給（生命エネルギー）なので魔力よりは簡単に分けられる）。

血反吐を吐こうが、泣き喚こうが、一日が終了するまでは戦いは終わらない地獄の修行である。

「それじゃあ、私が代表として質問させてもらうよ。私は朝倉和美。よろしくね」

「よろしくな」

「それじゃあ、妥当な所で彼氏とか居る？」

「いらんなー」

「そ、そう……んじゃあ、特技とか趣味は？」

「特技は男装と女装。趣味は料理とエクストリーム耐久バトルやな」

「え？あれ？男装？女装？えーっと……なんでこっちに転校してきたの？」

「仕事の都合やな」

「訛りあるけど、関西の生まれ？」

「せやで、ちゅーても、ちっちゃいころの話やし、似非関西弁みたいなもんや」

「部活に入る予定は？」

「私には帰る家がある……！激しく帰宅部の予定や」

「そ、そうなんだ……」

まあ、こんな感じで。え？受け答えがへんだって？俺が変なのは周知の事実だろう。

ようやっと解放され、用意されていた席はエヴァンジェリンのとなりだった。

「よろしくなー。あと結婚してください」

「いきなり何を言っている、八神はやて」

「結婚してください。貴方が激しく好みです。お慕いしております」

「貴様のような奴は二人目だ……それで、一体何のつもりだ？」

「純粋に貴方が好きです。Gガンダム風に言うなら、お前が好きだ！お前が欲しいイイイイ！ー！エヴァンジェリーー！ン！」

「うるっさいわケエー！遮音結界だと！？いつの間に……」

「え？叫ぶ直前に」

「クツ……その無駄な技術を告白のためだけに使うとは……で、本題に入れ」

「大真面目だ！15年前にも言ったけど、君が好きだ！」

「15年……？貴様、もしや国後要か！」

「ザッツライ！」

殴られた。

「貴様っ！約束の3年を無視して私の前にこのこと現れるとはい度胸だ！」

「は？3年って何の事？」

「呪いだー！登校地獄の呪い！貴様が解くはずだったのだろうが！」

「いや、知らんがな。初耳ですけど」

「なにいい！？しらばつくれるつもりか！ナギから貴様が呪いを解きに来ると聞いていたぞ！？」

「いや、だから本当に知りませんって。あいつの事だから伝えたつもりになってたか、忘れてたんだろ」

あいつならやりかねん。というか、わざとやってるような気がする。

「く、くく……いい度胸だ……おい！私の呪いをとけ！それから奴を追いかけてしばき倒してやる！」

「いや、無理。俺はこっちの呪いは専門外。ぶっちゃけた話し、ロストロギアの封印術式くらいしか出来ない」

「なんだとー！？貴様は魔法使いではないのか！？」

「悪いけど、こっちの魔法はあんま勉強してないんだよね。魔法の射手とか武装解除。それから闇の吹雪くらいなら使えるけど」

一応、燃える天空とか千の雷も使えないことは無いんだが、詠唱がつかえつつかえになる。燃える天空なんか使った回数十回以下だし。

リリカルな魔法の方が楽なのだ。呪文を覚える必要が無いし、術式の構成はデバイス側がやってくれるのだ。

とは言っても、楽をしている訳ではない。術式の構成はしてくれても、制御は自分でするしかない。制御に失敗したら魔力が逆流してリンカーコアを破損する。

同時にラグナロクを数十発撃つたりしている俺が制御に失敗したら、リンカーコアの損傷程度ではすまない。内側から弾けて死ぬ。だからといって、こっちの魔法を疎かにしているわけではない。属性に関しては変換資質が無い俺には便利な物だし、攻撃に偏っているリリカルな魔法では出来ない事がある。

人の記憶を覗いたり、絶対尊守の命令、意識シンクロ、傷つける事の無い武装解除、闇の魔法や式紙なんかもリリカルには無い技術だ。

「こつち？」

「ああ、俺以外には使えない魔法の事。西洋魔法やら東洋魔法はあんま詳しくないんだよね」

実際そのとおりである。この世界の魔法は皆全く同じ術式を使う。

術式とはこの世界で言うならば魔方阵や呪文の事である。

だが、リリカルな世界では自分が使いやすいように術式は改竄する。あるいは自分で作る。砲撃魔法の適正が低いスバルでもデイベインバスターが使えるのは自分用に改竄したからだ。

しかしまあ、デバイスが無ければ自分用に魔法は作れないし、改竄するにしてもこの世界の魔法は完成しているので手の加えようが無い。

精々、障壁突破を付与したり、追尾誘導を付与する程度だろう。どちらかという改竄ではなく応用に近いのだが。

それに個人で使うにはデバイスが無ければ無理だ。一応、この世界の技術でもデバイスは作れるだろうが……魔力の存在すら知らないのだ。ない物を調べる奴は居ないだろう。

仮に作れたとしても、処理装置が必要だ。体の周りに魔力の対流を作るフィールドとバリアの融合魔法である騎士甲冑の制御。飛行魔法や攻撃魔法の制御。

リアルタイムでの莫大な処理。更には他の人間のデバイスとの同期

による通信補助などもある。地球の科学力では一般家屋と同じくらいの大きさの処理装置を用意してやっとな平均的な武装局員のデバイス並みだ。

以前に家のパソコンと夜天の書をつなげたら、数百個のゲームを動かしてもヌルヌル動いて気持ち悪かった。

「だから、俺は呪いを解くのは難しいかな……」

軽く勉強すれば魔力任せで何とかいけそうだけど。まあ、言わないけどね。

「そ、そんな……」

へなへなとつとへたり込んでしまうエヴァ。認識障害と遮音結界を張つてあるので、ぶつちやけるとこの場で殺し合いをしても誰も気付かない。なので今までの言い合いも気付いてない。

実際の所、認識障害はあくまでも認識を阻害するものなので、魔法を知っているものには効果が薄い。今張っている認識障害の結界も、それほど高度ではないので、魔法を知ってるだけで十分気付かれる。また遮音結界も音を遮断しているのは魔力なのだ。高度な物になると、逆位相の音波を照射して打ち消すという完璧な遮音結界もあるが。今の結界は魔力を感知できれば意味は無い。

なので、俺の全身全霊の告白は、タカミチ、美空、アスナ、刹那、真名、超、茶々丸には思いつきり聞こえている。爆笑したいのか、恥ずかしさを堪えているのか。殆どが顔が赤い。タカミチは顔が引き攣っているが。

「くうううう！」

「ん？」

エヴァと目が合った瞬間。俺は何やら荒野に居た。幻想世界か、なるほど。ここならエヴァも全力を出せる。

俺の実力を見極めようって訳か。自分の姿を見れば、何時もの騎士甲冑。右手にはシュベルクロイツ、左手には夜天の書がある。

夜天の書にアクセスしてみれば、正しく使うことが出来る。精神世界だからな、自分の知っているものであれば再現も可能と言う事か。

「クククク……呪いすらも解けないなどと、『マスター・オブ・グリモワール』とまで呼ばれた貴様が本物かどうか……確かめてやるう！」

「なるほどね……」

どうやら、俺が本物の国後要か確かめるつもりか。偽名で学校に入学したわけだから、仕方ないといえば仕方ないのだが。

「氷神の戦槌！」

雷の斧と同系統の氷呪文。それは最早、戦槌等と言えるほど生易しい物ではない。軽く二十メートルを超える氷塊が形成される。

それもまるで満月のように丸い氷塊だ。生半な制御能力ではない。本来ならばただの氷塊として形成されるのだから。即ち、手加減をしているという事だ。

尖った箇所が無ければ、それは大質量での攻撃にしかない。言うなれば岩塊を投げられたのと同じなのだ。

そして俺は、その巨大な氷塊を……魔力で体を強化もせずそのまま受けた。

シュベルクロイツを持っていた右腕で受け止めた。そのまま腕が

折れ曲がり、骨が飛び出す。

体に激突し、肋骨が全テ砕ける。脊髓が圧シ折れル、骨盤が割レる、内蔵が破裂スる。お才よソ人とシテ生きていくのが、ふかノウになつタタタタタタタタタタタタタ。

脊髓は痛覚神経ヲ断絶せず、体中力ら激痛がハしる。痛い、痛い、イタイ、イタイ、イタイ、いタイ、いタイ！イタイイタイイタイイタイイタイイタイ！

「んあああああああつ！あああああつ！いいいいいいいいい！ふあああああああつああん！」

「ひっ……」

そして俺の声から自然と嬌声が零れ出る。そう……俺は女になるとマゾヒストになってしまうのだ。

エヴァに殴られたい、蹴られたい、踏まれたい、鞭打たれたい、氷付けにされたい、精神世界の中で目を抉られたい、臓器を抉られたい、性器を切り取られたい。

それは正常な人間の思考ではない。自らの死すらも望むほどの異常性癖。女の俺の心は、弱い。

「はひっ あひひひ 痛い……」

呂律の回らない声で自分の口から言葉が零れる。目は焦点が定まらず、口からは涎が垂れている。

人を殺したくない、死にたくない、傷つけたくない、傷つけられたくない。俺の女性としての心は非常に弱い。

自分の傷を快感として捉えなければ精神の平衡を保てないほどに。

「だから……貴女にもしてあげるううううう！」

折れ曲がった右腕でシュベルトクロイツを握り締め、ソニックムーブを起動する。即死していてもおかしくない重症で動いた為に、激痛が全身を駆け抜ける。秘所から蜜が溢れ出る。

一瞬でエヴァの正面にまで移動し、魔法障壁を力だけで強引にぶち割る。折れたシュベルトクロイツを両手で持ち、乱打。それを防ぐエヴァの対物障壁を無理やり破り、そのままエヴァの両腕を粉碎する。

骨が砕け、エヴァの白い肌から、更に白い骨が飛び出す。そして鮮血が飛ぶ。

「あはっ
」

顔に飛び散った鮮血。ソニックムーブで後ろへと後退し、唯一無事な左腕で頬についた血を取り、舐める。

「美味しい……」

女性の俺は、マゾヒストであると同時に重度のヘマトフィリア（血液嗜好症）であり、重度のネクロフィリア（死体愛好症）であった。

「ハハハハハ！貴様、私よりも余程バケモノではないか！」

「いいじゃないっ！バケモノで何か悪いの！？貴女は吸血鬼^{バケモノ}だけど人間^{ヒト}よ！私は人間^{ヒト}だけど異常者^{バケモノ}！何が悪いの！？」

「なあに、別に悪いとは言っていないさ」

エヴァが右腕を肩と水平に上げる。そして指先から断罪^{エンシス・エクセクエンシス}の剣が生成される。

手から一本ではない。指先から五本だ。それはエヴァの尋常ならざる魔法の制御能力がある事を示している。それを見て、俺の目とはとろんとした目付きになる。切断される事を望んでいるのだ。

「ただ……貴様が醜いと思ったただけだ！私と同じようになあつ！」

「あははははっ！」

物体を強制的に相轉移させ、蒸発させる事によって切断する断罪の剣。それは強いて言うならば、高周波ブレードに近いものである。強いて言うのであれば、実質的には別物だが。

物体を強制的に相轉移させるものだから、切れぬものなどあんまり無い所ではない。斬れない物など殆ど無いのだ（物質によっては相轉移しないし、防ぐ事も出来る）。

更には蒸発させる事により、気化熱によって周囲の熱を奪う。蒸発させたものの量にもよるが、氷点下までに温度が下がるのはほぼ確実。

仮に凍死しなくとも、血液が氷結するかもしれないし、しなくとも確実に体の動きは鈍る。空間的な断絶魔法。例えばディストーションフィールドでなければ防ぐのは難しい。

「いいっ、凄くいいっ！貴女をぐちゃぐちゃにしてあげたい！けどぐちゃぐちゃにされたい！どうしたらいいのっ！？」

ぐちゃぐちゃにしたいけど、ぐちゃぐちゃにされたい。醜く醜悪な二律背反が脳内で駆け巡る。

息を吸うたびに砕けた肋骨が痛み、破裂した子宮が疼く。鬨いの匂いがポンコツになった心臓を脈打たせ、エヴァンジェリンをぐちゃぐちゃにする想像の度に秘所が疼く。

醜悪かつ淫靡な自分の姿に怖気が走る。それすらも快感となって、

脳天に雷が落ちたような感覚。

「やってから考えればいいよね！あなたが弱くて、私が勝てば私が貴女をぐちゃぐちゃにする！貴女が強ければ貴女が私をぐちゃぐちゃにする！凄い！」

「クッ……本当に貴様はバケモノだな」

「あら、褒め言葉ね。バケモノっていうのはね、人を襲うために生きるバケモノ事。それを言うなら、私は確かにバケモノね」

自分には全くにあわない女言葉。けれどもそれは、陶然とした感覚を自分に伝える。

人は素顔の時は最も真実から遠ざかるが、仮面を与えれば雄弁に真実を語り出す。そのとおりだ、だから俺は、私は、仮面を被る。

「蹴られたい、痛めつけられたい、だから人を殺す。血を見たい、血を舐めたい、だから人を傷つける。死体を見たい、死体を愛したい、だから人を殺す。」

そんな私がバケモノじゃなかったらなんなの？それはもう 人の形をしたナニカよ」

「そうだな、そのとおりだ」

諦観にも似た表情で、エヴァンジェリンが呟く。数百年前からバケモノと呼ばれ続けていたのだ。その悲しみと絶望は推し量ることすらおこがましい。

俺も、圧倒的な強さと内包する莫大な魔力量の所為で、バケモノと言われたこともある。たとえ英雄と呼ばれていようと、結局はそう呼ばれるのだ。

これから数十年、数百年後、俺もいつかはバケモノと呼ばれるのだろう。それを想像しただけで怖気が走る。

「バケモノはバケモノらしく、殺りあおうじゃないか！」

「ええ、そうねええええ！」

修理が完了した全身で、リペアーを掛けたシュベルトクロイツでエヴァへと殴りかかる。それを断罪の剣で切断され、頬に三筋の傷跡が走る。

頬に氷を押し付けられたような感覚に、子宮が疼く。夜天の書を背後に浮遊させ、レヴァンティンとグラーファイゼンを取り出す。

「カートリッジロード！」

「Jawhol！」

「Explosion！」

ガシユンツ！と音を立て、同時にカートリッジがロードされる。儀式魔法でカートリッジに封入された魔力が進り、両方に魔力が籠る。

「ラケーテンハンマー！」

噴射孔から圧搾魔力が噴射され、爆発的な加速を生み出す。数回転した後、目にも留まらぬ速さで飛翔する。

数百発の魔法の射手が、雨霰と降ってくるが、それらを騎士甲冑の防御力を頼みに強引に突破。エヴァンジェリンの魔法障壁をぶち破り、そのまま両腕を叩き折る。

後退したエヴァンジェリンが放つ魔法の射手をシュランゲフォームとなり、炎を纏ったレヴァンティンで氷の射手を叩き落とす。空中に大量の水蒸気が上がり、それを魔力放出で吹き飛ばす。無詠唱で放たれた氷神の戦槌をギガントフォームに変化させたグラーフアイゼンで強引に弾き飛ばす。

まるで中隊規模の戦闘機で爆撃でも行ったかのような爆音と破壊痕が大地に刻まれる。それでもエヴァンジェリンは生きている。空中に八発の銀弾を生成。それらをグラーフアイゼンで叩き、高速で発射。それらを誘導制御し、エヴァンジェリンを追い掛け回す。八発の魔法の射手が無詠唱で形成され、シュワルベフリーゲンを正確に打ち落とす。恐るべき制御能力だ。

グラーフアイゼンを振り上げ、大量の魔力を流し込む。それこそ、崩壊寸前にまで。

Stts25話よりも更に馬鹿げた巨大さを持つ、ツェアシュテールングスフォルムへと変貌する。ギガントフォルムにラケーテンハンマーの噴射孔をつけたと考えればいい。

174

それだけの膨大な魔力を消費する鉄槌を振り上げ、一気に振り落とす。魔力の噴射によって加速したハンマーが地表と激突し、地表が捲れ上がる。

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬシネシネしね死ぬ死ぬしね死ぬシネシネシ
ネシネエエエエツ！」

莫大な気で強化された、尋常ならざる腕力で振り動かす速度だけで鉄槌が軋むほどの速度で鉄槌を叩き落す。

ハンマーを振り落としている箇所にいるエヴァンジェリンが、まるでミンチのようにぐちゃぐちゃになっていく。

原子の一欠けらも残さぬとも言つような気迫で振られる鉄槌、背後からの魔力反応に、咄嗟に鉄槌から手を離して短距離転移を行う。

「く、くくく……！まさかあそこまで馬鹿げた事が出来るとは思わなかったぞ！国後要！」

蝙蝠と化し、いつの間にか背後へと回っていた。深く抉られた背中の傷が冷たい感覚を訴えてくる。そして下半身の感触が無い。

恐らくは脊髄を傷つけられたのだろう。足が動く様子も無い事から、傷つけらたのではなく完璧に脊髄を破壊されたようだ。

「いい！凄くいい！もつとぐちゃぐちゃにしてあげる！その綺麗な顔にナイフを突き立ててあげる！その綺麗な肌を血で染めてあげる！

貴女の内蔵を引きずり出して壁に飾ってあげたい！貴女の骸骨を杯にして、貴女の血を飲むの。貴女のおなかの中に電球を入れてラップシェードにするの。

それとも皮だけにした貴女の頭をランプシェードにしたほうがいい

い！？貴女の心臓を体に繋げたまま壁に飾るの。脈打ったびに目を愉しませてくれるわ」

アクセルシューターを数百発形成し、一気に打ち出す。誘導制御なんてのをするほど馬鹿げた思考能力は無いので、全て直進だ。

それをエヴァンジェリンは氷神の戦槌を打ち出して防ぐ。そして空に煌きが走り咄嗟に頭を下げた。髪の毛が散らばり、左腕が落とされる。糸か。

「あああああつ！すごい！痛いの！そうだ！いい事考えた！貴女の手を切り取ってオブジェにして壁に飾るのよ。鹿の角みたいでお洒落でしょ？毎日毎日舐めて綺麗にしてあげる。」

貴女の指、白魚のように綺麗だから、とっても美味しそうよ。それからね、貴女の足は私の座る椅子の肘掛にするの。綺麗だから凄く使い心地がよさそうね……。

それからね、それからね、貴女の肝臓は私が食べてあげる。肝臓には解毒作用があるのよ。でも、貴女の肝臓は小さいから、あんまり効かないかしら？」

「生憎と、私の肝臓は貴様に食わせるほど安くないのでな！」

三個の氷神の戦槌。ミストルティンで石にして落とす。こちらへと放たれた二発の闇の吹雪をパンツァーシルトで防ぐことなどせずに、そのまま受ける。

腹に大穴が開き、右足が吹き飛び、左足が皮一枚で繋がっているだけの状況へと変わる。既に死に体だ。それも治療魔法で全て回復する。

消え去った右足も、なくなった左腕も、皮一枚で繋がっている左足も。全て元通りに直る。相変わらず馬鹿げた魔法だ。復元魔法の方が正しいんじゃないか。

「それからね！貴女の目玉も綺麗だから、大切に保管してあげるの。それとも私の顔に新しい孔を開けて、そこに埋めた方がいいかな？でも、食べるのも捨てがたいかもね？あなたの目、とっても綺麗だから、きつと凄く美味しいわ。」

それに、貴女の髪もとっても綺麗だからね、それでマフラーを編むの。きらきらと金色に輝いて、とっても綺麗なはずよ。

髪の毛だから、あんまり暖かくないかも知れないけど、夏でもつけられるからとってもいいわ！」

「貴様のような変態にくれてやるほど私は安くないと言っているだろう！」

「い・や・よ。絶対に手に入れるんだから！貴女をぐっちゃぐちゃのミンチにして、回復魔法で直してあげるのよ。それで何度も何度も殺すの。」

嫌って言うても止めてあげないわ。毎朝貴女の悲鳴を目覚まし時計にしておきるのも素晴らしいと思わない？

貴女の膀胱は私の水筒にしてあげようかしら？中に入れた水はとっても美味しいはずよ。だって貴女が600年も使っていたんだから」

「やはり貴様は変態だな！怖気が走るよ！貴様のような異常者は600年生きてきて久方ぶりに見た！」

「そんなに褒められたらまたイっちゃうわ！ひいあああああああああつあ！！」

びくりと体が痙攣し、スカートの中からてらりと光る蜜が溢れ出る。

「あつ、ああつ、駄目つ、そんなに氷みたいに冷たい目で見られたら、もつと燃え上がっちゃう！」

俺が悠長に喋っている間にエヴァンジェリンが完成させた魔法。えいえんのひょうがに閉じ込められる。

それへとリンカーコアに残っている魔力を全て放出し、宝石のように煌く氷を全て砕く。

「はああああ……凄かった……もつと、やりましょ？」

魔力がなくなっても、まだ気がある。

「お断りだ！」

「つれないのね」

「生憎と貴様のような変態を相手にするのは疲れるのでな。中々楽しかったぞ」

そう言うと、何時の間にか現実世界へと戻っていた。ファンタズマゴリアで過ごした時間は15分前後。現実では20秒程度かな。

辺りを見回すと、タカミチが引き攣った顔でこつちを見ていた。アスナもだ。あと美空も。というか全員だ。夢見の魔法はかなりの初級呪文なのだ。

まず、火よ灯れから始まり、次に風を起こす魔法や、物体操作の魔法、次に簡易精霊の作成。ここらへんが初級も初級だ。そして占いに入り、読心術や占星術に入る。

夢見の魔法は他人の夢見で占いをするものなので、占いの部類に入る。魔法学校を出ていれば誰でも覚えてる魔法だ。

刹那や真名は見て無いかとも思ったが、日本では夢というのも占い

に入る。というか、寝ている人間の精神は無防備だし、幻術に掛けられている人間は更に無防備だ。

ちょっとした魔力と、他人の意思に反応する魔法さえ知っていれば、誰でも覗けるだろう。真名は魔眼もちだ。

超は魔法をおおっぴらに使えないんだろうから見ていないようだが…… 真名に頼めば見せてもらえるくらい容易いだろうな……。

「わああああ！死にてえええええ！むしろ殺してくれええええええ！」

びっしょびしょになっている下着が気持ち悪い。というか、足元に水溜りが出来てる。悲しくなりながら、威力を落としまくった熱波武装解除で水を全て蒸発させる。

夜天の書のデータを除いてみると、体を痙攣させながらあふんあふん言ってる自分が写っている。虚しすぎる。というか気持ち悪い

「うつ、うつ……お、俺の暗部が見られたあ……家族ですら知らないのにいいいい！」

「お、おい……なんなのだ貴様？変態ではなかったのか？」

「うるちやいうるちやいうるちやい！俺は戦闘にならなければあんな変態にはならんのだ！そもそもアレは女の時だけだ！」

俺は男の時は重度のロリコンとペドフィリアと軽度のマゾヒストなだけだ！女になったらそれが全部重度になってヘマトフィリアとネクロフィリアが加わるんだ！」

「十分貴様は変態だああああ！私が認めてやる！」

「なにおう！？俺はお前みたいな小さい子に蹴っ飛ばされたり殴ら

れたりなじられたりするのが大好きなだけだ！」

「それを変態といわずしてなんという！？」

「立てば紳士！座ればジェントルメン！歩く姿は超紳士の俺を捕まえて変態だと！？興奮した！ババア！結婚してくれ！」

「断る！」

「うわーん、タカえもーん。えうゝ あんじえりんがいじめるよおー」

『そんなものは自分で何とかしてください。かなめくん。あと、誰がタカえもんですか』

デバイス間通信で即座に返される（俺は夜天の書だけではなく通信専用のデバイスを持っている）。まあ、遮音結界とかで周囲にはばれてないからな。

「フツ、まあいい。オリ主は慌てない。このオリシュことオリシユ・ヴィ・ペドフィリアの力を持つてすれば、幼女を惚れさせるなど容易い事よ」

「トンでもない家名だな」

「語呂がよかったから適当につけただけ。本名は国後要。よろしくおｋ？」

「ああ、分かった。分かったから結界をとけ。いい加減貴様の相手をするのも疲れた」

言われたとおりに結界を解除する。ちなみにだが、今まで使ったのはネギま的魔法だ。リリカル的な魔法はどれもこれも高度すぎて困る。

一番最初に出てきた封時結界だって時間軸から世界を切り離して、僅かに位相がずれた時間経過の少ない世界を作るというトンでも結界だ。

封鎖領域だってこっちの魔法だったら数人掛りで張るもんだし、温度変化から身を守る結界魔法なんてコツチの世界には存在すらしてない。

「それじゃ」

おもむろに認識阻害魔法を軽く掛け、教室から出る為に扉を開く。

『待て待て待てえい！何処に行くんですか！？』

『ダリイ、メンドイ、かつたるいの三つが揃ったとき、究極のカード！サボタージユが発動する！』

『つまりサボるんですね。程ほどにしといてください』

『気が向いたら授業には出てやる』

そのまま教室を出て屋上へ一直線。学園の中で俺が誰か知ってるのは学園長とタカミチとアスナとエヴァだけだ。国後要という名前の所では意図的に結界を強くしてボカした。

ファンタズマゴリアの中は流石に干渉出来なかったが、入ってすぐに俺の事を言い始めたから、問題ないだろ。もしあの場面を見たいのなら、ファンタズマゴリア展開から0・4秒以内に侵入しないと無理だ。

ちなみにだが、夜の警備には俺だけが参加する事になってる。学生組みとしてな。まあ、魔法生徒うぜーから、俺は雇われの傭兵みたいなもんだ。

「へえ、案外広いな。日差しもいい。屋上だから当たり前だけど。まあ、流石に少し寒いかな」

周囲に遮音結界、認識阻害、対流結界を展開。空中にフローターフィールドを複数作成。空中に浮かぶ安楽椅子のような形になったフローターフィールドに腰掛る。

微調整して寝心地がよいようにして、魔力で形成した擬似物質でフローターフィールドを覆う（騎士甲冑の応用）。さて、寝るか。

教室に配置したサーチャーから、何で俺がいなくなってるのか少々騒ぎになったが、アスナが説明してくれたのが分かった。

三時間目が終わる頃、俺が来ないか、あるいは自分が行った先に俺が居ないかビクビクしていたエヴァだが、痺れを切らしたか、教室から出て行くのが見えた。

ちなみにだが、すっかり寝てはいるがマルチタスクで脳の僅かな部分だけは動かしている。とはいっても、脳を休めることが出来ないので使いすぎは禁物だ。

あくまでも肉体を休める事だけしか出来ないの、何日もこれを続けていると脳のニューロンが壊れてしまう。そういえば、俺は不老だが、ボケは平気なんだろうか。

たしか、マルチタスクで恒常的に脳を酷使しているから、脳のニュー

「ロンの繋がりが常人と比べて異常に多いから、ボケは殆ど無いらしいが……。」

屋上の扉が開く音で目が覚め、エヴァが茶々丸を伴ってサボリに來たのに気付く。

俺の事を見て一瞬だけ顔を引き攣らせるが、未だに寝た振りをこいているので気付かれない。

「おはようございました」

「おきなくていい」

「いいえ、おきます。おはようございます、エヴァンジェリンさん」

「なに……？ 貴様本物か？」

「ええ、わたしはほんものですよ。ぐたいてきにいうとりせいをせいいっぱいおさえているのでこんなかんじなんです」

フローターフィールドの安楽椅子から降りて、エヴァと向き合う。

「なるほど……」

「まったく、それもこれも、あなたがかわいすぎるからいけないのですよ。そのながれるきんしゃ（金砂）のようなかみ、くろしんじゅのようにきらめくひとみ。

まるでにんぎょうのようにととのったかおだち、いしのつよさを感じさせるすごいそうぼう（双眸）。なにかもがわたしをくるわせます」

「淡々と褒め言葉を並べられても嬉しくないぞ……」

「全く！それこれもお前が可愛すぎるからいけない！その流れる金砂のような髪！黒真珠のように煌く瞳！

まるで人形のように整った顔立ち！意志の強さを感じさせる鋭い双眸！何もかもが俺を狂わせる！君のためなら世界とも戦える！」

「い、いきなり大声を出すな！前々から貴様は一体なんなんだ！私を愚弄しているのか！？私の事を嘲っているつもりか！」

「はあ？イミワカリマセーン。俺は真剣にお前の事が好きだ。そりゃあもうぶっちゃけた話、毎日毎日夢に見るくらいに好きだね。

15年前にお前と出会って、それから毎日だ。お前の事を考えなかった日はない。お前の事を想う度に胸が張り裂けそうだった。

あの時お前に言われた一言一言を今でも鮮明に思い出せる」

「ならば何故だ！何故貴様は今の今まで会いに来なかった！」

「言つたろ？俺はお前に相応しい男になるって。それに、これだ」

夜天の書の格納領域から書類を取り出す。メガロメセンブリアの元老院に発行させたエヴァの賞金首取り消しの書状だ。

十五年前からコツコツと元老院の弱みを握り、権力にしがみ付こうとするクズ共を脅してまで手に入れた書状。手に入れたのは二年くらい前なんだがな。

「これを俺の署名入りで提出すれば、お前の賞金首は完全に失効となる。もう、追われる事もなくなる。今の麻帆良にいる限り失効じやない。完全に失効だ」

「何故だ……？」

「何故ってそりゃあ、お前の意思を無視して賞金首を取り消しているか分かんかったし……」

「そうではない！何故私の為にそこまでする！？その書状を発行させるのも一筋縄では行かなかったはずだ！下手をすれば英雄といえども命の危険だってあったはずだ！

何故私の為にそこまでする！私には貴様の事が理解できない！」

「さっきから何遍も言っただろーが！俺はお前の事が好きなんだって！好きな奴の為に命掛けんのは当たり前まえだろーが！
さっきも言っただろーが！俺はお前のためなら世界とだって戦ってやるってな！それくらい好きなんだよ！」

「そんなものが信じられるか！」

「そうかよ……だったら、こいつでどうだ」

格納領域からギアスクロールを取り出す。それも最上級の。このスクロールに記された内容は魂にまで刻み込まれ、約定を違える事は出来なくなる。

約定を破らざるを得なくなったとき。その時は死を持って対価を払う事となる。スクロールに記された内容はたった一つ。

国後要はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルを裏切らない。

それは全てでの裏切り。誓った愛も、誓った約束も、全てを裏切る事は許されない。

また、これは保険でもある。もしも、もしもだ。もしもエヴァンジェリンが死んだならば、その時俺は約束を違える事となり、死を迎える。

「既に俺の署名はしてある。これにお前が署名すれば、俺はお前を裏切らない。たとえ暴力で縛られようが、俺はお前を絶対に裏切らない。

まあ、こんな書類なんか無くたって、俺はお前を裏切らないがな……まあ、俺の事を信用出来ないのは仕方ないさ。英雄なんて呼ばれてるんだからな。

正直な話、英雄なんて称号はいらねえ。俺は、お前だけの、たった一人だけの英雄ヒーローになりたい。お前がピンチになったら颯爽と現れて、どんな状況だって挽回してやる。

お前が助けてと叫ぶなら、俺は幾らだってお前の為に戦う。体が滅びようが、心が砕けようが、幾らだって戦ってやる。俺はそんなお前だけのヒーローになりたいんだ」

「……フツ、お前は本物の馬鹿のようだな」

「ありやりや、まあ、馬鹿っていうのは承知さ。何しろ15年間も片思いを続けて来たんだからな。

まあ、お前が、俺の事を嫌いで、会いたくもない、あるいは恋人になんかなりたくない。そう思うんだったら、このスクロールには署名しなくてもいい。

この賞金首の失効の書類だけは出させてもらうがな」

「だから馬鹿だと言っている」

「はあ？だから何が馬鹿なんだって？正直な話、頭はそんなよくねーんだ。論理系の魔法使いつつても、武闘派だからな」

「さつき、言っただろう。お前が十五年間片思いだとな。それは間違いだ」

一陣の風が駆け抜けた。エヴァンジェリンのロングヘアが風に靡いた。今の言葉は、風が招いた幻覚だったのか。

「私もだ。15年前。お前と出会い、私が吸血鬼だと言っても、態度を全く変えない所か、告白してきたのは貴様が始めてだ。そして、杖を預けられた。」

それから毎日だ。お前の事を考えた。毎日夢に見た。あの時のお前が笑顔が、言葉が、全てが忘れられない。

お前の仲間である、ナギ・スプリングフィールドを見つけ、お前の行方を聞いた事もあった。それが原因でここに縛られてしまったが……。

15年間、私もお前を想い続けた。私の事を忘れているんじゃないのか、あの時の言葉は嘘だったのか、あれは幻だったのか。そう想う度に胸が張り裂けそうだった」

「え、あ？その……？」

「何度も言わせるなよ。私はお前が好きだ。15年前のあの日、お前と出会い、その時から私は恋に落ちていた。恐らくは今まで生きていて、初めてのんだ」

そう言うと、エヴァは俺の手からギアススクロールを奪い取り、自分の指先を噛み千切る。ギアススクロールは魔力が込められた自分の血で書いて効果を発揮するのだ。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは国後要を裏切らない。

死が二人を別つその時まで、二人は互いを裏切らず、二人は約定を違えない。

国後要はその命あるまで、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルを守り続ける。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは、その命在るまで国後要を支え続ける。

新たに書き加えられた四条の約定。あわせて五条の約定。

「さあ、署名したぞ。刻め」

「いいんだな？もう二度と解除する事は出来ないぞ？マスター・オブ・グリモワールとまで呼ばれちゃいるが、そういった解呪はできないんだ」

「フツ、愚問だな。私はお前に惚れている。そう言っただろう？」

「そうか……俺もだ、お前に惚れてる。そりゃあもう、医者でも草津の湯でも治せないくらいにだ」

ギアスクロールを放り、解放のキーワードを唱える。スクロールは解け、俺とエヴァの体の中へ、魂の中へと刻み込まれていく。防衛反応か、夜天の書が起動しかけたが、押さえ込む。騎士甲冑が展開されてしまったが、ギリギリで防衛プログラムを停止させられた。

「これで、お前は私を裏切れなくなった」

「ああ、俺はお前を裏切れなくなった」

一拍起き、再び口を開く。

「そして、お前は俺を裏切れなくなった」

「ああ、私はお前を裏切れなくなった」

どちらともなく歩き出し、肉体の年齢を10歳にまで戻し、エヴァと同じ目線となる。

そして、どちらともなく差し出された唇が重なり合った。

第七話 転校生と変態と初恋と（後書き）

やべえ、何この主人公。自分の脳味噌が如何に腐っているか理解出来ました。

なんでエヴァがこんな変態に惚れてるんだとかいう突っ込みはしないでやってあげてください。きっと変態好きなんです。

あと、主人公は原作の頃からエヴァが好きでしたが、現実で出会って一目ぼれしちゃってます。

また、エヴァも一目ぼれみたいなもんです。自分の事をそのままに見てくれると思ったんでしょう。

激しくくさい告白でした。黒歴史を思い出したように、壁に頭を打ちつけたくなりました。

第八話 バカップルと告白と真実と（前書き）

アスナはクールです。原作みたいに馬鹿ではありません。まあ、武闘派ですけど。

第八話 バカカップルと告白と真実と

俺とエヴァは、ずっと抱きあっていた。互いの体の熱を分け合うかのように。まるで一つの彫像のように。

「ん、ちゅ……エヴァの唇、暖かい」

「は、ぷ……あふ……カナメもだ」

互いの舌を擦り合わせ、唾液を交換して嚥下する。それはまるで媚薬のように俺を狂わせる。

「エヴァの舌、甘いよ。んくっ……」

「はふ……馬鹿……」

エヴァの形のいい頭を右手で抱きすくめ、左手を体に回す。エヴァの暖かな体の感触が肌を通して伝わってくる。

このままずっと、エヴァの感触に溺れていたい。しかし、何時までもここに居ては人に見られてしまう。名残惜しいが唇を離す。

エヴァの唇からとろりと垂れた唾液がぬめって見え、どうしようもなくその姿が淫靡に見えた。

「はぁ……」

エヴァが甘い吐息を漏らし、フローターフィールドで作ってあった椅子に座り込む。もう一つ新しくフローターフィールドを作っておくか。

「……」

「……」

き、気まずい……互いに求め合ってキスしたけど、今考えたらファーストキスじゃないか。80まで生きてきてファーストキス……なんだか嬉しいけど悲しいぞ。

しかし、俺のファーストキスの相手がエヴァだなんて……幸せで死にそう。

「ふ、ふふ……嬉しいな」

「？」

「こんな日が来るなんて思ってなかった。正直な話、あれから一度も会ってなかった訳だし……拒絶されるのが関の山になって」

「わ、私もだ。あの日から一度もお前は私に会いに来なかった。私に相応しい男になるとか言い出してな……本当は私と会いたくなかったのかと思つたぞ」

「んな訳ないって。あれからも、俺はお前にベタ惚れですよ？命を投げ打つくらいにベタ惚れです。ほら」

フローターフィールドの椅子から降りて、エヴァの頭を胸に抱く。

「ほら？聞こえるっしょ？俺の心臓、こんなにドキドキしてる」

「ああ……聞こえるぞ。こんなにもドキドキしてる。今にも飛び出しそうなくらいに震えてる……山吹色の波紋疾走は使えないのか？」

「使えないよ。使えても、絶対に使う事は無いさ。エヴァと一緒に居たいからね」

エヴァを抱き上げ、俺の膝の上に座らせる。

「こんなにもドキドキしてて、十五年間も想い続けるくらいに俺の想いは強い」

「私もだ。ほら……」

そう言うと、エヴァが膝立ちになって俺の頭を抱く。エヴァの甘い匂いが鼻腔をくすぐる。僅かに自己主張している膨らみに耳を押し当てると、心臓が早鐘を打つ音が聞こえる。

「私も、こんなにドキドキしている。十五年間想い続けてきたんだ。私の想いは支えきれないほどに重いかも知れないぞ？」

「んなもん、支えきつて見せるって……何しろ、俺はお前にベタ惚れだからな。むしろ重い愛はご褒美です」

「フツ……私はお前のそういったところに惹かれたのかも知れないな……なんでも受け止めてくれるような寛容さ。」

私の事すらも平然と受け止めて見せた……私は、お前に期待してもいいのだろう？」

「ああ、任せろ。なんだって受け止めきつて見せらあ。でも、同性愛だけはカンベンな！」

「私にもそんな趣味は無い。フフツ……」

エヴァが俺の胸にもたれかかってくる。俺の胸、今は女なのでちゃんと自己主張している箇所、エヴァの小さな自己主張している部分が当たる。

そして、俺の首筋に鋭い痛みが走る。恐らく、首筋の肉を噛み千切られた。頸動脈が損傷し、そこから勢いよく血が噴き出すが、我慢するのとボーカーフェイスは得意技なので一瞬だけ身を強張らせたが、その後はそのままに受け入れる。

今日は満月ではない。あと9日で満月だ。なので、エヴァは吸血鬼としての力は無い。だから、俺の首筋を噛み千切ったのだろう。

エヴァの唇が首筋に当たる感覚が分かる。流れ出す生命の水をエヴァは貪るように飲み込んでいく。エヴァの可愛い舌が、首の傷口に差し込まれていく。

じゅるじゅると音を立てて啜られる血液。俺は性的快楽にも似た感覚を全身に感じながら、エヴァの頭を優しく撫でていた。

「ん……抵抗もしないとはな……」

「何でも受け止めきつて見せるって言っただろ？それにまあ、悪い気分じゃないし」

噛み千切られた箇所を指で軽く擦り、魔法で完治させる。俺にはヘイフリック限界が無いので通常の治癒魔法でどんなに深い傷でも治せる。

流石に腕が吹っ飛んだり、血液が一気に失われた場合は魂の情報を元に魔力で作られた擬似物質を生体に変える方法で治すが。しかし、ギリギリまで飲みやがったな。多分、今起き上がったら貧血で引っくり返る。そもそも魔力で身体機能を強化してなかったら、失血死寸前だ。

「んで、俺の血のお味はどうですか？」

「まず、お前が処女であり童貞だという事は分かった」

「ヘアツ!？」

「精液や経血というのは魔術的な意味を強く持つからな……誰かとまぐわった事があれば、血液に複数種類の魔力を感じる。

お前からは真正銘お前の魔力の味しかなかった。まあ、強いて言うならば男と女で魔力に違いが出るから、似たような味が同時にするのは不思議だったが……悪くない」

「へー……血の味ねえ……頭がおかしくなりそうだから気にしないでおう」

血の匂いを嗅ぐと、体が騒いで仕方ない。自分で言うのもなんだが大概トンデモナイ女だよな。

「じゃあ、俺はエヴァの唇を貰うでしょう……」

そう言うと、少し強引にエヴァの唇に口付けた。鉄の味がしたが、それすらも舐め取るように口内を掻き回してやる。

奥の方の歯から順番に叩くように舌を移動させ、歯茎をこそぎ取るかのように強く口内を蹂躪していく。

互いが唾液を奪い合うかのように舌を掻き回し、まるで舌を引っこ抜くかのように互いの舌を吸い上げる。

「ん、はあ……」

「と、唐突だな、お前は……んっ……」

互いが口を離し、一度息継ぎをすると、再びキスを始める。奪い合うかのように、求め合う。

唾液を嚥下しあう。エヴァの白い首が艶めかしく動き、それだけで俺の心臓は更に鼓動を早める。

「んあつ、あん……」

「む……はふっ……」

互いの吐息すらも逃さぬかのように、俺とエヴァは口付けを交わし続ける。遠見の魔法を感じたのでジジイの部屋に次元跳躍攻撃を放つ。消えたな。

「はあー……」

「はっ……はっ……はあ……」

俺とエヴァの間に唾液の橋が掛かる。それが蟲惑的だった。

「血の味がした」

「馬鹿者……当たり前だ」

少しすねたようにエヴァが俺の胸に顔を埋める。小さなエヴァの体を守るように抱き締め、空を見上げる。

太陽は鬱陶しいほどに燦々と照り付けて来る。今は四月の初めなので日差しはそれほど強くないが。

「いい天気だな……」

「フン……私にとっては嫌な天気だ」

「そうだな……なら俺にも嫌な天気だ。何しろエヴァが不機嫌になっちゃうからな」

「私は別に……お前が居れば……」

「ああもつ！エヴァったら可愛いんだからあ！」

「わっ、たっ、たっ！」

エヴァを抱き締めると頬擦りをする。本当にエヴァは可愛いんだから。

その後、何をするでもなく、エヴァと一緒に昼寝をした。授業なんてサボリです。15年中学生してる人と60年以上前に中学校を卒業した人には授業なんぞ無駄なんです。

Side アスナ

今日、転校生が来た。多分……というか、間違いなくカナメだろう。なんで女装してるんだろうか……そもそも何故窓から入ってくるんだろう？

まず間違いなく学園長の悪戯だと思ってもいいんだけど、自分からやったと考えてもいいかもしれない。

名前は八神はやてだった。国後要と何の関係性も見えないんだけど、どんな風に考えた名前なんだろう……それとも別人？

そう思っていたけど、無造作に遮音結界と認識阻害の結界を張ったから、少なくとも関係者なんだろう。物凄い告白を始めたのには驚

いたけど。

その後、このクラスに居る大物の魔法関係者、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルと幻想空間で戦いを始めた。

そこで見た光景はちよつと思ひ出したくない……というか、カナメにはあんな趣味があつたんだろうか？まあ、カナメだという確信は取れた。あんな魔法が使えるのはカナメだけだし。

カナメは一時間目が終わる前にどこかに行つてしまい、エヴァンジェリンも三時間目の途中で居なくなつた。殺し合いしてないでしょ
うね……？

少し不安になりながら、エヴァンジェリンが大抵サボるときに向かう屋上へと、購買で買ったパンを持って向かつた。

そこで、カナメが相変わらず意味不明な魔法で空中に椅子を作り出し、エヴァンジェリンと仲良さそうに寝ていた。予想外過ぎたわ。

「ねえ、これはどういう状況なワケ？」

「はい。マスターは国後要様と恋人同士の関係となりました」

恋人！？こ、これも予想外過ぎたわ……カナメは大抵の場合、予測の斜め四十五度上を螺旋飛行した上にバレルロールしてるからね……。ちなみにアルの場合はそこに木の葉落としが加わる。

「また、その際に最上級のギアスクロールによって契約を交わしました」

最上級のギアスクロールって言つたら、魂に刻み込んで強制的に約定を履行するタイプじゃない。下位版のギアスクロールは精神に刻まれて僅かな抑止力しかないのだ。

例えば、魔力を使わないという約定を交わしたとすると、魔力が使いつらくなる程度にしかならない。だが、最上級のギアスクロー

ルは永久に魔力が封印されてしまう。

もしも約定の不履行が起こった場合。その時は死を持って償わなければならないレベルのギアスクロール……本来なら国同士の約定に使われるものよ？

というか……アレって確か一枚二千万ドラクマくらいしなかったっけ？（一般的庶民の日給が一ドラクマ）まあ、紅き翼の面々はCMだのにも出てたし、CM一本で五百万ドラクマとか貰ってたしね。（資金体系は中世の頃と酷似している。一般庶民が一月二十ドラクマあれば生活出来るが、貧乏貴族でも年収は数万ドラクマを越えるのが当たり前）

「その後にマスターの賞金首が完璧に失効されました」

「嘘おっ！？」

こればかりは流石に驚いた。何しろエヴァンジェリンは600万ドルの賞金首だ。罪状を数えるとしたら、死刑を千回執行してもお釣りが来るくらい。

もしもエヴァンジェリンが自らの意思で慈善事業でもし始めたら話は別だけど、他の人間が勝手に動いて賞金首を失効にするなんて。というか、カナメがあの本（夜天の書のこと）で何かしてたけど、あれってもしかしたらその為の情報収集だったのかしら……？

前にまほネットを完璧に掌握して見せた事もあったし……それくらい出来てもおかしくないわね。十年もあれば元老議員相手に無茶苦茶な要求を飲ませるくらい出来るはずだし。

「カナメって本当にビックリ箱みたいな奴なのよね……」

「ビックリ箱……ですか？」

「そうよ。大抵の場合、何か困ったことがあつて聞きに行くと、大抵解決してくれるのよ……」

例えばタカミチの呪文詠唱が出来ないのも、道具に頼る事になってはいるが解決している。前に死んだ小鳥を生き返らせたのも見たことがある。あれは魂が残つてたからできたらしいけど。

他にも時間遡行をして見せたりね……未だになにがどうなつたらあんなことが出来るのか不思議でならないわよ。

そもそも二十年前の戦争は私は道具として使われてたからあまり覚えてないけど、初めてナギと出会ったときはラカンとカナメは居なかったけど、たった一人で戦況をひっくり返して見せた。

戦いは数というように、本来なら如何に強力な個人であろうとも数の軍勢相手には無力だ。魔法使いにそれは余り通用はしないが、相手が魔法使いならば同じはずなのだ。

だというのに本当にたった一人で戦況をひっくり返した。一般兵が数十人がかりで倒す鬼神兵を千の雷を乱発して薙ぎ倒し、軍艦を叩き落す。一騎当千の働きを見せた。

それは莫大な魔力も原因だけど、ナギには類稀なる戦いのセンスがあった。千の雷を感覚で使いこなし、我流の格闘技で兵士を薙ぎ払う。

そしてカナメは尋常ではない制御能力で千の雷レベルの広範囲殲滅魔法を同時に連発しまくるという馬鹿げたレベルの攻撃をしたりしていたらしい。

「本当に、ビックリ箱みたいな奴よ。今度は女装して転校してきたと思つたら本物の女になつて、果てにはエヴァンジェリンと恋人になつてるなんてね……」

本当に恐ろしい奴よね。そういえばカナメのアーティファクトってどうなるんだろ。誰とも契約してないし、見てみたいわね。

ラカンがナギとの契約で伝説の武具を取り出せるアーティファクトなんだから、ナギ並みの素質があるエヴァンジェリンとの契約だから、凄いものが出そうね。

んで、アーティファクトの種類は従者によって決まる。ラカンがナギとの契約で千の顔を持つ英雄（ホ・ヘーロース・メタ・キーリオーン・プロソーポーン）が出た。

それで、ラカンがそこらへんの魔法使いと契約したでしょう。普通の魔法使いだ。実力は並み。そうだとすると、千の顔を持つ英雄と同じ効果のアーティファクトが出る。

ただし、千の顔を持つ英雄とは明確な違いが出るだろう。例えば普通の武器になったり、一本しか出せなかったり。種類は従者によって決まり、位は主人によって決まるのだ。

だから、ナギが主人になれば大分効果の強いアーティファクトとなる。ナギと同等の力があるエヴァンジェリンなら、大分チートな物が出るだろう。

しかし……もしもカナメが主人になったらどうなるんだろうか。カナメの魔法使いとしての実力は凄まじく高い。広域殲滅魔法を同時に複数発動して完璧に制御したり。魔力量だけで言えばナギの30倍近い。

関係は無いが気の量もラカンの二十倍以上だ。未だに気の量は増えているらしいから、どうなってるか恐ろしい。あんな小さい体の何処にアレだけ莫大な気が眠ってるのだろうか？

兎角、カナメを主人としての仮契約はまず間違いなく伝説級のアーティファクトが出ると考えて間違いない。いや、下手したら神話級のが出かねないわね。まあ、私は絶対にハマノツルギが出るでしょうけど。

もしもエヴァンジェリンを従者にしたとすれば、彼女は吸血鬼だからウロボロスとか出そうね。神話級だしたらヨルムンガンドとかケツアルコアトルかしら？エヴァンジェリンは西洋系だからケツアルコアトルは無いわね。

彼女は吸血鬼だから、死と再生、不老不死はピッタリ当て嵌まるわね。それに女性だから子を産むという点でも再生は当て嵌まる。まず間違いないこれね。

カナメが従者だとしたら何かしら……？後衛型の魔法使いだから杖が出そうだけど、殴り合いでナギやラカンに勝つんだから武器が出てもおかしくないわね。でもラカンのアーティファクトでも杖が出るし……。

武器は要らないと判断されて補助系統の装備が出てもおかしくないかな？でもカナメの持つてゐる本って魔法の制御や術式の構成、それから色んな記録や計測も出来るからいろいろな……。

でも、他のは想像出来るわ。徳性は多分知恵……方位は中央、色調は虹ねスゴイ人生送ってるらしいし。星辰性はたぶん月。男にも女にもなれるんなら、正確には違うけどアンドロギノスみたいなもんでしょ。

ああ、日本にはその考えが少ないわね。男は太陽から生まれ、女は大地から生まれる。そしてどちらでもあつてどちらでもない両性具有は月から生まれるとなつてゐる。

不毛の大地であり、自らは輝けず太陽の光で輝く。どちらでもあつてどちらでもない両性具有にはピッタリだろう。称号は流石にわかんないわね。

それにしても、カナメのアーティファクトには本当に興味があるわね。なにになるのかしら？あとエヴァンジェリンのも気になる。というか、仮契約で終わるのだろうか？本契約に入りかねないわね。本契約に関しては18禁だからね。でも本契約になるとアーティファクトの性能が更に上がるわ。アルのアーティファクト、イノチノシヘンで説明すると、効果時間が爆発的に増えるとかね。完全再生が一時間とかになつてもおかしくないわ。

まあ、私が本契約してもなにも変わらないでしょうね。私のアーティファクトは私専用の物で、これ以上の変化が起こらないから。一応ハリセンにはなるけど、あんま意味無いわね。殺傷能力が無くな

るから便利だけど。

ああ、知的好奇心が押さえられないわね。エヴァンジェリンとカナメは元々旧世界の人間だから、こっち側の伝説の武器類が出るに違いないわ。どんなのになるか興味が尽きないわね。

伝説級が出るのは確定として、それ以上の神話級の物が出る可能性もある。本当にたのし『キーンコーンカーンコーン』み……。

「ねえ、今のつて……」

「はい。始業開始直前のチャイムです」

「うそーっ!？」

トリップしすぎてた!その後、私は急いでパンを詰め込んだ……授業には間に合ったわ。

S i d e o u t

S i d e カナメ

夢を見ていた。とっても意味不明な夢だった。なぜかといえば、相良軍曹と神宮時軍曹がコマンドサンボで戦っていたから。意味不明すぎた。そもそも全部作品が違うだろ。

ここがネギまで、相良軍曹がフルメタ、神宮寺軍曹がマブラヴ、そして俺が似非リリカル。本当に意味が分からない。まあ、あえて言うなら俺は他の世界の魔法やらなんやらも我流で再現したが。

「ふわあ……ああ、よく寝た」

指を鳴らして時計を開く。腕につけている通信専用デバイスの機能だ。通信専用とは言えそれくらいはある。デバイスは強いて言うなら携帯電話みたいなものだし。

空中に開かれたディスプレイには既に五時間目の授業が終わったであろう時間が記されていた。寝すぎたかね。

俺の上に覆いかぶさるようにして眠っているエヴァの髪を撫でながら空を眺める。茶々丸はというと、寝る前と全く同じ姿勢を取っていた。

「おはようございます」

「ああ、おはよう。昼頃にアスナが来てたみたいだけど、なんかあったの？」

一応起きたんだけど、アスナだから別にいいかなってそのまま寝たのだ。用があるなら起こすだろうし。

「はい。マスターについて幾つか質問された後、何かについて考え込んでいたようです。時折呟いていた言葉から推測した結果、マスターのアーティファクトについてだと推測されます」

「ああ……なるほど」

俺とエヴァが仮契約か本契約をした場合、どんなアーティファクトが出るかって言う話だろうね。まあ、俺もどんなアーティファクトが出るか気になるけど。

まず間違いなく伝説級のアーティファクトが出るだろう。下手したら神話級。Fateで言えば宝具だ。何しろナギと契約したラカン

のアーティファクトはゲート・オブ・バビロンモドキだし。

とはいっても、ラカンのアーティファクトは大した事は無い。伝説級の武器と言っても、この世界の武器には概念という考えが無い。Fateの武器が凄まじい性能があるのは、元から強い力もあったが、それ以上に信仰と概念の強さだ。

宝具は武器としての切れ味は確かにスゴイだろう。俗に言う名刀とかだ。だが、百年前のナマクラと現代の名刀で斬りあったら現代の名刀はスッパリ切れるだろう。

それだけに年月の重みは強いのだ。何しろ宝具は概念の重みで切っていると考えてもいらいだからだ。ラカンのアーティファクトは強力な魔力と高い性能を持つがそれだけだ。

無制限に大量に出せはするだけ。現代の人間でも作れるレベルの武器だ。とはいっても、買うとしたら一本数百万ドラクマを越えるだろうけど。

まあ、エクスカリバーとかデュランダルとかも出せるらしいが、普通の武器と変わらないそうさ。とはいっても切れ味なんかは結構スゴいらしいけど。

「まあ、俺も結構気になりはするけど……」

なんかエライ物が出そうぞで恐いぞ。聖王の鎧が使える武器が出てきたりしてな。アハハハハ……出たらどうしよう……。俺とエヴァの力量からすると、出てもおかしくない。

エヴァは原作だと凄さが分からないだろうが、とんでもないレベルの魔法使いであることは確かだ。ナギに匹敵する強さであると考えて問題ない。

とはいっても、ナギは魔法剣士よりで、エヴァは生粋の魔法使いだ。接近戦が出来ないわけではないが、近距離戦闘に持ち込まれたら勝ち目は低いだろう。とはいっても低いだけで勝つ可能性はあるが。エヴァは得意ではない属性の魔法も平然と使えたりする。例えば原

作なら雷の斧とかな。あれは一応上位古代語魔法だ。威力は中の上程度だが、雷が得意属性ではない魔法使いでは使うのは難しいだろう。

更にはエヴァは正反対の氷や闇といった属性が得意だ。氷と闇は五行思想で言うなら水に入る。雷は木になるので、思いつきり苦手だ。というか木は水を吸うので確実に負ける属性である。

更には上位古代語魔法を平然とぶっ放す力。原作で言うといえんのひょうがの事だ。あれは最上級の魔法だ。俺も一応使えるが、結構難しい。俺の使う魔法は魔力を方向付けて放っているだけなのだ。制御は精霊系と段違いで難しいが、感覚が違う。ネギま魔法が光だとしたらリリカル魔法はレーザーって感じだろう。

断罪の剣も最上級レベルの魔法だ。一本出すだけでも滅茶苦茶難しいのに五本同時に発動する事が出来る。確実に世界最高の魔法使いだ。ちなみに俺は十一本出せる。断罪の剣はリリカルという魔力刃なので、結構簡単に出来る。

実際の所、主側の魔力量で決まるわけだが、エヴァの魔力量はナギにほんの少し劣る程度だ。まあ、直接的な戦闘になったらエヴァの方が術式の構成や制御が上手いので、エヴァの方が魔力を無駄なく使うだろう。

ほぼ確実にチートレベルの武器が出てくる。そりゃあもうとんでもない奴。デビルズ・オーガンとかイシリアルとか古き月の力とか使えたりしそう。え？なんでそんなマイナーなもんばかりって？なんとなくだ。

「んな事考えても仕方ないか……エヴァ、エヴァ」

軽く呼びかけ、肩を揺する。

「う……起こすな……」

後五分とかじゃなくて、キツパリと拒絶されました。

「殺すぞ……」

殺害予告までされてしまった。

「仕方ないな……」

エヴァを転がし、仰向けにする。そして、形の良い唇に自分の唇を合わせる。

「んっ……」

十秒、二十秒、三十秒……だんだんとエヴァの眉が苦しげに歪んでいく。

「んーっ!？」

ようやくと苦しくなって目を開けると、顔を真っ赤にして転がって逃げた。

「な、なにをしている!？」

「目覚めのキス。一回やってみたかった」

「そ、そうか……」

次は私も……とエヴァンジェリンが考えているのを要が知る由も無い。ところで最近主人公の事を漢字表記にした覚えが余り無いのは気の所為だろうか。

「そろそろ放課後になりそうだし、戻ろうか？」

「ああ」

フローターフィールドを消し去り、結界も消し去っておく。仲良く手を繋いで降りていくと、階段を上ってこちらへと来るアスナが居た。

「ああ、もう起きたんだ。じゃあ呼ばなくてもよかったかな」

「何か用でもあんの？」

転校パーティーを開いてくれるわけでもないだろうしな。あれはネギがシヨタだったから起こったのだ。どうせ雪広が何かしたに違いない。

「うん。アレから必死に頭を悩ませて見たけど、結局のところ考え付かなかったから。二人が仮契約したらアーティファクト見せてくれない？」

「それを本気で言ってるなら俺はお前の正気を疑う」

「駄目元だから別に見せなくてもいいわよ。どーせいつかは見ることになるだろうし」

「そうかい」

なにやら顔を紅くしているエヴァの手を引いて家に向かう。ああ、俺の家ですよ？私の晩飯をご馳走してやらねばならんからな！

「アスナも来るか？今日は豪華に行こうと思ってるしな」

「いいのっ！？じゃあ行くわ！」

実を言うとアスナも結構食いしん坊である。なぜかって？ネギ達との修行の敵に徹底的に痛め付けて、沢山食べれば強くなれると教えたら馬鹿みたいに食うようになったのだ。

ちなみにだが、沢山食べると強くなるのはうそではない。沢山食べれば体を作り直すための材料が大量に供給されるので、体が素早く作り直されるのだ。当時は子供だったからプラセボ効果もあったな。意思の力っていうのは結構大切なもんなんだ。何も考えずに特訓するよりも、こんな自分になりたいという明確なイメージを持つだけでも体の出来具合は変わっていくのだ。

話を戻すと、子供の頃に食べた味は舌が覚え、脳が好みの味として覚える。子供の頃から野菜を食わせていれば、大きくなってからも野菜を嫌わないようになる。

ジャンクフードばかり食わせてればジャンクフードが好物になるのはこれが原因だ。菜食主義者の子供は大抵菜食主義になるのもこれが原因だ。偶然食べた肉の味に病み付きになって肉食主義になったりもするが。

んで、これが原因でアスナは俺の飯が好物だ。元が王族なのでどうかとも思ったが、長い封印の所為で料理の味なんぞ覚えていないらしい。しかし繊細な舌は残っていたので、俺の味付けをバッチリ覚えていたというわけだ。

ちなみに、ネギと小太郎も俺のメシが好物だったりする。なんでかって？ロンドンほどじゃないがイギリスの料理は雑なのだ。目分量なんて目じゃないぜ。

「ふふ……腕がなるなあ」

「今から楽しみね」

「……（一瞬母親みたいに見えたというのは言わぬが華か）」

華だろうね。

その後、家に帰ってエヴァに家族を紹介。ここは英雄の巣窟かと言われた。エヴァにだけこっそりと皆が人間じゃ無い事を説明しておいた。驚いてたなあ……。

まあ、俺の魔力さえあれば修理できる事と、完膚なきまでに破壊されても常時取られているバックアップデータで復活できること以外は人間と変わらんし。

強いて言うならリインフォースが一番人間離れしているな。ヴォルケンリッターは元々は人間だったわけだし。まあ、ユニゾンデバイスも元は人間だったのかも知れないけど。

まあ……ヴォルケンスが人間だったとしても4000年以上前の話なんだけどね。ヴォルケンリッターは元々は最強と名高かった騎士たちの生態データの記録だったのだ。失われ行く記録を残していく夜天の書に一番最初に記された記録だ。

それを見つけた奴が使い魔の作成技術を弄ってヴォルケンリッターとして作り出したのだ。ちなみに、他にも騎士のデータはある。俺への負荷を考えなければ幾らでも出せる。シグナム三十人とか。邪魔だから出さないけど。

んで、今は晚ご飯の調理中。今日は人数も多いし、沢山作らないとね。だから早めの調理だ。

「このクッキーを作った馬鹿は誰だあ！」

「ひえう！？わ、私です……」

部屋の隅っこで縮こまっているシャマル。なんととはなしにテーブルに置いてあったクッキーを摘んだら、何故かシャリシャリという音がして、鉄錆の味がしたのだ。

「こんな劇物を置いておくな！店売りのクッキーに見えたから食っちゃったじゃねえか！」

「う、ごめんなさいい……！」

良くある料理漫画のように見た目だけは美味しそうに作るの……実際の所、見た目だけ美味しそうに作るのは難しくない。

無色の調味料で酷い味付けにすれば匂いはともかく見た目は美味しく見えるだろう。だからって鉄錆の味がするクッキーを作るのは凄いと思う。だって匂いを嗅ぐとバターの香ばしい匂いがするんだ。

「そ、そんなに酷いのか……？」

「レシピ通りに作らせれば普通の味にはなるわよ。でも、自由に作らせると、酷いモノになるわ。シャマルルーレットっていう遊びがあるくらいだからね。」

シュークリームのシューの中にシャマルさんの料理を入れるのよ。それを間違えて食べたら……私は病院に運ばれたわ」

アスナがつかれきったような顔で呟く。そして俺が続いて自分の症状を教える。

「俺は病院に運ばれて重度の胃穿孔だと診断された」

「あたしは呼吸器の重度の炎症に胃潰瘍」

「私は肺結核に似た症状を発症した」

上から順に俺、ヴィータ、シグナムである。ザフィーラが一番最初に食べたので、俺が治療してやった。シャマルは何故か平気である。

「私には食わせてくれるなよ……封印状態の私は普通の人間と変わらんのだ」

「ハハッ、安心しろって。最近は強羅と憎羅とも仲良くなってきたんだ。強羅と憎羅には俺から言って置くよ」

「ええ、私からも言っておきましょう。強羅とは将棋の勝負をつけねばなりませんし」

「誰だ強羅と憎羅って!？」

「賽の河原にいる鬼。どうやら俺の両親は死んでないらしい」

どうも気になったので探しているのだが、どうやらここから三つほど離れた世界が俺が元居た世界らしい。

移動するのは無理でも、覗くのには成功した。俺が死んでから、まだ三ヶ月といった所のようだ。時間の流れが違いすぎる気がする。けどまあ、俺がその世界を見るときに、世界をつなげたから、時間の流れはこちらと向うが同期することとなる。

軽く説明すると、世界という箱の一部をチューブのように伸ばし、離れた世界にそのチューブを突き刺す。そうする事によって覗いたのだ。

この世界と向うの世界は三つ離れているから、通るほどの穴を作るのは難しい。

仮に行けたとしても、行って大丈夫だろうか？

今の俺はどう控え目に見ても八神はやてであり、ヴォルケンリッターがいる。更にはエヴァンジェリン。確実に騒ぎになるな。

ヴォルケンリッターには俺が神にお前等を貰ったという事とアニメにお前らが居たという事も説明したが……困惑するだろうなあ。

教えるのは拒絶されそうで恐かったけど、隠し事なんてしたくなかったから正直に説明した。そして俺の事を認めてくれた。嬉しかった。

「そつえばさ……」

「うん？」

「俺は、もともとこの世界の人間じゃない」

「魔法世界の出身か？その割には日本人らしい容姿に名前だな？」

「いや、違うんだ。俺は、言葉どおり、異世界の出身なんだ。平行世界とでも言うべき場所の」

「平行、世界……魔法理論に真っ向から喧嘩を売っているな？」

確かにな。魔法理論というのは文字通りの理論だ。物理学みたいなもので、永久機関が作れないのと同じようなものである。

主要なものでは、時間移動は出来ない、平行世界の移動は不可能、死者の蘇生は不可能。といったように。ちなみに俺は全部出来たりする。死者蘇生は条件があるが。

「俺はそこでは極普通の高校生でな、当時は確か16歳だったか。何の冗談かは知らんが、神の手違いって奴で死んだ」

「神？本当にいるのか？」

「いるらしいな。ここが俺の夢でも無い限りはな。そこで、その爺さんは俺に言つた。このまま死んで輪廻転生の環に入るか、異世界に新たな命として生まれ変わるかと」

「後者を選んだ……そういう事か？」

「まあ、な……転生する世界も選ばせて貰えてな。俺の元居た世界では漫画として描かれてる世界……この世界に転生してきたんだ。どう思う？」

「なにがだ？」

「いや、だからな……」

「私は今、ここで、こうして生きている。そして私の前には国後要が生きている。それだけだ。言っただろう？私はお前を裏切らないと」

「ああ……だから俺は……エヴァを裏切らない為に話した」

「それで十分だ。お前は私の事を見てくれている。誰かに聞いたでもない、その漫画とやらで見た私でもない、イマココに生きている私を」

「エヴァ……ごめん。変なこと言って」

「フン、次からはふざけた事を言つなよ。私は私でお前はお前だ。それでいい」

なんともまあ、豪胆な人（？）だ。俺の恋人は。平然と認めてしまっている。たとえここが漫画として記されている世界であろうとも、この世界は確かに存在していると。

まあ、そんな事を言ってしまうと、この世界にもゼロ魔やらがあるのだが、あちこちの世界を覗くと、それらしき世界があるのだ。

無意識に夢でそういった世界を見て、それを自分で本にしてしまう人が小説家なのでは無いだろうか？まあ、それも些事だ。

「つと……鍋が噴いてるな」

遮音結界を解除すると、鍋が噴く音が聞こえてくる。話してるうちに鍋が噴いていたようだ。味が落ちては敵わん。火加減を調節する。火加減を調節し終えてもとの場所に戻る。アスナは何も聞かない。遮音結界を張っていたと言う事は聞かれたく無い事だと分かっているから。

人の心の領域にずかずかと土足で踏み込むような無粋な輩ではないのだ。幼いながらも聡明であつた事を思い出すな。

「しかし、まあ……お前の親か。お前のように奇想天外な人物ではないだろうな？」

「気も魔力も確認されていない世界だからね。多分、あるにはあるんだろうけど、魔法文化自体が存在して無いんだと思う。」

何日か覗き続けたけど、魔法技術はなさそう。国家機密のある場所とかも覗けたし。だから、普通の人間だよ」

この世界は国家機密がある場所には大抵の場合魔法的な処理が施されている。国の機密に関わるともなると魔法の存在を知っていたりするのだ。

というよりも、そういった奴等には魔法使いの家系だったりする場合が多い。魔法障壁だけで銃弾は防げるし、魔法の射手は対戦車ライフル並みの威力がある。

国家の機密を守ることは魔法使いにも意味がある。国家機密には魔法使いの事も含まれているのだから。

「さて、そろそろ出来るぞ。アスナ、シグナム呼んで来い」

「はいはい」

何時もはこの時間、庭で鉛入りの木刀を振っているはずなので、アスナに頼んで呼びにいかせる。使えるもんは使っんです。

ヴィータには皿を並べてくれるように頼み、シャマルは盛り付け。ザフィーラには運んでもらう。ちっちゃい体で頑張るザフィーラくんかわいいです。いかん、また変な思考が出てきた。

その後は楽しくやった。四時過ぎから作っていたから、ちょっとばかり作りすぎた。まあ、うちの人間は全員腹一杯に胃袋が詰まっているような奴等ばつかなので全部なくなっただが。

アスナには門限平気かとも尋ねたが、そこらへんは魔法生徒だから問題ないらしい。つまり所、夜に外出しても許されると言う事だ。いいのかそれで。いいんだろうな。

という訳で、みんなでゲームしてます。スマブラだよ、スマブラ。どうでもいいけど、スマブラはXよりもDXの方が面白いと思う。

「ヌフフフツ……」

「アーツ！」

「フッ、ハッ、セツ、ヤッ、トオーッ！」

「らめええええええええええ！」

上から順に、俺、ヴィータ、リンフォース、アスナである。俺はミュウツィを使ってる。一番好きなキャラ。でも得意じゃない。得意なのはロイ。

ヴィータはキャプテンファルコン、リインフォースはこどもリンク・アスナはゼルダ姫である。アスナは何故かゲームが致命的なまでに下手糞なのだ。

リンフォースはそれなりにゲームをする。特にロクマンが好きらしい。ロクマンDASH3は何時出るんだと一日一回は言ってる。俺も言ってるけど。お気に入りはずロシリーズ。だが口に出るのはオメガのセリフ。レプリロイドに共感でもあるのだろうか。

アスナをみんなでぼっこんぼっこんにした後、二人が俺に向かつてくる。スマブラで一番強い俺だしね。ミウツーは最弱キャラと言っても過言ではないので囲まれると即死ぬ。

しかし、俺はその程度では負けはしない。辛くも二人を叩きのめした。やっぱ俺TUEEEE!!!

「良ゲーをやった後はクソゲーをやるべきだと思う。という訳で、バンゲリングベイを用意した」

「真面目にやると結構面白いんだけどな」

「当時の子供には凄い不評だったぞ」

リアルでプレイしてたからね、俺は。こつちの世界で換算すると、

俺って1968年生まれなんだよね。こっちにきたのは1983年
なんだけど。大戦終わった頃には既にファミコン発売してたし。

「そんなに不評なのか？」

「というよりも操作が難しい」

当時のラジコンみたいな操作法だったからな。面白いことには面白い
のだが、機動予測をして攻撃しないと攻撃がロクに当たらないのだ。
だんだん頭が疲れてくるし、何でゲーム如きにそんな苦勞をしなく
ちやいけないのか分からなくなってくる。

「あと、オプーナも用意してある。これはシステム自体は面白いん
だが……」

「キャラデザで失敗してるよな」

うん。俺はロクにやってないけど、ザフィーラがやってるの見たし。
ちなみにだが、ザフィーラはゼル伝シリーズがお気に入り。
その後、アスナは帰った。外泊は流石に不味いからね。

「仮契約をするぞっ！」

「いきなり何？」

「言葉どおり、仮契約をするぞ」

別に異存はないので、デバイスを使って足元に仮契約用の魔方陣を
描く。

デバイスによって展開される魔方陣は魔力によって空間に描画され

てるものなので、術式としての意味さえあっていれば問題ないのだ。だから仮契約にも使える。

ちなみに、陣の種類は双方主従契約だ。俺が主で従者、エヴァも主で従者という事になっている。どっちも魔法使いじゃないと出来ないけど。

陣の中心に立ち、エヴァと唇を重ね合わせる。何度も繰り返した行為といえど、やはり少し気恥ずかしい。陣から光があふれ出し、契約が完了する。

目の前に現れたカードを手取る。俺がエヴァのマスターカード、エヴァが俺のマスターカードを。

コピーし、コピーカードをエヴァに手渡す。エヴァもコピーカードを手渡してくる。

「……境界を渡る王。アーティファクトは王の財宝」

「真祖の女王。アーティファクトは霊長の殺害者」

なにこのチートアーティファクト？とりあえず呼び出してみると、宝石で飾られた小さな鍵が出てくる。これが宝物庫の鍵となっている。触っているだけで宝物庫の中身が分かるな。

エヴァの方を見ると、白い犬が居た。本物の犬というわけではない。式神に近いものだが……冗談じゃない。

抵抗する事が出来ない。殺害されるビジョンしか思い浮かばない。等しく霊長の殺害者と言う事が。

俺は慢心王の宝具、全ての宝具の原典が収められている宝具。生憎と俺は英雄ではないので、どの宝具も使いこなすことは出来ない。単純に使えるだけだ。それだけ十分な効果だが。

エヴァは魔法使いにはピッタリのアーティファクトだ。人間が相手ならば抵抗も出来ないで殺害されるしかない最強の式神。プライミツツ・マードー。

ハハツ、ワロス。俺が主になると、こんなとんでもないアーティファクトが出てくるのかよ。

「カナメ……」

「ん？」

エヴァに押し倒された。今日布団取り替えたばかりのベッドが心地よい。

「本契約……しよう？」

「い、いやいや……それはこう、なんというか……条例違反というか……そんな事ないか」

俺、80歳。エヴァ、600歳。わあ、全然問題無いね！

「私とするのは……いやか？」

「それはないっ！いや、だけどさ……こう、なんというか……」

「フツ、日本特有の奥ゆかしさという奴だな？生憎と私は中世のヨーロッパ出身でな……それに、自由気ままに育てられた……だから、欲しいものは手に入れる主義だ」

そう言うと、エヴァは俺の服を剥がし『省略されました。続きを読むにはエヴァ可愛いよエヴァと書き込んでください』（書き込まれても続きは書きません）

ハハッ、太陽が黄色いね。でも、今日は素晴らしい日だよ。エヴァ、可愛かったお。ちなみに、処女だったみたいですよ。自分でも言うてましたし。というか、吸血鬼に為り立てとは言えど、腕力は常人を遥かに凌駕してたんだから、抵抗くらい出来ただろうし。

ああ、それと……エヴァは生理は来てるそうですよ。600年間も大変ですね。10歳の誕生日って言うのは数え者なくて満年齢だから、来てもおかしくはないですし。まあ、早期初経ですけど。

出来たらどうしよう……認識障害でなんとでもなるけどさ……不味いよねえ。いや、出来るかどうか、そんな事を考えても仕方ないじゃないか。今はこの幸せを噛み締めよう。

第八話 バカッフルと告白と真実と（後書き）

主人公とエヴァ、最後まで行ってしまったの巻き。

アーティファクト解説。

王の財宝
ゲート・オブ・バビロン

形状は宝石があしらわれた鍵のようなもの。属性は剣なので正確には鍵剣とでもいうべきもの。英語訳するとネズミが押し寄せてくるので禁止。

ありとあらゆる宝具の原典が収められている。ちなみに最強の原典は乖離剣エアである。乖離剣エアはエヌマ・エリシュというバビロニアの創世記叙事詩の事であり、乖離剣エアは世界そのものと言っても過言ではない。それゆえに空間を切り裂いて空間断層を引き起こすということが出来る。士郎が解析できなかったのは情報過多と、剣としての形をしてはいるが、実態は叙事詩であり粘土板等だからである。

ありとあらゆる宝具の原典は文字通りであり、全ての宝具が存在している。ただし担い手で無い限りは真名解放は不可能。

しかし、宝具はそれだけ強力な武器である。A級の宝具ともなれば、ただの武器としても破格の性能である。また、所持しているだけでも大抵の武器は効果がある。例えば草薙の剣を担い手ではないとしても、持てば水の加護があり、雷切ならば真名解放が来ずとも雷を切り裂ける。

宝具が壊れることは滅多に無いが、壊れても内部に納めれば数十日で修復される。また、内部は時間が経過していないため、食物が腐ったりもしない。そして、宝物というのは何も武器だけではなく、

宝具以外にも財宝が納められている。それは食物だったり酒だったり装飾品だったり。この世の全てが納められていると行っても過言ではない。

内部から宝具を雨霰と発射することが出来る。

仮契約状態では全ての宝具はただの武器としてしか扱えず、武器は一本ずつ出すのが精一杯。それでも十分チート性能だが。

本契約に移行したことにより、全ての宝具の担い手となる。また、無制限に宝具を発射可能。全ての宝具の真名解放が出来る為、ギルガメッシュよりも強力である。流石に宝具を出すタイムラグはくならない。

どうでもいいが、ギルガメッシュは古代ウルクの王であって、バビロンとは何の関係も無い。なので王の財宝が文字通りのバビロンのものだとすると、英雄王でもなんでもなくただの泥棒である。

元ネタ、F a t e / s t a y n i g h t

フライング・マダー

霊長の殺害者

白い獣。獣という分類なのは、見る人によって形が変わるからである。ちなみにカナメには白い大型犬に見え、エヴァには白虎のように見える。

式神とも使い魔とも言いがたいが、生物で無いとも言いがたい。何とも説明しにくい物体だが、生きているのは間違いない。

人類に対する絶対的な殺害優先権を持ち、人間は抵抗することもなく殺されるしかない。亜人も人類に含まれるので、対抗出来るのは悪魔や式神等の使い魔なのだが、ザフィーラと対等に渡り合う程の強さなので、アシュタロトなどの魔王レベルでない限りは倒すのは不可能と思われる。

命令を聞くのはエヴァンジェリンとエヴァのマスターであるカナメ

だけである。

仮契約状態では命令を聞く事しか出来ない。本契約に移行したことにより、会話が可能に。また、使い魔と同じように人間形態に変化することが可能となる。その場合はエヴァンジェリンを銀髪にした容姿となる。

実は今後一切使われる予定のないアーティファクト。

元ネタ、Type-moon作品

どうでもいい元ネタ紹介。

デビルズ・オーガン DEVILS DEVELO CONCEPT

イシリアル 輝光翼戦記天空のユミナ

古き月の力 月と貴方に花束を

二十万アクセス突破記念雑談（前書き）

最近アクセス解析でアクセス数を見れることによりようやく気付いた馬鹿な私です。

二十万アクセス突破記念雑談

要「二十万アクセス突破ですよー。というか、普通は一万アクセスとか五万アクセスの時に始めてやるべき。そうするべき」

エヴァ「気付かなかったから仕方ない。そもそもアクセス解析が何か分かっていなかったくらいだから……」

要「まあ、それは置いて、純粹な疑問とお便りに返答を出します」

エヴァ「よし、幾らでも質問するがいい」

要「はい、エヴァが説明眼鏡を装着したので、早速質問に移りたいと思います。

えーっと……『要って誰ですか？』だそうです……」

エヴァ「……この作品の主人公の名前を漢字表記にただけだ。皆にカナメと呼ばれているから忘れるのも仕方ない」

要「はい、テストの時にも間違えて『国後カナメ』と書いてしまいました。ちなみに、国後は『くなしり』と読みます。苗字の元ネタになったのが某エロゲの男の娘主人公だったりします。意外な共通点ですね。ちなみに、元ネタのエロゲでもポンポン性転換してます」

エヴァ「誰もそんな事は聞いて居ない。カナメの処女は貰うが。では、次に移るとしよう。『本契約でアーティファクトの効果が変わっていますか？』だそうだ」

要「オリ設定ではありません。まあ、本契約でこうなるかは分かりませんが、原作では本契約によってアーティファクトの効果が変わる旨が説明されています。原作の楓のアーティファクト、天狗の隠れ蓑。内部の家に住むことは出来ても時間制限があり、出る必要がある。ただ、本契約する事によって、内部の家に一生住む事も可能である。だそうです」

エヴァ「実際の所、仮契約というのは謎が多いものだ。仮契約カードの絵柄も契約の精霊が描いてるとも言われているが、事実かは判明していないし、アーティファクトが選ばれる基準や何処から出てくるのかも判明してはいない。一説によると、アカシックレコードとも呼ばれる全ての始まりの場所から、その人間の始まりの要素と組み合ったものを選んでいとも言われるがな。だが、アーティファクトは誰かが作って物であることは間違いない。原作の、のどかのアーティファクトには製作者がどうだのという一文が見える箇所があるしな」

要「そこらへんは研究者に任せましょうね。じゃあ、次の質問です。『結局夜天の書は一体何時の時系列のものなんですか？』だそうです」

エヴァ「いい質問だ。要の持つ夜天の書は八神はやての下に転生するはずだった闇の書を掠め取り、神の力でバグを修正しただけだ」

要「おかげで、本来なら失われるべき機能や、失われた魔法も残っています。リインフォースが居るので夜天の書からの読み込みで魔法を使ってもタイムラグは少ないです。ただ一つ言うなら、本来ならなかったはずの八神はやてとの生活の記録は存在しています。平行世界の自分達という意味での視点では見えています。神様の計らいでしょうか？どうでもいい事ですが、夜天の書には蒐集機能も残っ

てて、使ってリンカーコアを集めれば、無限の魔力を手に入れる事も出来ます。チート具合が加速するのでしませんが」

エヴァ「案外簡単な質問だったな。では次の質問に移ろうか『リインフォースは食いしん坊だそうですが、メシは何処に消えてるんですか？』」

要「ユニゾンデバイスは生きているのでメシを食べてもしっかり吸収してます。でもトイレには行きません。きっと消化吸収率が100%なんでしょう。その癖に大量に食べているのは何ででしょうか？ちなみに、守護騎士プログラムであるヴォルケンスは、DNAではなくプログラムで体が構成されている所だけが違いなので、汗もかけばトイレにも行きます」

エヴァ「俗に言う食べても太らない体質、という奴だ。まあ、私も吸血鬼として体が固定されているから、太る事も殆ど無いが……吸血鬼は血をエネルギーとして利用するから、普通の食物はエネルギーになりにくい。一口血を飲めば、一日何も食わずに生きていけるほどだ。まあ、普通の人間でも血は栄養になる。人間の血は大量の鉄分を含んでいるから、大量に飲むことは出来ないが、少しずつ血を飲んでいけば、数週間は生きていけるそうだ」

要「まあ、血液は飲むと吐き気を催す成分を含んでいるので、大量に飲むと吐きますね。そう考えるとエヴァのシンジくんやアスカは凄いですね。ちなみに、吐き気がするのは共食いを防ぐための成分による影響です。では次の質問に行きましょう『ネギの心の強さはどれくらいですか？』なるほど、これはいい質問ですね」

エヴァ「心の強さなんて、ラカンのパンチ力はイチローのホームラン百万本分みたいな説明しか出来んぞ？（単純に比較とかが出来な

いという意味です）要が悲惨な実験場に連れて行ったために、人間の醜さを理解している。あの実験場は獣人にとつての正義（魔狼フエンリルは主宰神）であり悪がある。人間にとつては完全な悪だが、獣人にとつては正義もあり、悪もある。そもそも純粋な正義も悪も存在していない事を理解している。説明はしづらいが、自分達を襲つてきた敵を殺すくらいはするだろう。あのヘルマンを見逃したりはせず、心臓やら霊核やらを取り出して、石化の解除を調べるくらいはする」

要「ただ、助けられる人は出来るだけ救おうとするし、出来ることなら殺す事はしないでしようね。そこらへんが甘いともいえませんが、そこがネギのいい所でしょう。ちなみにですが、原作ではネカネしか助かっていませんが、今作ではスタン爺さんも助かっています。実はスタン爺さん、原作では好きなキャラの一人だったりします」

エヴァ「悪魔の石化は凶悪だからな、では次の質問に行こうか『性転換魔法って本当に誰得だったんですか？そもそも何で生まれたんですか？』というか、女力ナメが変態すぎませんか？』だそうだ」

要「痛いところいてきましたね。性転換魔法は実際には誰得ではありませんでした。女になりたい男とか男になりたい女も居ましたし、騎士の家系で後継ぎが生まれず、子供を男に変えたりといった具合に使われてました。騎士は体が資本なんで、男の方が有利なんですよ。あとは、あるじゃないですか、烈風力リンでも男装して騎士やったりとか。あれをガチで男になってやったわけです。じゃ、次の質問行きましょうか」

エヴァ「女力ナメの説明がまだだ。もしも要が女だったら？という風に精神が再構築されており、女としての要の精神は非常に弱かったという事になっている。その為、人を傷つける事を嫌い、自分が

傷つく事も嫌っていたわけだ。その為、重度のヘマトフィリアやネクロフィリア、そしてマゾヒストになってしまったというわけだ。これは本文でも説明してあったぞ。こっそりシヨタコンだったりするが」

要「じゃ……次の質問に移ろうか『カナメ可愛いよカナメ。男の娘とかご飯三杯はいける。カナメー！俺だー！結婚してくれー！』だそうです。誰ですか貴方は。結婚しません。俺はエヴァと結婚します」

エヴァ「要は私のものだからな！では、真面目な質問を見るとしようか。『カナメは具体的にどれくらい強いんですか？本当に最強でチートレベルなんですか？』だそうだ」

要「自分で言うのもなんですけど、チートレベルなのは間違いないです。近距離戦は喧嘩殺法ですが、ラカンやナギと殴りあうくらいは出来ましたしね。魔法に関してもチートレベルです。ラグナロクはSランク砲撃魔法ですが、それを数十発同時に制御しますしね。ちなみにですが、雷の暴風はAランク砲撃。デイベインバスターと同等だと換算してます。ナギの雷の暴風は大量の魔力を込めているので、AAA+レベルがあります。人と同じくらいの砲撃ですから、大きさはスターライトブレイカークラスですね。それ以上の砲撃を数十発同時です。魔法使いとしては最強とっていいです。広域攻撃魔法はデアボリックエミッションや破壊の雷を大量に使え、拠点攻撃も平然と出来ます。というよりも、俺は広域攻撃魔法の方が得意です。資質としては収束魔法の方が得意なんです、拡散タイプ、つまりところはデアボリックエミッションとかの方を良く使います。ちなみに収束魔法はなのは方のスターライトブレイカーとかの事です」

エヴァ「攻撃は得意だが、反面回復魔法は余り得意ではないらしい。まあ、記録されてる魔法を使うのだから、不得意もクソもないそうだがな。ただ、解呪は全く出来ないらしい。こっちの封印や呪いは、リリカル的な魔法とは相性が非常に悪いのだ。リリカル的な魔法は科学を発達させた結果の魔法であり、封印というのも物理的でありながらもアストラルに近い方向の力だ。こっちの魔法は神秘を使う魔法だ。例えばヤドリギで心臓を貫かれて死んだ不死の神が居たが、その影響でヤドリギは非常に強い不死殺しの力がある。ヤドリギで作られた槍で貫かれれば、私の傷は中々治らんだろうしな」

要「説明が長くなったな。では、そろそろ終わりにするとうかが？」

エヴァ「ああ。だが、この回は本当に必要だったのか？」

要「そんなもの俺に聞くんじゃない。それじゃ、お便り（感想）まつてまーす。どんな下らない質問にも真面目に答えますので、感想下さい」

エヴァ「感想が増えれば更新が早くなるかもしれないぞ？」

要「それじゃ、お疲れ様でしたー」

二十万アクセス突破記念雑談（後書き）

何とはなしにやった。後悔はしてない。

8月6日の午前二時くらいに修正。

第九話 神と異常性と顔合わせと（前書き）

一ヶ月ぶりくらいの更新です。すいませんでした。

パソコン壊れる 液晶壊れた よし、買い替えだ！サイフの中身が
アリマセーン。というわけでした、数日前にようやく買い換えたばかりなんです。

第九話 神と異常性と顔合わせと

頭が痛いでござる。朝起きたらすぐ近くにエヴァが居て、驚いて転げまわったのだ。頭から地面に激突したのは言うまでも無い。痛む頭を押さえながら、昨日何があつたかを思い出す。

「あう……」

すぐに恥ずかしくなつて、外を走り回りたくなる衝動に駆られた。頭のどつかでは今の自分は顔を真っ赤にして俯いていて、その手の人からしたら相当に萌える姿だろうという下らない考えが走っているが。

「そ、そうだ、朝ご飯。朝ごはん作ろう。朝ごはんは一日の活力。そう、朝ごはんがなければ人は頑張れない。」

そも、朝ごはんが重要視されるのは朝食を摂る事によって胃の活動を活発にし、脳を活性化させることによる。

一概にそうとは言えないが、朝食を摂ることによって血圧を高め、眠気を覚まし、意識をハッキリとさせることが出来る。

また、空腹を感じていない場合でも胃の内容は空っぽの場合がある為に、食欲がなくなるとも摂る事は必要である。

そして、朝食を毎朝必ず摂るのは生活リズムを整えることにも効果があり、体内時計の調節に重要でもある」

自己弁護みたいな感じで朝食の重要性をペラペラと語り、扉を開けるとところで自分が全裸だという事に気付く。

再び顔を真っ赤にして着替える。始業式は金曜日だったので今日は休みである。ゆとり教育のため、去年から土曜日は全て休みになったのだ。

まあ、俺は当時は立派な魔法使いとしての仕事ばかりだったので、特に関係はなかった。だが、今なら言える。ゆとり教育っていいもんだ。学力の低下は俺には関係ない。

たった一日でも精神がガリガリと削られるのに六日も学校に通ってられるか馬鹿野郎。前世は家で遊んで学校行つて寝る生活だったけどね。おかげで浪人しちゃったけど。中学浪人は俺だけだったよ。

「あさあさあさあさあさごはん、しっかり食べようあさごはん」

気を取り直して、歌いながら下に下りていく。今日の朝ごはんは何にしようかな？

冷蔵庫を開いて、今日の朝食について考えをめぐらせる。今日の朝食はサッパリと行こうか。

ちやかちやかと料理を開始し、何時もよりも一人分多い朝食を作っていく。こういうのって幸せだなあ。

何となく幸せな気分になりながら玉子焼きを切り分けていく。うーん……ラノベとかマンガだったら女の子がやってる事なんだけだなあ……。

まあ、料理は趣味だし、別に気にするようなことじゃないしな。魔法世界には男尊女卑なんぞ殆どないし。

そもそも、男尊女卑って言うのは非力な女は大した事ができないからって言う風に生まれたものだから、魔法っていう物が日常として存在してる場所では肉体強化魔法があるから生まれもしなかった。というか、魔法世界では女性の方が強い魔力を持つ事が多いので、どちらかという女尊男卑が生まれる可能性が高い。

「よし……後は米が炊ければ」

炊飯器を見てみると、もう炊けるようだ。全員分の茶碗を用意して、炊飯器の前で待つ。炊きたてよりも、少し待った方が美味しいんだ

けどね。

ふと思う。しゃもじと人数分の茶碗を手にして炊飯器の前で突っ立っている姿は、かなりシニールなのではないかと。どうもでいいや。炊飯器が米が炊けた事を知らせる音を鳴らし、俺は早速炊飯器の蓋を開けてしゃもじで混ぜる。なんで混ぜるかは知らんが、やるものらしい。

一口米を取って食べる。うん、相変わらず美味しいな。まあ、米研ぎは小学三年生からやってたから……かれこれ70年近いかな。そりや上手いさ。

「うん、あたいったらてんさいね」

ふと頭に思い浮かんだ言葉を言う。この世界に東方ないんだよなあ……首領蜂はあるんだが。そもそも65年以上前のこと良く覚えてるよなあ。

というか、人の記憶って150年分くらいしか保存できないんじゃないかなかったっけ……？俺、大丈夫かな……？

『それなら心配はないぞい』

唐突に脳裏に声が響いた。

「うひゃあうあー！？」

『なんじゃ、そんなに驚くことなかるうに』

『普通は驚くわ！いきなり話しかけてくんない！というかアンタ誰？』

思念通話の要領で返事を出してみる。

『なんじゃ、忘れたのか？わしじゃ、お主を送り出した神じゃ』

『ああ、神か』

あの意味不明なまでに輝いてて、美しいトリプルアクセル土下座をかましてみせた。

『うむ、その神じゃ。最近ではクワドラプルアクセル土下座を練習しておる。さて、脳の件じゃが、それは問題ない。』

おぬしの恋人である吸血鬼も既に600年以上生きておるが、昔の記憶をしっかりと覚えておるじゃろ？』

『ああ、そういえばそうだな。というか、なんで土下座の練習なんしてるんだよ……』

『神はやる事がなくてのう……ここには時間の流れという物もないせいで、ありとあらゆる世界の娯楽を集めてはおるが……すぐに飽きてしまうんじゃ。』

まあ、そんな事はどうでもよろしい。おぬしの脳は既にわしの方で調整を施してある。一応、永遠に脳がパンクすることはないじゃろ。

長すぎる人生に狂ってしまうかもしれないが。そこらへんはおぬしのほうでなんとかせい。人の精神構造というのは脆弱じゃからの』

『そうだな』

長すぎる生は別れと孤独を生み出す。あと百年もすれば紅き翼の人間は皆死んでいるだろう。ラカンが長寿種族だが、それでもいつかは死ぬ。

ネギやアスナもいずれ死ぬ。不死ではなくとも不老である俺は置き

去りにされてしまうのだろう。何れは別れを知らなければならぬ。けど、俺にはエヴァがいる。シグナムが、ヴィータが、ザフィールが、シャマルが、リインフォースがいる。共に永久を生きる事になるかもしれない仲間がいる。

それだけで人は安心できる。自分と同じ立場の人間がいるだけで人は幾らか安心できるものだ。人って言うのは姑息で汚くて弱い。だからこそ自分を必死で綺麗にしようと頑張る。

けど、最初っから綺麗な奴もいる。人間は誰だって弱いけど、きつと強くなれる。俺はそう信じてる。あのナギのように、まるで輝いているように見える人間がきつと居るって。

自分が弱いからこそ誇りを持って生きる人間も居る。エヴァが自己弁護と維持の為に女子供は殺さないという矜持も輝いて見える。その誇り高さに。

俺もそんな人間になりたい。だから、救える命は救いたい。手を差し伸べて、その手を取るなら、精一杯助けてあげたいと思う。

っと、話が脱線してしまったか。まあ、兎に角、脳味噌がパンクする心配はないって事か。

『おっけ、ありがとな』

『なに、アフターケアも仕事のうちじゃ』

転生させるのって仕事だったのか？

『おぬしの場合ちょっと違うの。人を転生させるのも神の仕事ではあるが、おぬしのように強大な力をつけての転生は滅多にない。

人を転生させて遊ぶような神はおらぬしの。というか、人に力を与えられるのはわしのような最高神だけじゃ。最高神はわしの他に二人だけじゃし』

爺さん、あんた最高神だったのか……あんな輝いてて、見事な土下座をする神が最高神なんてな……。

『フレンドリーが信条じゃからの。兎角、おぬしのように記憶を持つて転生するものは滅多におらぬが、おぬしのようにこちらのミスで死んだものにはしっかりとアフターケアをせねばならんだ』

なるほどねえ。

『ま、そういうわけじゃ。それではの』

そう言うと、神の気配っぱいものは消えていった。

ふと手元を見ると、しっかりと朝ご飯の準備を終えて、テーブルの上にみんなの朝ご飯を並べていた。主夫根性が染みついてるって奴か？

どうでもいい事かと思いつながら、王の財宝から何故か入っていた銅鑼を取り出して殴った。

この銅鑼、明確な名前はないが、かなり高名な品らしい。王の財宝にはこういったものも結構あるのだ。名前がなくとも素晴らしい効果があったり、美しいものだったり。

二頭の竜が絡み合っている彫金が施されている。王に献上される程の品だ。売り払ったら一体どれだけの価値があるのか、考えるだけで恐ろしい。

ちなみにだが、銅鑼の音は凄い。寺の鐘並みといえは分かるだろうか？少なくとも近くに居たら耳を塞ぎたくなるくらいにはうるさい。ましてや俺は強化した拳で殴った。

銅鑼が一回転して後頭部に激突しかかったが、何とか回避した。ちなみに、家の周りには遮音結界が張ってあるので問題ない。

家のあちこちでどたばたとした音が響き、一番最初に部屋に入ってきたのはシャルだった。多分だけど、シャルは起きてたのだろ

う。

「なにかあったんですか!？」

「朝ご飯もう出来たよ」

「……もしかして、呼ぶためだけに？」

「うん」

「何処から出てきたんですか……こんな大きなもの……」

真ん中が見事にへこんでいる銅鑼を見て、シャルが呆れたような顔をする。そりゃそうだろう、俺だってこんなもので起こされたら呆れる。

「うん、俺のアーティファクトみたいなもんかな……」

「じゃあ、契約したんですか？」

ニヤニヤとした笑みを浮かべながらシャルが尋ねてくる。うぜえ。

「見せてあげようか」

モーション登録した動作。つまり所指パツチンで王の財宝を解放する。背後の異空間から、大量の武器が顔を覗かせる。

一つ一つが莫大な魔力を秘めた宝具だ。それも全てがAランク宝具。真の名を解放してはたった一つの宝具の効果でSSSランク魔法を遙かに凌駕した威力を見せる。

所持者の魔力を集積、増幅、光に変換し、究極の斬撃として解放

つ星が鍛えし神造兵装エクスカリバー。

世界を焼き尽くしたとも、レーギヤルンの筐の中でシンモラと共に在り、九つの堅牢な鍵によって封印されているとも言われ、

剣とも杖とも枝とも言われるレーヴァテイン各種。つまるところ、剣としての、杖としての、枝としてのレーヴァテイン全てが。

原罪の名を冠するメロダック。太陽剣グラムの原型であり、グラムは時流れて王の選定に用いられたカリバーンとなった竜殺しの最強の魔剣。

一度鞘から抜き放てば人を殺すまで戻らぬ呪われし魔剣ダインスレフ。太陽神ルーが所持したとされるブリューナク、五つの穂先から五の光を放ち、一突きで五人を殺したとされる槍。

槍を向けた軍勢に必ず勝利を齎すとされ、投じれば何者も避ける事が出来ず、持ち主の下に戻るとされるグングニル。

敵の必殺の一撃に対し因果律を捻じ曲げてカウンターを返す、究極のカウンター兵器フラガラツハ。全て撃たればまず死ぬだろう。どうでもいいが、フラガラツハはF a t eでは鉛のような塊だったが、アレは伝承保菌者が作り出した物で、実物と同じであって別物の存在だからだ。本来のフラガラツハは普通の剣の形をしている。

「ひえええ〜〜!」

焦って逃げ出すシャマル。続いてシグナムとザフィーラが飛び込んでくる。一拍遅れてヴィータも突っ込んでくる。

「なにがあつた!」

「襲撃ですか!」

「カナメに手はださせねえ!」

うん、もう二度と銅鑼で目覚まししない。朝っぱらからカオスで困る。ちなみにリインフォースは既にテーブルについている。何時の間？

「いや、朝ご飯だよ」

そう言つて、俺はテーブルを指差す。早く食べたくてうずうずしているリインフォースが見える。

「今日は趣向を変えて、一発で起こして見せようと思って」

別に俺がクソ眠いのに関しても寝こけてるのが腹たったわけじゃないぞ？ 皆は納得してないみたいだけど、強引に納得させた。

皆を待たせるのも申し訳ないので、心苦しいけどエヴァを起こすでしょう。という訳で、自分の部屋に戻る。

ちなみに、俺の部屋は一階にある。リビングが一番近いという理由で選んだ。広さとしては家の中で二番目になる。

扉を開けて、俺は鼻血を噴き出して止血し、また部屋に入って鼻血を噴き出した。エヴァが裸のまま寝てるんだよ。

陽光を浴びる白い肢体がどうにもこうにも……げふんげふん。さて、起こすでしょう。極力エヴァの体を視界に入れないようにして、エヴァを揺り起こした。

「う……ん……」

「起きなさい……私の可愛いエヴァンジェリン……今日は600歳の誕生日……お城に行つて討ち入りをする日ですよ……」

だっておかしいじゃないですか、魔王を退治しに行くのに120Gとヒノキの棒ですよ？ 兵士よりも扱い悪いじゃないですか。

兵士は鉄の鎧に鉄の槍と剣ですよ？ どう考えても配分おかしいで

すよね？むしろ国の総力を挙げて出兵すべき、そうすべき。

国の総力を挙げれば、小国でも千人は兵士出せるよね？たとえ一ダメージしか与えられないとしても、一ターン千ポイントですよ？」

「……ゲームの根底が思いっきり覆るだろうが……」

あ、反論が帰ってきた。

「とうかさ、王様って後生大事に宝物庫に宝物入れてるじゃん？俺が王様だったら、勇者に草薙の剣とエアの剣渡して、アイアスの盾渡して、鎧はメギヨンギルス。」

具足に韋駄天の靴だろ？それから籠手にイルアン・グライベル。他にも予備にミヨルニルとかレーヴァテイン持たせるね」

「伝説のオンパレードだな……下手をすれば世界が滅びるぞ……」

「むしろアレかもね。勇者の御者みたいな人が死体の装備を剥ぎ取って、次の勇者に渡すみたいな。27番目の勇者が旅に出た！みたいな。」

きつと、王様は精神が病んでるんだね。おお、フランスよしんでしまつとは情けない。とか言ってるのを92番目の勇者がナニイツテンノ？みたいな顔で見てるんだよ」

「さっきから耳元で訳のわからんことをほざくなあ！」

鋭い拳が飛んできて、俺の顔面に激突。ヴィータにやると、案外会話が進むんだが。

「いってえ……朝飯が出来たよ」

「ん……。ああ、そうか」

ちらりと下半身を見るエヴァ。とろりと零れる白いえきた「省略されました。続きを見るなど許さん」

「と、兎に角、朝食が出来たので着替えてから来るように」

「ああ、分かった」

僅かに頬を染めて体をシートで隠す。く、くそつ、俺まで気恥ずかしくなるじゃないか。

二人で顔を紅くして、エヴァが着替えるまで待つ。そして、居間に案内して、朝食の点呼を取る。

「いただきます」

俺の声に皆が唱和し、朝食をとり始める。ふと視線を感じたので、そちらを向いてみると、ニヤニヤしたシャマルが居た。

「きのうはおたのしみでしたね」

「死ね」

「ひどっ！？そこはもっと紅くなったりすべきでしょ!？」

「うるせえ、チャーハンぶつけんぞ」

シグナムとヴィータはなにやらわかっていないようだ。お前ら、一応俺よりも長く生きてるだろ？

まあ、それはどうでもいいか。ザフィーラは匂いで分かっているよ

うだ。リインフォースも分かったようで、少しだけ頬を染めている。静かになったなと思ったら、シャマルが氷付けになっていた。ああ、エヴァにやられたんですね。分かります。

「これで静かになった」

「ああ、いいんじゃないね。これで」

こんな感じで、朝食を終えた後にシャマルを解凍してやった。氷付けにするのは物理的な氷結ではなく、封印側の氷結なので、体には出来ない。

私の朝ご飯があーと泣いていたが、茶化したお前が悪いのである。大人気ないって？今の俺は14歳なので子供だ。

「さて、私は帰るぞ」

「ああ、送ってください」

「ふむ、では頼むとするか」

「では、お手を拝借」

ナチュラルに手を取る事に成功し、エヴァの手のすべすべさに感動する。

まだ、朝の冷たい空気が溢れている閑静な住宅街を二人で歩く。この道がもっと長ければいいのに、時間がもっと遅く進めばいいのに。

「要、私は……お前の事を好きになってよかったと思っている」

「うん？なんでだ？」

「お前はこんなにも真摯になって私を愛してくれる。それでも長く生きてきた。人を見る目はあるつもりだ。」

お前が私を見る目は、とても優しい。まるで、父親のような暖かさ、母の包み込むような優しさ。その二つを感じられた」

「うーん、それって喜ぶべき事なのかな？」

「誇れ。お前のその優しさは、誇ってもいい所だ。お前に愛された私は、幸せなんだと思う。」

なぜ、お前は私を好きになったんだ？」

「そうだなあ……最初は容姿、次に純粋な興味。次は同情。それから守ってあげたいと思った」

「まさか正直に話すとはな。しかし、容姿か。まあ、人間の第一印象は容姿で決まるものだしな」

「エヴァのその苦悩を僅かでも理解したいっていうのは、きっと傲慢なんだろうけど、それでも守ってあげたい、理解してあげたいと思った」

「フン……契約に記されたとおり、私を命尽きるその時まで守り続けてくれるのだろうか？」

「そして、エヴァは俺を命尽きるその時まで支え続けてくれるんだろ？」

「当たり前だ。私は、尽くす女だぞ？」

「そっか」

言葉無く歩く。沈黙が心地よい。ただ触れ合う手の暖かさだけが伝わる。

気付けば、エヴァの家まであと少しという所まで来ていた。名残惜しい。楽しい時間ほど早く過ぎ去るというのは本当なのだろう。

「それじゃ、また、明日……」

「ああ、明日。また会おう」

手を振って別れ、家へと歩き出す。風が通り抜ける手が寂しく感じる。明日になれば会える。そう考える事にした。

家へと戻り、掃除を始める。一時間ほどかけて家を掃除したが、引越してきたばかりなので大した汚れもなかった。

それから冷蔵庫の中を見て、買い物に向かう。度々家に誰かが遊びに来るだろうし、食材を備蓄しておくのは悪いことじゃない。

腐らせる事もないだろうし。それくらい我が家の食料の消費速度は速いのだ。そう思いながら、買い物袋を抱えて家を出る。ビニール袋があっても困るしな。

ちなみだが、外に出るときは14歳の姿で出る事になっているぞ。今は女の子という事になっているので、スカートなども履く。男の尊厳何てとつくの昔に捨てたよ。

適当に買い物を終え、家に戻って冷蔵庫の中身を整理。シャマルがなにやら泣いてるが知ったことではない。

「よし、終わりっ」と

パタン、と冷蔵庫の扉を閉め、リビングのソファーに座り込む。スカートを履いてると、色々気をつけなければいけない事があるしな。

まあ、性転換してると、それも自然と出来るようになるのだが。しつかりと内股で歩くようになってるしな。不思議なモンである。なんととはなしにテレビをつけると、麻帆良のトンデモ映像が流れ出す。オリンピック選手がここに来たならば、自信喪失するに違いない映像だらけである。

100メートルを平然と数秒で走りきり、砲丸は百メートル単位で飛び、走り幅跳びは助走無しで砂場を飛び超え、垂直高飛びで校舎の屋上に登る。

平然と多脚戦車が闊歩し、人間と見分けのつかないロボットが会話し、背負えるレベルの機械で空を飛び、本物と遜色ない動きをする動物を模したロボット。

科学に関しても数十年先を行っている。というか、まず間違いなくオーバーテクノロジーだらけである。量子コンピューターとかあるんじゃないだろうな。

一番凄いのは、地脈を利用した超大規模認識阻害結界だ。数百平方キロメートルの学園都市を完全に覆う認識阻害結界。永続的にこれだけの範囲をカバーしているのだから、作った奴は天才だろう。麻帆良の非常識さを再確認し、自分の非常識さも再確認しておく。やれやれだなあ。

「カーなめー！」

唐突にリビングのドアが開き、ヴィータが飛び込んでくる。そして、そのまま飛んで、俺の胸へと飛び込んでくる。

なんとも子供らしい行動だが、それでも俺よりも遥かに年上なのである。ひとまず、飛びついてきたヴィータを受け止め、そのままくるりと回転させて、自分の膝の上に座らせる。

「どーかしたのか？」

「おう！ゲーム買って来たから、一緒にやろうと思ったんだ！」

手元の袋を見ると、個人経営らしきゲームショップのビニール袋を持っている。

「今日発売されたばつかなのに、滅茶苦茶安かったんだ！」

「そこらへんも麻帆良は非常識だからね」

新作ゲームがサンキュッパで買ってしまうから、色々と間違ってる所が多い。利益出るのかな？

「じゃ、やろつか」

という訳でして、いそいそとゲーム機の準備を開始する。未だにPS2は現役だ。まあ、三年前に出たばかりだから当たり前なんだけどね。

DSも来年当たりに発売されるわけだし。麻帆良は技術が進んでる所為で、現在が2003年だという事を忘れそうになる。

そんな感じで昼の時間を潰し、あつという間に夜となる。今日は顔合わせという事になっているのだ。ちなみにだが、俺は八神はやてという事になっている。

なので、夜天の書は使わない。別に夜天の書がなくても、俺の脳味噌は異常進化を起こしているので、下手なパソコンよりも処理能力がある。

マルチタスクも40個前後まで増えているし、思考加速で神速モードキまで出来てしまうのだ。ここらへん、俺が異常だという事がよく分かる。

24時になる少し前、家を出て世界中広場へと向かう。人、結構い

るなあ。ほら、巨大掲示板の管理人みたいな唇をした人が居るよ。

「おお、来たかの」

「時間どおりやと思うとったんですけど、遅れてしもたかなあ？」

「ふおおおおお、ワシ等が早かっただけじゃ。実際、時間まで余裕はあるしのう」

確かに、腕時計で時間を確認すると、24時になる二十分ほど前だ。

「では、紹介しようかの。彼女は八神はやてくんじゃ。見た目に似合わず素晴らしい魔法の使い手じゃ」

「よろしくおねがいます」

ぺこりと頭を下げておく。心象はいい方がいい。わざわざ敵対する理由もないし、なにより面倒だ。

「得意な魔法は特になし。苦手な魔法も特になし。得意な格闘技も特になし。苦手な格闘技も特になしです」

（その、得意っていうのは秀でてるって意味だから、なにもかもが平均以上に出来るって意味でいいのかな？）

（うん。それでok）

「では……実力を知りたがるものも居るじゃろうし、立候補するものはいるか？」

パパッと上げられた手は、高校生らしき女生徒とタカミチの手だ。

「ふむ。では、まずは高音くんとやってもらって、次はタカミチくんとやってもらおうかの」

両方にやらせるつもりか。時間が掛かるのは好きじゃないんだが、高音とやらはさっさと叩きのめそう。

という訳で、他の皆が移動し、物が壊れないように対物保護結果を展開する。どうせ、誰も気付いてないだろうけど。

「私の名は、高音・D・グッドマンですわ。よろしくおねがいします」

「八神はやてや。よろしく」

突っ立ったまま詠唱を開始したので、瞬動で一気に接近して顎に掌底を放つ。終了。

「では、次はタカミチくんにお願いしようかの」

ぺいっと高音とやらを投げ捨て、今度はタカミチが俺の前に立つ。

「どれだけ強くなったか……確かめさせてもらいますよ」

「ええで。思う存分掛かって来いや、手加減はしたつたる」

言つと同時、無音拳が飛んでくる。それを回避し、氷結魔法で足場を凍らせ、足の裏に魔力刃を発生させる。

一気に滑り出し、タカミチへと接近していく。当然ながら、タカミチもマヌケではないので、無音拳で迎撃されていく。

地面から伸び上がるように、氷のアーチを形成し、空中に舞い上がっていく。飛行魔法との併用で、加速していき、俺の移動箇所を予測したタカミチが無音拳を放つが、俺の滑った後の氷を破壊するだけ。

嫌がらせ、俺も無音拳を放っていく。空中で相殺された無音拳が甲高い音を立て、タカミチが感掛法を発動させ、俺も感掛法を発動させる。

「相変わらずのバグキャラですね……」

「ハハハハ！なにを当たり前の事を言ってるんや！そんなんは大喜に通った道やないか！」

「そして、僕はそれに憧れてきた！」

放たれた豪殺居合い拳。俺が放った豪殺居合い拳と激突し、爆音を立てる。

「さあ、ギアを上げてくで！」

「応っ！」

両手で連射されていく、豪殺居合い拳。秒間数十発放たれる高速のパンチ。それと同時に感掛の力が放たれ、周囲で激突していく。やがて距離は狭まり、インファイトへと発展していく。

「シッ！」

「シャッ！」

拳と拳の応酬、拳が激突し、鎌のように鋭く放たれた脚が交差する。激突のたびに、莫大な感掛の力が周囲に撒き散らされていく。スウェーバックで俺の拳を回避したタカミチが、バク転をしながら、俺の顎目掛けて放たれた蹴りを、こちらもバク転で回避する。同時に着地した所へ、俺が四肢を使った瞬動で一気に急接近する。咄嗟に腕を組んだタカミチの腕の交差した箇所、拳を突き入れる。そして、吹き飛んだタカミチが校舎の壁に着地し、瞬動術で戻ってくる。それと同時に放たれた、感掛の力が込められた蹴りを、側転するようにソバットで相殺。

「ハ、ハハッ。ここまでとは……」

「私も、修行を欠かした事はあらへんのだ。そうそう簡単に負けるわけにはいかへんで」

「僕も、修行を欠かした覚えは一度もありませんよっ！」

感掛の力をタカミチが解き、今まで準備していたらしき魔法を解放する。術式の構成が読み取りづらいが、恐らくは雷の暴風。しかし、放つわけでもなく、タカミチはそれを握り込み、体内へと取り込む。

「術式兵装……禁断の闇の魔法やな？」

「そう、僕は凡才でしたから。誇れるのは、鍛え上げた拳だけ。なら、それをいかせるものを使うしかない」

「ええで。せやったら、その覚悟を見届けたる。私に拳を届かせてみい！」

蒼白く輝くタカミチが、迅雷の如く駆ける。まるで弾丸の如き速さで放たれた拳を、上へと弾く。

弾いた勢いで後方に飛び上がり、虚空瞬動で加速度をつけた蹴りを、後方に飛んで回避する。更にタカミチが加速し、正拳突きを放つ。余りにも速い。この速度、少々見誤っていたようだ。先程、後方に飛んだあと反撃するつもりだったが、予想外に速く、反撃に移れなかったのだ。

「ハアアッ！」

裂帛の気合と共に放たれた拳。それを、正面から合わせた拳で殴り飛ばす。チツ、面倒だな。

常に出しっぱなしにしてあるアーティファクト、王の財宝から無銘の刀を取り出す。無銘とは言う物の、五尺に及ぶ大太刀、物干し竿だ。（アサシンのと同じ）

「いくでえっ！神鳴流奥義！百裂桜花斬ッ！」

周囲に放たれた気の斬撃。詠春の使っていた神鳴流奥義を適当にパクツた技だ。詠春に見せたら、免許皆伝されてしまったが。

それを、高速で移動していたタカミチは回避する。今のを避けるつて、本当に成長したんだなあ、タカミチ。

「刀まで使えたんですね……そもそも、今の技って……」

「10年前に会得したんや！サムライマスターのお墨付きやで！」

「それは凄いつ！」

言つと同時、タカミチが俺へと拳を放ってくる。それを刀を使って

払い、斬空閃を放つ。当然ながら回避される。

「それは邪魔やな。神鳴流奥義！斬魔剣式の太刀い！」

放たれた最速の技。避け切れない状況を作り出してやったので、回避は不可能。咄嗟に展開された障壁を素通りし、タカミチの内部で荒れ狂っている雷の因子を切り裂く。

霧散した雷の暴風の術式が消え去り、タカミチが通常の状態へと戻るが、既に魔力が殆ど残っていないのだろう。

感掛の力は消耗が激しい。タカミチは常に最高出力でやっていたのだから当たり前だ。凡そ5分前後の感掛の力最大出力。加えて闇の魔法。

闇の魔法は基本的に夜の眷属。まあ、吸血鬼が使う事を前提とした技だ。膨大な魔力を使う事が当然となる。基本的に凡才でしかないタカミチには辛いだろう。

「コイツで終いにしたるっ！死んだらアカへんでタカミチイ！」

「おおおおおう！」

タカミチが嵌めているグローブタイプのガントレット、アイドネウスが先日追加した単発式カートリッジシステムを使い、カートリッジをロードし、タカミチの体内へと魔力が流れ込む。

強引に駆け合わせれ、生み出された感掛の力が一気に増大し、巨大な力となっていく。

「神鳴流決戦奥義！極大雷鳴剣！」

「豪殺居合い拳んんっ！！！」

激突した力は拮抗し、次の瞬間に豪殺居合い拳は打ち砕かれ、タカミチは雷電の中へと飲み込まれる。

俺は着地すると、意味も無く刀を振り回し、鞘に収める。燕返し練習しよう。

「うむ。そこまでっ！勝者は八神はやてくんじゃ！」

「タカミチさんは、私が治療しときますっ」

ボロ雑巾のようになってしまったタカミチを拾い上げ、皆漣いモノを見るような目をしている中、肉体年齢を一気に20歳まで引き上げ、タカミチを背負う。

「学園長はん。タカミチさんはうちで治療しますんで、借りときますっ。明日には10歳ぐらい若返って戻ってくるんでっ」

「本当にしそうじゃから恐いのう……」

若返りの薬とかあるからね。不老不死の薬とかはないけど、獣化薬とか巨人薬とかもあるし。

まあ、そんな感じで、俺はタカミチを拉致して帰った。悪戯をする為にだ。

家に連れて帰ったタカミチを、治療し、服を全部引き剥がして捨てる。ベッドがないので、俺の部屋のベッドに寝かせるしかないしな……ククッ。

今朝、エヴァとやってしまったベッドだが、既に洗濯は終えてある。日曜日でよかったと思った日だったね。

ひとまず、俺も服を脱ぎ捨て、全裸でベッドに潜り込む。ブラジャーとか、締め付けられる感じがして好きじゃないんだ。楽なんだけどね、締め付けられるから。サラシを巻こうか？
まあ、どうでもいい事かと思いつながら、俺は眠りに落ちていくのだった。

Side タカミチ

やはり、要さんは凄い。彼は僕の憧れの人だった。サウザンドマスターよりも強くて、伝説の傭兵剣士であるラカンさんとも殴り合いが出来て。

始めて会った時、あの人は僕と同じくらいの年齢に見えて、更に言うところスカートを履いていたから、女の子だと思っていた。
アレが初恋つてもものだったんだろう……要さんが男だと知って、修行に明け暮れたのは悪いことじゃないと思う。

必死で修行した。彼等の背中に追いつく為に。紅き翼の一員として、彼等に追いつける為に、必死で技を磨き、体を苛め抜いた。

それでも、彼等は果てしなく遠い。僕には才能がない。生まれつき呪文詠唱が出来ない体質だったから。けど、要さんが、それを解決するための方法を示してくれた。

デバイス。よくは分からないけど、この世界に普及している精霊を元に使う神秘の魔法に対して、徹底的なまでに突き詰めた科学による魔法。強いて言うなら、茶々丸くんのようなものらしい。

呪文詠唱を肩代わりし、少ない魔力を補うために圧搾保存された弾丸を使う、僕のためだけに作られたデバイス。お陰で、僕は魔法が使えるようになった。

呪文詠唱が必要な魔法が使えるようになって、エヴァに教えてもらった闇の魔法……僕は幼い頃に住んでいた町が戦乱で焼かれ、呪文

詠唱が出来ない落ち零れっていうコンプレックスがあった。

僕にとっては、中々相性がいい魔法だった。まあ、魔力が少ないから、多用できるものでもないんだけど、お陰で、更に強くなれたと思う。

けど、それでも、彼等には届かなかった。けれども、昔は要さんに攻撃を当てる事は愚か、気を使わせる事だつて中々出来なかった。けれど、感掛の力を使わせる事が出来た。驚いてくれた。

少しでも届けた事が嬉しかった。もっともっと、修行をして、頑張りたい。せめて、その背中へと辿り着きたい。そう思う。

意識が覚醒へと向かっていく。昨日は要さんに徹底的に叩きのめされた。多分だけど医務室で目覚めるんじゃないかな。

覚醒した脳が状況を把握する。なんだか、甘い匂いがする。嗅いだ事がないような気がするけど、なんだか好きな匂い。

なんだろうと思う、目を開ける。そして、僕の目に映ったのは。

「知らない天井だ……」

知らない天井だった。けれど、ベッドに寝かされているのは間違いない。ひとまず、起き上がろうと思って見ると、自分が服を着て無い事に気付く。

そうか、考えてみると、最後の技つて、気を雷に変換したものだから、感掛法は切れる寸前だったし、服は使い物にならなくなってたんだろう。

服が用意されているといいんだけど……そう思って、ここが誰かの部屋だという事がわかった。

ここは洋室だけど、和室で言うなら12畳くらいの広さの部屋だ。綺麗に整頓されていて、部屋の持ち主は几帳面な性格だという事が分かる。あるいは綺麗好き。

パソコンデスクの上には、かなり大掛かりな機械。何だか見慣れな

い機械ばかりだから、ここの部屋の持ち主はパソコンが趣味なんだろうか。

旋盤のようなものの上には剣なんかの武器がある事から、魔法の関係者らしい事は分かる。明らかに魔力が籠ってるし。

誰の部屋だろうかと思い、立ち上がろうとした所、誰かに引つ張られるような感触を覚えた。驚いてそこへと視線を向けると。

「あ、げげぎぎ……!？」

声が出なかった。というか、意味不明な声が出た。そこには、一矢纏わぬ要さんが居て……ベッドのすぐ横には麻帆良女子中等部の制服が掛けてある事から、間違いなく要さんなんだろう。

何で服を着てないんだとか、男だったはずなのに、柔らかそうな二つのふくらみがあつて、息子さんがいなくてなんで観音様が居るんだとか、色々な疑問が渾然一体となって、脳味噌がショートしそうだった。

要さんに習ったマルチタスクで思考を並列化し、何とか自分を治めようとする。そうしていると、要さんが目を覚まし、部屋の真ん中で正座している僕に気付いた。

「……なにしてんの？」

「え、その、というか、何で要さんがここに!？」

尋ねかけると、要さんは頭を軽く振り、ベッドから降りた。寝起きがいい人だなあ。と思った瞬間、僕は首も折れよと言わんばかりの速度で顔を逸らした。

要さんは服を着ていない。そして、今は女性になっているのだ。白い肌が陽光に照らされて、奇妙な色気を伴っている。

「昨日、タカミチがボツコボコになってしまったからな。謝罪の意味も含めて、家に連れて来て治療したんだ。」

そこで、客間を準備して無い事に気付いてな。仕方ないから、俺の部屋で寝かせたんだ。ベッドは一つしかないから、同じベッドで寝た。おk?」

「な、なんで服着てないんですか!?!というか、女性だったんですか!?!」

「服を着てないのは、いつも全裸で寝てるからだ(嘘だけど)。性別に関しては、俺は性転換魔法が使えるとだけ言っておこう」

相変わらず非常識な人だ……昨日の幻想空間での戦闘で、うすうすそうなんじゃないかとは思ってたけど……。

「あー……タカミチ。その、なんだ……元気だな」

「はい?」

要さんの視線をたどってみると、そこにはギンギンに元気になった僕の息子が居た。咄嗟に手で隠す。

「思っんですけど、これって逆なんじゃ……」

隠そうともしない要さんに目を向けるも、そんな事には興味がないと言わんばかりに、着替え始めた。というか、今身長とか縮みましてよね?

大体14歳くらいになった要さんは、しっかりと女性モノの下着を身に付け、その後、麻帆良女子中等部の制服を着込んだ。似合ってるなあ……って違う違う!

「まあ、実際の性別は男だ。今は学校に通う為に女になってはいるがな……どうでもいいが、生理痛は中々辛いぞ。腹を吹っ飛ばされるのとは、また違った辛さだ」

「凄まじい比較の仕方ですね。ところで、服、貸してもらえませんか？」

要さんが服を着て、何とか落ち着いてきたマイサンを隠しながら聞いて見ると、要さんは影の倉庫から、黒いスーツを取り出し、それを僕に投げ付けた。

しっかりと、下着とシャツなどもある。買ってきてくれたのだろうか？だとしたら何時？と思ったが、気にしないことにした。彼等に常識を求めない方がいいからだ。

要さんは、翡翠色のビー球のようなマジックアイテムを使って時間移動を平然とするしね。あれ、一個作るの一週間くらい掛かるらしいから、そこまで非常識じゃないけど（文珠。ふざけて感掛の力を収束したら出来てしまったらしい）。

「さて、まだ朝も早い。どうせだから朝飯を食べてけ」

「あ、いいんですか？それじゃあ、ご馳走になります」

「結構怪我してたしな。腹も減ってるだろ」

やっぱり、要さんは優しい人だ。まあ、修行は厳しいというか、鬼というか、凄まじいけど。

特にエクストリーム耐久バトルなんて、考えたくもない。修行というよりも拷問だ。大怪我しても、強引に魔法で治され、一日中戦闘し続けなければいけないし。

さて、今日はいいい日になりそうだ。これから頑張ろう。来年はネギ君も来るし。

第九話 神と異常性と顔合わせと（後書き）

番外編のアンケートをやるう！よし、まずはリリカルな世界に行った要とか……妄想してたら書いてた。アンケートを取ってから書くべきなのに。

まあ、それはそれとして、要に行かせたい世界を選んでください。

？要とヴォルケンスとエヴァがリリカル世界に。

？要とヴォルケンスとエヴァがゼロ魔世界に。

？要とヴォルケンスとエヴァが東方世界に。

？要がFate世界に召喚。

？要とヴォルケンスとエヴァがオリジナル世界に。他にも現実から召喚された奴が居たりする。

？以外書く気はあんまりありません。まあ、選ばれたら書きますけど。選ばれなくても？は書きますけど。むしろ、？ばかり書きますけど。

修正しました。ガントレットとしか書かなかったら誤解されるのは当然でした。ポケットにも手は突っ込めるようになってます。要するに、皮手袋に鉄板を貼り付けたようなガントレットなんです。拳の敵に当たる部分を金属で保護するっていう白兵戦には使わない奴です。ガントレットというよりもナックルガードに近いですけど、金属を使ってるのでガントレットと表記しました。

第十話 学園祭とネギ来訪と戦士は眠らず（前書き）

バカテスト一問目。

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（ ）を練り上げ（ ）を構成し（ ）に（ ）を譲渡し（ ）を発動させる

ネギ・スプリングフィールド。

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（魔力）を練り上げ（術式）を構成し（精霊）に（魔力）を譲渡し（魔法）を発動させる

教師のコメント。

はい、正解です。とはいっても、これは魔法学校で習う内容ですが。

犬上小太郎。

気の使い手は、気を使う際に体内で（生命力を気合）で練り上げ（適当に術式）を構成し（獲物）に（気）を譲渡し（必殺技）を発動させる。

教師のコメント。

勝手に問題を改竄しないで下さい。それと、気合はいりませんし、適当に術式を編み上げないで下さい。

国後要。

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（下らない言葉）を練り上げ（ギャグ）を構成し（泡の城で働く女性）に（童貞）を譲渡し（魔法使い卒業）を発動させる。

ちなみにだが、俺は先日魔法使いを卒業した。言って置くが、好きな相手とだぞ。 80歳まで守り抜いた童貞でした。

教師のコメント。

下ネタはやめてください。あと、恋人が出来た事に関してはおめでとうございます。

祝福のエール・リインフォース。

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（リンカーコアを励起し魔力）を練り上げ（デバイスによって術式）を構成し（デバイス）に（魔力）を譲渡し（魔法）を起動させる

教師のコメント。

魔力が溜められている箇所はリンカーコアというのですか。初めて知りましたが、一体何処で決まったのですか？

なんだか怪しい箇所が多いですが、正解にしておきます。あと、貴方が祝福のエールと書いた場所は、ファミリーネームを書く場所です。貴方は国後でしたね。要さんの養女でしたか。

高畑・T・タカミチ。

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（情熱と気品）を練り上げ（優雅さと勤勉さに加えその他諸々）を構成し（速さの精霊）に（魔力）を譲渡し（世界を縮める魔法）を発動させる

教師のコメント。

貴方は要さんと会った際に回答が滅茶苦茶になりますが、洗脳でもされているんですか？

それとですが、几帳面な貴方には珍しく、余りにも字が汚すぎて解読できなかったので、過去視の精霊を使ってみたところ、感掛法を使って字を書いていましたね。

読み上げ精霊が居なかったら、0点になるところでしたよ。次からはもう少しゆっくり書いてください。

ジャック・ラカン

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（魔力とか）を練り上げ（適当に術式）を構成し（適当）に（なにか）を譲渡し（魔法とか）を発動させる。

教師のコメント。

とか、適当、なにか、とか。適当に魔法を使わないで下さい。って、貴方は気の使い手でしたね。

それはそれとして、問題の文脈が意味不明になっています。誰になにかを譲渡したんですか？最後にはめんどくさくなって投げ出ししましたね？

下の箇所にも、『奥義・めんどくせっ！ふぬんっ！』の図（ナギとの殴り合いのシーン参考）とか、問題用紙に落書きをしないでください。

アルビレオ・イマ。

魔法使いは、魔法を使う際に体内で（魔の渦巻く器を励起し、魔の力を）を練り上げ（外れた法をその身で再現し、魔の法）を構成し（遍く万象に宿る精霊）に（魔の力）を譲渡し（魔の法）を発動させる

教師のコメント。

答えはあっていますが、わざわざ言い回しを凝らせなくてもいいです。

遅れてきた厨二病ですか？え？厨二病？なにが違うんですか？字面でしか分らないギャグをかまさないで下さい。

何となくバカテストをやってみたかった。

第十話 学園祭とネギ来訪と戦士は眠らず

暖かな時間が流れていく。退屈な毎日で、けど幸せな毎日で。意味も無い話題で盛り上がったりして、恋人と甘い睦言を囁いたり。

穏やかで、緩慢で、楽しい時間が過ぎ去っていく。これから一週間後に、麻帆良の学園祭が始まる。今回のイベントは、麻帆良学園全校の人間の鬼ごっこらしい。無論の事ながら、参加するつもりはない。

そんな中、俺とエヴァは学園祭を回る計画を立てている。言うまでもないが、クラスの行事に手なんか貸さん。一応、大人なので手を貸すのもアレだしな。

「で、三日目はまず、明らかに地雷だろうと分かるここの出店にだな……」

「無駄な事は無駄ではないという奴か？まあ……それが楽しいのも確かだ」

「こそ、心の贅肉っていうのは必要なもんよ。今の声優ネタね」

「声優ネタ？」

「ああ、こつちの話。多分だけど、俺以外には理解出来ないから」

まあ、あかいあくまの事だね。心の贅肉とやらを嫌ってたけど、そんなのは生き急いでるのと変わらない。

意味も無く一晩中友達と語り合うことは無駄な事だろう。だが、それはつまらない事か？意味も無くバイクやらで高速を走るのは何の役にも立たないだろう。だが、それは本当に無駄な事か？

若い頃に長さなかった青春の汗は、老人なった後に涙となって流れ出るであろう。誰の言葉かは知らないが、いい言葉だ。

バカを見てバカと笑うバカになるな。バカを見て一緒にバカをやれるバカになれ。それが人生を楽しく生きて、楽しく死んでいくコツだ。

趣味なんてその具現化みたいなもんだ。プラモデル作るのも、ゲームやるのも、将来の為になんかならない。だけど、それは人生の糧になる。俺はそう思ってる。

「んで、昼飯は俺が用意するでしょう」

「最近、茶々丸が仕事がなくて嘆いていたぞ」

「悪いが、こればつかしは譲れんな。家事は俺の趣味だ。強いて言うなら鍛錬も趣味だが」

「そうか」

最近はや当作って持っていくから、その時にエヴァの分も用意してくんだよね。んで、エヴァはうちに泊まる事も多いから、滅多に飯が作れなくなったらしい。

使わない部屋も大して汚れないし、茶々丸は機械だから、飯を食べたりもしない。かと思えば、茶々丸にはしっかりとした感情がある。だから不満も暇も感じるのだ。

「というわけで、当日は俺が弁当を作っていくぞ。駄目か？」

「別に不満はない」

「んじゃ、俺が作るという事で」

今から早速、当日の弁当のメニューを考え始める。色々作りた
物があるが、やはり食べやすい物をチョイスすべきだろう。

まあ、それはそれで後で考えるところとして、今は学園祭の時に回るべき
場所をまとめなければいけないわけだ。

「んー、学園祭といえばだけど、来年の学園祭に何かあったような
……？」

「私を見ても分かるわけがないだろう」

「そうだよなあ……記憶探索の魔法でも探してみるかな……？」

「記憶捜査の魔法を使うことも出来るが、お前の対魔力を突破する
のは不可能だろうな」

「まあ、バグキャラですから。そうやすやすと突破されるわけにも
いかんしな」

そう簡単に突破されていたら、今ごろ俺はここにいない。戦争やつ
てんだから、外道だろうとなんだろうと使われるのだから。

二十年前の大戦で、紅き翼のメンバーに呪いが飛んできたり、ギア
スを掛けようとしてきた奴は数え切れない。

まあ、紅き翼のメンバー全員が大魔力もちだったのだから、そう簡
単に呪いにかかったりはしない。当然、突破されることもあったが、
解説が使えないわけではないのだ。

「さて、結局のところ、この次はどこを回るのだ？」

「そうだなあ……まあ、後は普通に冷やかして回るとしようか」

ぺいっとペンを放り投げ、地図を折りたたむ。しっかりと仕舞っておかないと、間違って捨ててしまいそうだ。

「今から学園祭が楽しみだな」

「フフ……私も久しく楽しみになってきたな」

二人で笑いあい、何をするともなくゆったりと流れる緩やかな時間を楽しむ。

最近は特にすることもなく家でぐだぐだと過ごす毎日である。夜の仕事は家から誘導弾発射で片付けてる。

俺のマルチタスクを全て開放すれば、数百発全ての弾丸を精密制御することも可能だからだ。

「それはそうと、今日も晩飯食べてくのか？」

「愚問だな」

「あいあいー」

今日も平和だ。

特に意味もなく毎日を過ごし、ようやく三学期が訪れた。今までの日常も中々に楽しかった。

しかし、これからは物語の主役であるネギが訪れるのだ。これから物語が始まっていく。それと同時に、嘗ての弟子が旅立っていくのだから、楽しみにもなるというものだ。

いつもどおり、早めに家を出て、あまり人が多くない道を歩き出す。手は前でカバンを持っていて、内股で歩く。無意識でこれがやれるのだから、性転換魔法は凄い。1

そんなことを思いながら、大して人もいない教室に入り、自分の机に今日使う教科書類を放り込む。後は待つだけだ。

やがて、几帳面な性格の奴らから順にやってくる。アスナは少しばかり遅めに来るくらいだ。エヴァは一番最後。一緒に来る場合は違うが。

「ねえねえ、昨日の歌番組見た？」

「見とらへんなあ。あんましテレビ自体見へんし」

会話は適当に交わすだけ。そもそも、通じる話題があまりないのだから仕方ないともいえるだろう。

まあ、マルチタスクを使って会話をしてるので、他のタスクでは別のことばかり考えている。もしくは夜天の書を介してネットみたりそんな感じで、朝の時間を過ごすうちに、外の廊下を誰かが歩いてくるのが分かる。単純に五感が鋭いだけだ。気配を読むのは得意じゃないし。

扉が開き、伸びた手が黒板消しを掴む。そして、赤毛の青年が入ってくる。年齢は俺たちよりも少し上くらい。とは言うものの、別人

種の年齢の見分けとか分からないし。

何ヶ月も一緒にいれば見分けくらいつくけどね。大分会ってなかったから、結構変わったなくらいにしか思えない。

「あれ、新しい先生かな？」

「わー、結構美形じゃん。年幾つくらいかな？」

「あたし達よりもちよつと上にしか見えないね。大学出たばかりかな？」

その通りだ。この学年の人間は14だから一才年上っていうことになるな。思うにネギってハイスペックだよな。

魔力量はA A Aランクで魔法の習得も習熟も早い。その上、自分オリジナルの魔法を開発出来るほど発想力や構築力に優れている。アレが真正正銘の天才って奴だろう。もしも魔法使いになっていなかったとしたら、天才的な科学者とかになっていたに違いあるまい。

「ええつと……今学期、このクラスの教育実習生として教師をすることになった、ネギ・スプリングフィールドです。よろしくおねがいしますね」

ニコつとネギが微笑む。今の微笑だけで、幾人かの女子生徒が撃沈したな。普通に美形だし、優しそうな風貌だからなあ。

ちらつとエヴァを見てみるも、ぼんやりと本を読んでいるだけだ。俺の視線に気付くと微笑を返す。釣られて俺も微笑を返す。

「ハイハイハイ！質問は麻帆良のパパラッチである、私に任せてもらえるかな？」

相変わらずうざったい奴だな。何かパパラッチって言う奴を勘違いしてる節があるしな。

原作でも、魔法を知ったらそれを広めようとするし、警戒してる最中だっというのに仮契約大会なんて開きやがる。死にたいのか？

バカな戦場カメラマンみたいだよ。自分が死ぬわけないとか、自分が危険に巻き込まれるわけがないって考えてるんだから。あれほど厄介な奴もない。

考え方も独善的だし、自分しか見えてないって奴だ。障害にならないように殺した方がいいかもしれないと思ってしまいうくらいだ。

「じゃあ、まずは年齢だね。年は幾つですか？」

「ええっと、数えて15ですから、皆さんと同じ年ですよ」

「うっそ！じゃあ、飛び級って奴？それじゃあ、何処から来たの？」

「イギリスのウェールズって所から来ました。ゼノギアスは関係ありませんよ」

「は？ゼノギアス？まあいいや。身長と体重、それから趣味は？」

「身長と体重は最近計ってないので分かりません。趣味はアンティークのコレクションです」

「じゃあ、恋人とかいる？」

「居ませんよ。それ所じゃありませんでしたし」

枯れてるな、お前。俺よりも遥に若いくせに……。

「最後に、このクラスで気になる人は？」

「そうですねえ……」

ネギはちらりと名簿を見ると、次に教室を見渡す。目に魔力を込めてだ。

「八神さんとエヴァンジェリンさん。それから神楽坂さんですね」

俺は単純に容姿が似てるから。エヴァンジェリンは賞金首だから、神楽坂は昔からの知り合いだからだろう。単純すぎワロタ。俺に関しては魔力を封印してるから分からないだろうけど、エヴァンジェリンは探れば魔力があること自体は分かるからな。

「じゃ、ありがとうございました」と

朝倉はニシシと笑いながら席に戻り、なにやらメモ帳を取り出して書きとめ始める。面倒だなあ。寝ちゃおうか？

まあ、ネギはまじめだろうから起こされるな。指先に大気中から集めた魔力を集中させ、机を叩く。

魔力を込めた極々僅かな、人間の可聴領域外の音が響き渡る。俺は夜天の書でモニタリングしてるので、音が把握できるのだ。

何度か音を鳴らして調律し、丁度いい音階を見つけたら、その音を一定のリズムを持って鳴らしつづける。エヴァは気付いているのか、耳に魔力を込めてレジストしている。

他の面々は気付いていない。世界中の戦場を回っていた真名ですら気付かない技だ。というか、こんな技自分でも出来とは思ってなかった。

効果自体は単純。認識力が落ちるだけだ。ただし凄まじく凶悪なほどこに。恐らく、ネギの服を剥ぎ取っても気付かれまい。殴り飛ばせ

ば気付かれるだろうけど。

五分ほど続け、ようやく全員に催眠が掛かる。まだまだ修行が足りんね、ネギ。というわけで、屋上で昼寝でもしようか。

というわけで、やってきました屋上。ベル力式の認識阻害結界を展開し、その中で座り込む。昼寝するための座布団とかもあるけどな。こういった結界は魔法を知るものならば認知は出来る。だが、俺はここで隠密タイプの結界を展開しているのだ。

そのため、殆どの魔法使いはコレを認識できない。なぜならば、存在の根底から違うのだ。同じなのは魔力を使うだけ。だから、ベル力式の結界を知らない者は気付けない。

単純に違和感を見つけるのが上手い魔法使いとかなら、結界があるのは分かるだろう。何処にあるかまでは分からないだろうけどな。

「アレが要の弟子か」

「戦場に放り出しても生きていけるくらいには強くしたつもりだよ」

「僅かな殺気にも反応できていたからな。まあ、それなりといったところか」

「俺は魔法なんか教えられないからね。守護騎士総出で戦闘技術を片っ端から叩き込んでやったよ」

「……………よく生きていたな」

しゅっちゅうチャチャゼロと剣をあわせているシグナムを思い出したのか、僅かに遠い目をしている。

「殺してくれって言われたことならあるけど、死んだことはなかったよ」

「一体どんな修行をしたんだ……？」

「俺、ヴィータ、シグナム、ザファイラ、リインフォースVSネギ（丸腰）で24時間無制限バトルしたただけだ。

ネギにさばける本当にギリギリの所で手加減をしつづけた。コレが終わった後は、かなり強くなったと思うぞ」

「漫画みたいなことを本当にやってのける奴が居るんだな……」

この世界漫画だしね。主人公補正つてあると思うよ。鍛えたら鍛えた分だけ強くなるし。あんなの理不尽だ。

60年掛けて改造した体は、100時間全力疾走フルマラソンが魔力、気なしで出来たりするが、ネギも追いついてきてるのだ。もうやだこの主人公。

「しかしまあ……この結界は便利だな」

「うん？ ああ……古代ベルカ式の封鎖領域の事か。時間隔離はしてないけど」

「デフェングスデアマギー……ドイツ語に近いが、微妙に違うのだったな。確か、ベルカ語だったか？」

「そうだよ。他には飛翔魔法スレイプニール。砲撃魔法ラグロナク。広域攻撃魔法デアボリックエミッション。ブラッディダガーとかね。全部ベルカ語。不思議と地球と共通点が多いんだよね。ミッドチルダ式は普通なんだけど、古代ベルカ式になると、北欧神話とかの

言葉が入るんだよね」

ドラウプニールとかもありそうだな。他にはゲイボルクとかベガ
ルタとかモラルタとかも。こっちはケルト神話だけだな。

「それと、毎回毎回古代ベルカとつけるが、何か違うのか？近代ベ
ルカとか現代ベルカでもあるのか？」

「そうだよ。近代ベルカ式っていうのもあるんだけど、アレはちょ
っと違うかな。近代ベルカ式はミッドチルダ式の術式上でベルカ式
をエミュレーションした魔法だから。

古代ベルカ式は一種のレアスキル扱いかな。それだけで聖王教会
に対するコネになりそうなものだから」

「ふむ……よく分からんな。しかし、私には使えんのか？」

「正直な話、難しいかもね。方向性が違いすぎるから。治癒術師を
魔法剣士にするようなもんだ。デバイスがあればいいんだけど、機
材も設備もないしな……」

そのため、俺に出来るのは現在あるデバイスの整備と、簡素なデバ
イスの作成くらいだ。機材と設備があれば、ロストログア認定され
るデバイス作るのに。

術式を教え込めば、以前に渡したシュベルクロイツを砲身にして
古代ベルカ式の砲撃魔法くらい使えると思うんだがな。適正がある
か分からないし。

いや、600年前って言えば、聖王が死んでない頃か？なら、ベル
カ全盛期か。適正は血と共に薄れてった訳だし……使えないことも
ないか？

でも、エヴァはヨーロッパ出身だしなあ……いや、出身地は関係な

いか。教えれば使えるか？仮に使えたとしても、常人の演算能力と構築速度じゃ、ラグナロク作るのに一分掛かるしな（Sランク砲撃魔法なので当たり前です）

「正直な話、俺が教えるとなると、弟子の末路は三つしかないしなあ」

「何だか予想できるぞ……死ぬ。生きているが使い物にならない。生きて優秀な魔法使いになる。の三つか？」

「正解は、生きているだけ。生きているが一生動けない。半分廃人の優秀な魔法使いだ」

「最悪なのばかりだな！？というかネギはどうした！？」

「廃人じゃないけど、まあまあ優秀な魔法使いって所だ。三番目が中途半端に終わってるわけだ。

ちなみに、優秀って言うのは紅き翼でもやってけるっていうのを基準にしてある」

「優秀じゃなくて世界でも有数の魔法使いだぞ。それは」

「単純に戦闘技術を育て上げてただだからね。それ以外は知らないよ」

「ああ、戦闘者としてか。ならば頷けるやもしれん」

余程才能がない限り、紅き翼でもやっていけるレベルにまで持つていくことは可能だ。戦闘が強いのではなく、戦闘を上手くすればいいのだから。

まあ、細かいことは省くが、紅き翼は強い魔力もちや突出した力の持ち主が目立つが、詠春は突出した力の持ち主ではない。だが、詠春は生き残ることが上手く、戦闘が上手かった。

そのお陰で、あいつは最後の最後まで生き残ることが出来たのだから。

「デバイスが用意できるといいんだけどなあ。用意できるのは守護騎士と俺の杖の模倣品だけだ。

個人用に微調整をしてあるから、エヴァじゃ三割くらいしか使いこなせないだろうな。

仮にエヴァ用に調整しても、適正がな……シグナムのは炎熱変換向きの構成し、グラーファイゼンもだ。クラールヴィントは治癒タイプだから、フェラーリ並に扱いが難しいぞ」

「そうか……」

「夜天の書なら扱えなくもないが、コピーするのは現実的じゃないな。概算で百年単位で時間が掛かる」

何しろ夜天の書の内部データの整理を、手に入れて数ヶ月ほどから始めたのだが、未だに終わってないのだ。つまり。60年以上経ってる。

整理だけでそうなのだから、コピーするとなるとどうなるのやら。部品自体は即座にコピーできても、データは直ぐにコピーできないのだ。

「ま、いずれはエヴァ専用のデバイスを作るよん。楽しみにしてくれ」

「フフ……楽しみに待つとしようか」

そんな感じで、俺は壁に背を向けて寝転がり、エヴァは俺の上に座る。そして、穏やかな日の光を浴びて眠りについた。

..... 察知。

対象の敵意、および害意..... 有。僅かながらの殺気。

行動選択..... 迎撃を推奨。攻撃を受けた場合の損傷の可能性は軽度..... 結論、痛いのは嫌だ。

選択結果..... Aランク複数誘導弾による対象の迎撃..... ヒット。

迎撃対象の現存を確認。

魔力による攻撃の無効化を確認。迎撃対象の魔力励起を確認。迎撃対象の気の励起を確認。迎撃対象の気と魔力の合一を確認。該当技法の閲覧..... ヒット、感掛法と推定。

麻帆良学園において、感掛法の使用可能対象の検索..... タカハタ・T・タカミチ及び神楽坂明日菜。タカハタ・T・タカミチは出張のため不在。

先ほどの魔力攻撃無効化を魔法完全無効化能力と推定..... 対象の迎撃を承認。右胸内ポケットのスローイングダガーに気の伝導。

投擲。回避。

投擲。回避。投擲。回避。投擲。投擲投擲投擲投擲。有効命中数、0。迎撃対象への警戒レベルを3に。

ブラッディダガーの複数生成を開始。生成成功。生成数32。当魔法を多重弾核へと変更。成功。射出。回避。迎撃失敗。

警戒レベルを5へと移行。ブラッディダガーの多数生成開始。成功。生成数1200。飽和攻撃による地形改変攻撃の開始。地形改変による周辺被害の影響。結界内部の為、魔法関係者のみ存在。修復は容易。

攻撃開始。対象に命中を確認。内部魔力の暴走励起を開始..... 轟音。

爆破の成功。対象に爆破エネルギーによる損傷を確認。
マルチタスク最大分割。最高強度バインドの複数形成。総数68の
バインド射出。半物質化魔力による対象捕縛の成功。マルチタスク
統合。半眠半動睡眠の再開。

.....
.....
.....

目が覚めると、鎖で雁字搦めにされたアスナが居た。バインドの色
は銀色というか白色。俺の魔力光だ。

「楽しいか？」

「楽しくないわよ！喧嘩売ってんの！？」

「そうか。で、なんでそんなことになってる」

「あんたにやられたのよ！早くといてくれない！？」

「そうか」

多分、寝てる間にやったんだろうな。マルチタスク使えば、完璧に
脳を休眠させないで起きることも出来るし。もう少し見てたかった
が、一先ず解除してやる。

「全く.....何時の間に屋上に移動したのよ？」

「一時間目が始まった直後」

「あんた本当に授業受ける気ないわね!？」

「ハッハッハッハ!」

「笑うんじゃない!」

気が込められた拳が俺の顔面に炸裂するが、それは残像だ。

「全く……分身に授業受けさせるわ、認識障害で抜け出すわ、仮病で休むわ……まじめに授業受けた事あるの?」

「ないに決まってるだろ」

「堂々と答えるな!」

蹴りが放たれるが、やはり回避する。当たるわけがないだろう。

「戦争が終わって二十年。今まで馬車馬の如く働いてたんだぞ?一年くらい休ませろや」

「はあ……要が頑張ってるのは分かってるけどさ、なんで学校に来たわけ?私は義務教育だから学校に来てるだけだし……」

「そんなの、決まってる。エヴァに会うためだ」

未だに俺の膝の上で眠ってるエヴァの髪を撫ぜる。まるで絹糸のよう
に柔らかい髪。何もかもが愛しい。

「はあ……ほんつとーにメロメロよね」

「まあな。大分生きてきたけど、ここまで恋に燃えた事はなかったな。まあ、でも……同情と傷の舐めあいもある、のかな」

俺は不老だ。自分で望んだ事とは言え、辛い物がある。不老にした理由は幾つかある。まず、別荘で修行をする時に年を取らないためヴォルケンリッターと永遠を歩くため。

そして、エヴァと共に居るため。永遠に生きるという辛さを、傷の舐め合いで癒す。それが無いと言えは嘘にもなる。

「だが、俺はエヴァの誇り高さに惹かれた。そして、少しでも苦悩を分かち合えたらいいとも思ってる」

「そ……まあ、別に文句はないわよ。元老院が何ていうかは知らないけどね」

「いざとなれば全部叩き潰す。それだけだ」

「それもそうね。あんた達、紅き翼はそうしてきたもの。ナギだつて、気に食わないから戦争に参加した。気に食わないから世界だつて敵に回した」

「ま、そういう事さね」

穏やかな会話は終わり、膝の上のエヴァが目を覚ます。アスナが近づいてる事にも気づかないって、不味いんじゃないか？

それとも、俺が居るから安心してくれたんだろつか？そうだったら嬉しいんだがなあ。

「む……神楽坂明日菜か。一体何の用だ」

「あんた等が早速授業を抜け出したから文句言いに来たのよ。第一に、どうやって抜け出したわけ？ 気付いたら居ないとか、驚くじゃないの」

「超音波催眠術をやっただけだけど？ まさか戯言シリーズのノリでやったら出来るとは思わなんだ」

「こ、これだからバグキャラは……！ まあいいわ……いや、よくないけど、ひとまず置いて。」

ネギがこの学校に来たわけだけど、あんた達はどうするつもりな訳？」

「基本的に不干涉だ」

「外に出て正義の魔法使い等のやつかみを買う必要もないしな。わざわざ呪いを解こうとは思わん」

「やっぱ、そうか。というかまあ、ネギって現時点で要が出した課題を何個もクリアしてるわけでしょ？」

弟子の卒業試験の後に、何個か依頼出したりしたって聞いたわよ？ 見習い魔法使い卒業なんて、建前みたいなもんでしょ？」

「賞金首を10人狩って来い。総計100万ドラクマの賞金手に入れる。もうメンドイから自己流奥義生み出して来い。この三つだな」

「最後が随分投げやりね……」

「別に達成できなくてもいいしな」

実際の所、向上心を高められれば何でも良かったわけだ。俺を倒せっていうのを提案しようとしたら、ヴォルケンリッター総出で止められてしまった。

冷静になって考えてみると、凄まじい無理ゲーだった。俺って、リインフォースを除いたヴォルケンリッター総出で掛かって互角っていう、チート臭い戦闘力になってしまったしな。

「実際の所、ネギの戦闘力はかなり高くなってるしな。だが、格闘術がな……実戦経験がまだ少ない。

ナギに近づいてはいるが、本格的に格闘術を習わないといけない。ナギは自己流だが、センスがあつた」

「そうよね……ナギって魔法使いの癖に反則級に接近戦上手いし。ていうか、ラカンと引き分けたんだからね」

「かく言うお前も天才的なセンスがあるんだがな……」

「それは知ってる。でも、バグキャラじゃないわよ」

「ナギに匹敵する莫大な王家の魔力があり、ありとあらゆる攻撃魔法を意思次第で完全に無効化し、年齢一桁の頃には既に究極技法を習得。

天性の格闘センスがあり、接近戦においてはシグナムですら一目置くほどの実力。また、上位古代語魔法である燃える天空の使用も可能」

「十分バグキャラだな。うむ。そもそも、肉体年齢五歳の子供が如何に英雄に守られていたとは言え、戦いの日々で生き残れる訳がな

い。

元祖バグキャラの私が保証しよう。神楽坂明日菜。貴様はバグキヤラだ」

実は、アスナもバグキャラ。ネギは開発力がバグキャラ。こっそり覗いた所、原作にもあった巨人殺し（ティタ・ノクトノン）と千の雷を直射型に変更したSSランク相当の砲撃魔法。

燃える天空を球体として圧縮。一部分を解放し、そこから膨大な熱量を放射し、着弾地点から150メートル前後を高温で焼き尽くす広範囲殲滅魔法。

燃える天空と永遠の氷河を改良、統合し、巨大な氷塊を発生させ、その中心に燃える天空を発生させ、全体反応型水蒸気爆発を起こし、周囲を破壊しつくす広範囲殲滅魔法。

何故か広範囲殲滅魔法が多いのは俺の影響じゃないと信じたい。ついでに言っと、一つの魔法で協会に売れば一生慎ましかに暮らしていけるだけの金が手に入る。

更には俺の脳とアクセスしている夜天の書の話聞いて、脳に直接電気信号で情報を焼きつけ、書類の内容を完全に記憶するという魔法まで作りやがった。

原作では攻撃魔法が15個くらい。他に補助やら治癒やらを含めても50も習得してなかったのに、今のネギは使おうと思えば、俺が提供した魔法書の魔法全ての使い方を完璧に理解していやがる。

メルディアナ魔法学院の禁書書庫にも忍び込み、今ではどれだけの魔法を覚えたのか知りたくもない。少なくともサウザンドマスターを名乗れるのは確か。

「フー……麻帆良学院はバグキャラのすくつか……！」

「巢窟よ。っていつか、私がバグキャラって……」

「んなの知ってるよ、バカレンジャーじゃあるまいし。ボケたんだから突っ込めよ。何故か変換できないとか。あと、バグキヤラは当然だろ」

「ふいんき（変換できない）という奴が。いんたーねっと、いうのも中々に奥が深いものだな……」

「エヴァンジェリンが汚染されていく……それはそうと、バグキヤラの巣窟ってどういう事よ？」

「紅き翼のメンバーが7人居るんだぞ？ 闇の福音であるエヴァ、当時戦えたならば、紅き翼で戦功を立てることも出来た明日菜。

既にナギに届かんとしているネギ。なんだか最近ジャックに似てきて嫌な感じのコタロー」

実際、スケベとかではないのだが、言動というか、適当にやった技とか、ネーミングセンスとか……そこら辺が妙にジャックみたいに犬神流適当奥義・獣牙変化とか言って、30メートル近い巨大な狼になられた時はマジでどうしようかと思った。あれ、下手したら古龍並みに強いよ。

というか、そこらの町で、それなりの腕利きの結界術師と封印術師を何人か呼んでくれば、龍樹を倒して、国の守り神にも出来るレベル。ネギは、殺すだけなら出来そうだ。

「タカミチはタカミチで何時の間にか闇の魔法なんて習得してるし……しかし、術式構成が拙かったな……鍛え直してやらねばならんか？」

「やめて！ タカミチが死んじゃう！」

「そ、そうだ、タカミチは私が教育しておこう！うん！あ、あれでも一時期は私が師事していたんだ！」

「そうか？なら、エヴァに頼んだ方がいいかもな。俺がやったのはエクストリーム耐久バトルだけだしな」

俺の言葉に、二人がゴクリと唾を飲み込む。

「なんだか、聞きたいような聞きたくないような……」

「が、頑張つてよ！なまはげ扱いのエヴァンジェリンなら怖いものなんてないでしょ！？」

「私にだって恐いものくらいある！だが、参考までに聞くとしよう……エクストリーム耐久バトルとは具体的にどういうものだ？」

「別荘を使つて、一日中戦い続けるだけだ。何時襲ってくるかも分からない、休む事も気を抜く事も出来ない。

怪我をしても医療班が回復。死んだら地獄から引きずり戻しても一回殺す。魔力がなくなれば供給。気がなくなれば供給。

たとえ泣き叫ぼうが、喚こうが、24時間が経過するまでは絶対に終わらないバトル。それがエクストリーム耐久バトルだ」

「SAN値が凄まじく削れそうな修行だな……下手したら恐怖やら痛みやらで発狂するぞ？」

「私なら死んでもゴメンだわ……」

「発狂したら殴って治す。死んでもゴメンなら一回死んでから来てもらおう」

「悪魔！鬼！アンタの血は何色だ！」

「私よりもよっぽど悪人みたいに思えるのは気のせいか！？」

「悪魔でも鬼でもいいよ。悪魔らしく修行をつけてあげるだけだから」

「更に悪化した！？」

こんな感じでエヴァとアスナで遊ぶ。確かにエクストリーム耐久バトルはしたが、そこまで酷い事はしていない。

生きる事への執着と、気配察知、及び咄嗟の反応、直立状態での休眠、警戒態勢での休眠なんかを徹底的に叩き込み、24時間戦えるバーサーカーにしかただけだ。

タカミチのエクストリーム耐久バトルの使用回数は自主的な回数が11回。強制参加が198回だ。腕がもげたり、脚がもげたり、下半身がなくなったりしたが、それも俺が強制的に治療。

気絶したら死ぬので気絶をコントロールできるようになり、このくらいなら死なないから問題なしと、冗談抜きで痛みを無視出来てしまったりする。

え？十分に酷いつて？なに言ってるんだ……俺だって気絶をコントロール出来るし、痛みを無視じゃなくて快楽に変換したり、殺した相手の血をじゅるじゅる啜るんだぜ、俺……。

「タカミチはこんな鬼畜な師匠相手によく頑張ったな……初めて会った時から、戦闘力は大してないのに、危機感知能力と防御だけ異常に上手かったのは、この所為か……」

「タカミチ……強く生きてね……」

「おい？なんだか俺が人でなしみたいじゃないか？」

「抜かず五発の人でなし」

「それ、セクハラだかな」

本当に脈絡がないこと言いやがったな。ちなみに五発は平均回数。今まで知らなかったのだが、この体、精力絶倫なのだ。

10歳児の体では、AVやらなんやらを見ても一切興奮しなかったしなあ。どうでもいいが、この世界総計的に見て美形が多いというか、むしろ美形しか居ない世界なので、AVのレベルが高過ぎると思うんだ。

何故かエヴァを前にすると、10歳児所か5歳児でも勃つという不思議性能な体である。

「一昨日私を白濁液塗れにしたのは誰だ？」

「この小説が18禁になるんでマジで勘弁してください。俺です」

「先週、胸だけを一晚中責め続けた挙句、お預けをしたのは誰だ？」

「ごめんなさい。ペタンコな胸を舐めるのが大好きなんです。いや、エヴァのしか舐めた事ないけど。いや、胸責めっていうシチュが大好きって言うか。」

いや、ちよつと夢中に成りすぎた。マジで勘弁。所で母乳が出るようになる魔法があつてだな……貧乳な子から出る母乳って、巨乳の母乳よりも興奮する」

「却下する。そもそもそんな下らん魔法を探すな！あと喧嘩売って

るのか!？」

「実は、手足を自由自在に操れる触手に変化させる変身魔法があったり、逸物を数倍の大きさに変化させる変身魔法があったり。

出てくる液体の量を100倍に増やしたり(2〜3mlなので、300mlくらい) 幻術で複数人に自分を増加させる魔法があったりな…… HENTAI文化は凄いな。後エヴァの貧乳最高。

僅かな膨らみと、それを恥らうエヴァが可愛いんじゃないか。それこそが宇宙の真理」

「最後のは気の使い手を使う分身でいいだろ!？そもそも、そんなものを私に使う気か!？それと、やっぱり喧嘩売ってるんだろ!？買うぞ!？」

「へっ、俺の処女を奪った癖に、よく言うよ。それと、エヴァの膨らみかけの胸が可愛いのは事実。かく言うエヴァも10歳Verの俺の胸を散々触って吸ったじゃないか。

日本人だからエヴァと違って真正正銘のペタンコだったのに。膨らみかけ所じゃないぞ。エヴァはまだ、ぶにつて感じだけど、俺はペタンだぞ、ペタンつて。そもそも胸所か乳首も膨らんでねえよ。恥ずかしいから止めてつて言ったのに止めてくれないし、魔力を封印して戒めの氷矢で縛り付けるし。あれ、レイプつて言うんだぞいや、気持ちよかったけど」

「そ、そそそれはだな!だ、誰かに奪われるくらいなら私が奪つてしまおうとだな!

胸に関してはなんだ…… すまんとしか言いようがない」

「別にいいのさ……俺、本当は男だし」

「フー……現実逃避って難しいわね。何でこの二人はいきなりエロ話を始めてるのかしら」

エヴァといちゃいちゃラブラブ、世の中の喪男が見たら、血の涙を流すような内容を話していると、屋上の扉が開いて、誰かが入ってきた。

どうせ気づかれないだろうと思って放っておいたら、平然と結界の中にそいつが入ってきた。

誰かと思って視線を向けると、赤毛の青年。加えて言うなら、美形である。まあ、ぶっちゃけた話、ネギなんだが。

「見つけましたよ。明日菜さん、要さん」

「って、気づいてたのか……折角一年前から潜入してたのに……！」

「魔力を封印しても、魔力タンクが消えるわけじゃないですから。魔法を開発する過程で、魔力タンクの透視ができるようになったんです。

そこまで馬鹿げた容量を持つ魔力タンクの持ち主は、師匠以外には居ませんよ」

なるほど。それならバレるかもしれない。リンカーコアとは魔力容量という言葉通り、大きさを魔力量が決まる。ナギや木乃香なら、握り拳くらいはあるだろう。

だが、要はその二十倍以上あるのだ。体にギッシリとリンカーコアが詰まっていると言えば分かるだろうか？というか、体からはみ出していないのが奇跡なくらいのサイズなのだ。

「それでは、これからよろしくおねがいしますね。師匠」

「わーったわーった。まったく、折角驚かせようと思ったのになあ」

「そう上手く行くもんじゃなかったわね」

「それと、エヴァンジェリンさんも。よろしくおねがいしますね」

「フン……？悪の魔法使いである私とか？」

「まあ、賞金首の取り消しも通ったわけですし。今のエヴァンジェリンさんは一般人と同じですから。魔法関係者を一般人と言っているかは分かりませんが」

「それもそうか」

考えてみればそうだったとエヴァンジェリンは思い出す。かれこれ何百年も賞金首だったのだから仕方ない。

前までは麻帆良を出れば、即座に賞金首が復活する手はずとなっていたが、既に何処に行こうとも自由となっているのだ。

「さて、何でも僕の歓迎会を開いてくれるそうなので、行きましようか？」

「あ、そうそう、それよ。文句言っついでに二人を呼びに来たんだっただ」

「アスナさん、しっかりと忘れてましたね。それじゃ、行きましようか」

仕方ない。行くとしようか。エヴァと手を繋ぎ、結界を解除し、俺達は教室へと向かった……。

さあてと、これから物語が始まってく。リョウメンスクナの復活、超鈴音の計画。それらを阻止する事は不可能ではない。寧ろ、力を増したネギならば容易い事だろう。

されど、英雄の活躍の影で涙を呑んだ人が居た事。人と人は必ずしも分かり合える訳ではない事を学べるはずだ。

しっかりと成長しろ。俺の弟子だ。でもまあ、少し失敗して、挫けた時は尻を叩いて後押しくらいはしてやるさ。

第十話 学園祭とネギ来訪と戦士は眠らず（後書き）

今回はちつと短いです。新しい妄想が沸きあがって、情熱に身を任せたら、オリ主が木乃香の姉で、何故か詠春との子供を生んでいて、自力で燕返しを習得してた。

やっぱり自分の脳味噌は腐っているようです。

思いつきり外伝（前書き）

なんという無茶振り外伝。これは絶対に続かない。

思いつき外伝

青年の命を奪う、朱色の魔槍は、唐突に溢れた光の中から現れた何者かによって弾かれた。

「七騎目のサーヴァントだと!？」

蒼い獣のような槍兵は、驚愕するような声を上げ、光の中から現れた何者かの追撃を受ける。

槍を両腕で構え、それを受け止めるが、余りの一撃の重さに後退せざるをえなかった。狭い場所で槍を振るうには不利と悟ったか、土蔵の外へと逃げ出した。

現れた何者か……それは幼い少女だった。胴体を覆う黒い革製に見える服は短く、下着がギリギリ見えそうなほどの短さ。されど、腰には太股を守る為のガードが。

上に来ているジャケットの肩は膨らんでおり、恐らくは内部にガードを隠しているのだろう。何よりも目を引くのが、背中に生える三対六枚の黒い羽。

手には十字を保持するための輪がなければ、十文字槍にも見える大きな杖。それはまるで、魔法使いのような姿。

「お前が、俺のマスターか」

「え？」

唐突に開かれた口から、青年へと尋ねる声。マスター？何の事だろうかと青年が思っ暇もなく、次の言葉を紡ぐ。

「令呪を確認した。サーヴァント・ジョーカー。召喚に応じ馳せ参

じた。これより我が杖と翼、そして我が誇り高き騎士団は貴方と共にあり、貴方の運命は我等と共にある。

夜天の王と紅き翼、そして時空保安局最高評議会の名を持って誓約しよう。ここに契約は完了した」

十歳くらいにしか見えない少女は、いきなりわけの分からない事を言い出した。

「敵がまだ居るな……そこで待っていてくれ、主。すぐに掃討してくる」

言っと、幼い少女はいきなり掻き消えた。外に出たのかと思い、咄嗟にそちらへと向かうと、既に外で蒼い槍兵と対峙していた。

「よお……一応聞くがよ、ここで勝負は次に預けねえか？そこに居るマスターも、なにがなんだかわからねえって顔してるしな。

それに、お互い万全の準備を整えてからの方が、色々と都合はいだらう？」

「断る。我等がベルカの騎士に一对一で負けはない。夜天の書の主としてここで引く選択肢はありえない」

「ハッ……よく言った。だが貴様は馬鹿か！武器も構えず戦いの場に出てくる騎士があるか！」

見てみれば、幼い少女は何時の間にか先ほどまで持っていた杖を消していた。完全な丸腰。姿も戦闘向きとは言えない。槍の一突きで突き殺されかねない武装。

放たれた必殺の一撃。されど、それを幼い少女は神速の一撃によって弾いた。

「素手だとお!？」

上へと跳ね上げられた男の槍。それを逃さず、幼い少女は鋭い突きを放っていた。

男は後方へと飛び退くが、幼い少女は一瞬消えたかと思うと、既に男の懐へと入っていて、肘撃ちを放っていた。

それを男は咄嗟に槍で防ぐが、ガードの上からでも尚、重い一撃は男を後方へと跳ね飛ばしていた。

「一つ聞かせろ……」

後方へと跳ね飛ばされた男が、槍を構えながらも問いかける。

「貴様、何処の英雄だ……そのガキみてえな容姿でありながら、凄まじい威力の一撃。思い当たる節が一つもねえ」

「我等は法の番人。時空の守護者。正義の味方にも、正義の代行者にも非じ。我等は唯悪の敵なる者」

「ほお……どこぞの騎士団か何か?話を聞く限り、テメエは騎士団長みてえだが?」

「然り。我、夜天の書の主にして、最後の夜天の王。そして、我に仕えし五人の騎士……」

幼い少女が手を虚空に掲げると同時、少女が左手に持っていた本が浮かび上がり、凄まじい速度でページが捲られていく。それに伴い、その本が紫色の輝きを発していく。

『Gefangnis der Magie』

合成音のような声。それが響くと同時、幼い少女を中心として黒いものが周囲を覆っていった。

「これは……結界だと！？貴様キャスターか！」

相手の行動を許した失策を悟ったか、蒼い槍兵は神速の踏み込みを持って槍を突き放った。

一体どのような結界かは分からぬ。だが、召喚される魔術師は神代の魔術師の可能性すらもあるのだ。ならば、魔術師の家に組み込まれた魔術を流用するなど容易い。

蒼い槍兵は、相手が魔術師ならば、魔術を紡ぐ前に仕留める自信がある。先ほどの一撃は強化の魔術を用いた末に弾けたのだらうと当たりをつけた。

しかし、それは失策だった。追撃の一撃が如何に錬度の高いものであり、人を殴るのに何らためらいが無かった事。それを見抜けたのならば、分かっただらう。しかし、防ぐのに精一杯であった彼にそれを求むのは些か酷であらう。

唐突に虚空から現れた剣。それを持って、ジョーカーはランサーの放った槍を弾き飛ばした。全てを真っ向から撃ち砕く剛剣。それは長年の研鑽の末に培ったものである事は一目瞭然であった。

「剣の騎士、烈火の将シグナム。主の勅命に拠りて、貴様を討つ」

何時の間にか、ジョーカーの姿が凛々しい女性騎士に変貌していた。ピンク色の髪をニーテールに纏め、露出の覆い騎士甲冑を纏った凛々しい姿の女性騎士に。

その手に持つ、炎の魔剣レヴァンティン。変換資質によって発生した業炎が蛇のように絡み付いていた。

「へっ、おもしれえ……ああ？戻って来いだと？……チツ、よお、セイバーだか何だか分かんが、マスターに戻って来いと命令されちまってな。」

そこに居るお前のマスターも何が何だか分かんって顔してるしよ。お互い、万全の状態で戦うのがいいだろ？この勝負、次に預けねえか？」

「……よからう。磐石の準備を整えてから再び来るがいい。その時、貴様を討つ。我が名はヴォルケンリッターが将、剣の騎士シグナム」

「わりいが、真名は明かせねえ。だが、槍兵だって事は見て分かるだろ？んじゃあな」

ランサーは槍を肩に担ぐと、そのまま何処かへと去って行った。ジョーカーはまた一瞬光に包まれると、元の姿に戻っていた。

「魔力が足りんな……リンカーコアとかの理が違うからか……二日もすれば、完全召喚も出来そうだ」

ジョーカーは呟くと、何が何だか分かんといった様子のマスターの下に戻った。

「何が何だか分からないって様子だな。マスター」

「あ、ああ。一体何が起こってるんだ？」

「それについては後で説明する。こっちに迫ってるサーヴァントと魔術師が一人。攻勢に出るか守勢に出るか。選んでくれ」

「あ、ああ、本当に敵かどうか分からないし、ひとまずは状況説明が先だし」

「甘い。甘いぞマスター。罫を張られて始末されてもおかしくない状況なんだぞ。まあ、別にいいがね」

再びジョーカーは何処からともなく十字の飾りがついた杖を取り出すと、肩に担ぐようにして持った。そして、僅かに浮遊する。

「時間がないから手短に説明するが。今、この町では戦争が起きている。七人の魔術師と七人のマスター。それぞれが聖杯を奪い合う戦争をな」

「聖杯……？」

「奇跡を可能とする神秘の結晶。それが聖杯だ。っと、敵さんが来たぞ」

家の正門から堂々と入り込んでくる紅い外套を着たサーヴァントに、それに続いて走ってくる魔術師。

ジョーカーは無詠唱で魔法の射手をざっと1000本ほど展開し、一応の牽制となす。強い対魔力を持つ相手には殆ど意味の無い魔術だが、ないよりはマシだ。

「なっ、遠坂!？」

「こんばんは……衛宮くん」

「あん？知り合いか？マスター？」

「あ、ああ、一応……」

「じゃあ、顔見知りと仲良くなると辛くなるから、今のうちにサクッとぶち殺しておいた方が楽だぞ」

「だ、駄目だそんなの！第一に殺すとか何とか……そう言うのは言うもんじゃない！」

「……駄目だこりゃ」

呆れたといった調子で呟くジョーカー。紅い外套のサーヴァントと魔術師も呆れたような顔だ。

「はあ……もしかして、貴方聖杯戦争の事もロクに知らないマスターなんじゃないの？」

「さっきジョーカーから聞いたけど、何が何だか……」

「やっぱり……それじゃあまるつきりど素人って事ね。中で話しましょう。この戦いのあらましを説明してあげるわ」

Side 要

場所は移り、衛宮亭（誤字に非ず）の居間に移り、状況説明が始まった。俺は悠々と席についてお茶を頂いている。うん、中々の味わい。だが、俺には負けるな。

机に置いてあった煎餅もありがたく頂き、ボリボリといい音を立てて食べる。やっぱり煎餅は醤油だろ。歌舞伎揚げも好きだけど。

「緊張感のないサーヴァントね……」

「今すぐお前さん方に襲われてもどうともなるってだけだ。マスターを木端微塵にされても、生きてれば治せるし、死んでれば地獄の底から引きずり戻して生き返らせるだけだ」

「あつそ……それじゃ、本題に入るわよ。聖杯戦争は聖杯の所有を巡つての戦い。マスターに選ばれた者にはサーヴァントと令呪が与えられる。」

これくらいは貴方のサーヴァントから聞いてるかしら？」

「ああ、大体の所は……」

「令呪つてのは、この腕にある奴だよな？」

「令呪つていうのは、サーヴァントに対する3度限りの絶対命令権。それを使えば、どんな理不尽な命令も俺に聞かせる事が出来る。」

あるいは、限界以上の力を発揮できる。例えば、この世界を滅ぼせと俺に命令すれば、三日は掛かるところを一日くらいで滅ぼせる」

「ちよつと待て。そんな無茶苦茶な命令するわけないだろ」

「もしくは、俺が独断で世界を滅ぼそうとしたら、それを強制的に止める事も出来るって事だ。分かったな？」

「ああ、大体分かった。分かりやすい例え話だったよ」

たとえでも何でも無いんだがな。

「付け加えて言えば、サーヴァントを令呪なしで従えるなんて不可

能だわ。何故なら彼らは人の手に余る強大な存在だから。

サーヴァントって言うのはね、実在した英雄たちの魂なのよ」

「え……！？英雄って、あれか？御伽噺とかに出てくる……」

「そう、神話や伝説。数え上げればキリがない。生前の偉業により英雄と認められた人物は死後英霊の座へと迎えられる。

聖杯は彼等に七つのクラスを当てはめる事でこの世に召還する事を可能としたの。セイバー、アーチャー、ライダー、ランサー、キヤスター、バーサーカー、アサシン。

聖杯は召喚された英霊たちに相応しいクラスを当てはめてマスターに与えるの。まあ、貴方のサーヴァントはジョーカーなんていうイレギュラー要素みたいだけど」

「ジョーカーはそのまんまの意味だ。ワイルドカード。つまり、七つのクラス全てに当て嵌まる要素を持っている。なんで召喚出来たかは知らないが。

更に言うと、全てのサーヴァントのクラススキルを所持している。マスターが居なくても半永久的に現界出来るし」

「なにそれ……！とんでもない反則じゃない！」

「バグキャラとはよく言われた」

「まあいいわ……兎に角、そのサーヴァントとマスター同士を戦わせて、最後に生き残ったものを聖杯は主と認める。これがこの聖杯戦争のあらましよ」

「そんな……！人の命をまるでゲームみたいにやりとりするなんておかしいだろ！？」

「そうね。だけどその表現は正しいわ。選ばれた七人の魔術師達がサーヴァントと令呪を手駒とし、聖杯を目指して戦うゲーム。貴方はそのゲームに巻き込まれたって訳。

それじゃ、これから行くところがあるから。貴方もついてきて」

俺は腰巻と肩のガードを消して、もしも俺が成人女性だったらコンパニオンみたいな格好で外に出た。

何しろ、ノースリーブで股下十センチくらいしかないからな。しかし、下着は見えない。これぞ絶対領域である。

何やらペラペラ喋ってるマスターたちを見ないで、書店を覗く。魔法先生ネギまないかな……見つけたので、格納領域に入ってた金で全部購入しておいた。

これ凄いな。原作と全然違うやん。というか、俺が出てるぞ。マンガの世界のキャラクター召喚とか凄くね？歩きながら読んでいると、何時の間にか教会にいていた。実に胸糞悪い教会だな。

「マスター。俺はここで待ってる。襲撃される事はないと思うが、気をつけて」

「ああ、分かった」

やはり、俺の辿った世界とは違うな。所々でネギが弱体化してる。まあ、そうしないと漫画にならんしな。俺も殆どサブキャラみたいな感じだし。

夜天の書でネットを閲覧してみると、魔法少女リリカルなのははなみみだ。とらいあんぐるハートはあるみみだだけ。

暫く待っていると、何やら顔色の悪いマスターが出てきた。

「マスター。顔が悪いぞ？」

「失礼だなお前……」

「訂正する。顔色が悪いぞ」

「ああ、大丈夫。ちょっと気分が悪くなったただだよ。ジョーカー。俺はこの戦いを見過ごせない。だから、マスターになる事を受け入れた」

「ああ」

「ちょっと頼りないマスターかもしれないけど、これからよろしく頼む」

「気にするな。サポートするのは俺の役割だ。こちらこそ、頼む」
差し出された手を握り、握手する。

「それじゃ、行きましょう。夜が明けないうちにね」

「ああ」

言われたとおり三人で連れ立って歩く。ちなみにだが、俺は霊体化出来るぞ。誰も言わないからしないけど。
ぼくぼくと歩いているうちに、何やらマスターがぼんやりと突っ立っている。

「どうした、マスター。馬鹿面引っさげて」

「やっぱ失礼だなお前……」

「油断してる何処からともなく飛んで来た銃弾であぼーんなってなつても知らんぞ」

「ああ、すまない。ジョーカーがしっかりしてくれて助かる。俺は正直言つて半人前だし、聖杯戦争のことなんて全然分からない」

「フハハハ、頼りにするがいい」

こんな感じで会話をしているうちに、何時の間にもやら分かれ道になったのか遠坂がここからは敵だとわざわざ宣言してきた。

何やら天然でフラグを立てているうちのバカマスターに呆れながら、こつちに向かつて歩いてくる魔術師に一応の臨戦態勢。

S i d e 凜

戦闘が始まる。ジョーカーが後衛でアーチャーが前衛。色々と間違つてる気がしないでもない隊列だけど、アーチャーは近接戦を好んでるし、ジョーカーの体格だと近接戦は難しいでしょ。

ジョーカーがいとも容易く無詠唱で空中に大量の矢。ガンドを強化したような物を作り出して、それを発射していく。時々繰り出される強力な魔術もバーサーカーの前には殆ど意味を成してない。

ジョーカーはダメージを与えるのは諦めて、足場を破壊したり、単純な衝撃でアーチャーへの攻撃のタイミングを一瞬ずらしたりしている。これなら、勝てなくても負けはしないだろう。

「衛宮くん！逃げるわよ！」

「え、おい！待てよ遠坂！あんな小さい子を置いてけぼりになんか

出来ないだろ！」

「馬鹿ね！私達があそこに居ても邪魔になるだけなのよ！第一に、貴方のサーヴァントだって見た目どおりの年齢じゃないんだから！あの姿はあくまでも全盛期の姿よ！」

「だ、だからって……女の子を戦わせるわけにはいかない！」

「バカ！貴方本物のバカよ！私達が居なければ、あの二人なら隙を突いて逃げる事も出来るわ！貴方が居ても足手まといになるだけ！」
そう言つて私は衛宮くんの手を取つて走り出す。逃げなくちゃならない。最低でも私の家に。あそこなら、例えバーサーカーでも足止め出来るくらいの防衛魔術は組んである。

「二人でこつそり何処に行くの？置いてけぼりなんて酷いじゃない」

私達の前に、アインツベルンのマスターが立ち塞がった。

「作戦会議でもするつもり？いいアイデアは浮かんだ？」

まるで、私達を嘲うように、無謀に姿を晒している。

「でも、どっちみちバーサーカーには勝てないわ」

そして、絶対の自信を持つて宣言した。

「だって、バーサーカーはヘラクレス！古代ギリシャ最大の英雄なんだから！」

ヘラクレス！？刃物を通さない皮を持つ獅子、ヒュドラ、様々な功業を表す十二の試練を乗り越え、様々な伝説を残し、最後には神霊の域にすら連なったといわれる大英雄。確実に最大レベルの英雄。更には、日本においてもその知名度は高い。ゲームやアニメ作品などにも登場するほどの知名度だ。その信仰による力の増幅は侮れるものではない。

「認知度が強さに変わるのは知ってるわよね？なら、ヘラクレスにかなうものなんかないわ。貴方のサーヴァントも、お兄ちゃんのサーヴァントもザコに過ぎないのよ！」

「それはやってみないとわからないよ。フロイライン」

唐突に響いた声、それは、何時の間にアインツベルンのマスターの後ろに回っていたジョーカーのものだった。驚いて振り向くと、そこにはバーサーカーと戦うジョーカーの姿があった。これが、彼女の宝具？

「フフフ……いやなに、すまないね。君が余りにも私の娘に似ていて……とても可愛い娘なんだよ。その無邪気な所や、残酷な所を平然という辺り、余りにもソックリだ。何しろ、私に猛毒を盛ったり、バラバラに引き裂いたり、私以外の家族VS私というデスマッチを開催したり……あれ、おかしいな……？家族との思い出なのに、涙が出てくる……」

娘によく思われてないのかしら……って、そんなこと言ってる場合じゃないわよ！

「私のバーサーカーは最強なんだから！貴方なんかただのザコよ！」

地面のアスファルトが軋む音が響く。咄嗟に振り返れば、そこには鉛色の狂った巨人が居た。その後ろにはアーチャーが。もう、間に合わない。死神の鎌ではなく、巨人の斧であろうとも、私達の命を奪うには間違いない。最早令呪を行使している時間すらもない。覚悟した瞬間に、その巨大な剣が振り下ろされた。

「フツ……」

そして、その剣はジョーカーに容易く受け止められた。ジョーカーの足元の地面は陥没し砕けている。だというのに、その手はまるで倒れてきたカラッポのダンボールを押さえているようだった。力も入れているように見えないのに、強大な臂力を持つであろうバーサーカーの腕力に拮抗している……否、拮抗ですらないのだろ。ジョーカーの顔は涼しげだ。

「ハッ！」

鋭く放たれた蹴り。バーサーカーの巨大な体が容易く打ち上げられる。そのままに放たれる閃光。バーサーカーの脳天に命中した一撃も聞いていないようだ。だけれど、ジョーカーはそんなこと一切気にせずに攻撃を叩き込んでいく。

「ナイト・スカイ・ナイト・アラブル……来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹き荒べ南洋の嵐！」

この呪文はラテン語？ラテン系の魔術師だったのかしら。

「雷の暴風！」

放たれた一撃。その一撃は、まさに暴風。雷を纏った強大な暴風は

バーサーカーの強靱な肉体を易々と貫き、その上半身を容易く消し飛ばした。まさに圧倒的。魔術で強靱であるサーヴァントを容易く打ち破ったその力。まさにワールドヘカード。切り札となりえる存在。

「そんな……バーサーカー！」

アインツベルンのマスターの悲痛な叫びが響く、これで、勝利になるって事ね。

「なーんて、言うつても、思った？」

「ほう？どういう事だ？」

何時の間にかこっちに居たアーチャーが尋ねる。尋ねたって返事は返ってこないと思うけど……。

「簡単よ。ね、バーサーカー？」

「

！！！！！」

響いた咆哮。それは鉛色の巨人の咆哮だった。

私の頭の中で疑問符が駆け巡る。半ば反射的に振り向いたそこには、五体満足のバーサーカーが居た。

「バーサーカーは、十二の試練を乗り越えたのよ？なら、十二の命があってもおかしくないでしょ？」

「蘇生魔術の重ねがけ……！でも、こっちにはジョーカーがいるのよ！」

「残念。バーサーカーに一度通じた攻撃は、もう聞かないのよ。試練は乗り越えるものでしょ？なら、乗り越えた試練はもう効かないわ。残念ね？」

そんな……重い絶望が頭に押し掛かったような気分だった。アーチャーには記憶が無い。だから宝具を解放できない。ジョーカーだって、そう易々と宝具を出すわけがない。あの力なら、バーサーカーを一瞬足止めできれば、衛宮くんを連れて逃げる事なんて容易い。当然、私達は嬲り殺しにされるしかない。

「なるほどなるほど。それはいい事を聞いた。たったの12回でいいんだな？」

とんでもなく自信満々のジョーカー。もしかして、アレを十二回殺しきる自信があるのだろうか。

「紅き翼最強の魔導師であり、バケモノ。その真髄を見せてやろうじゃないか」

その言葉と同時に、ジョーカーが更に分裂した。今度は20体。やはり、これは宝具なのだろうか。

「ノンノン。これは宝具じゃないよ」

まるで私の考えを見透かしたような顔。思わず殴り飛ばしたくなっただけ、かなうわけがない。

「これはただの技術。どっちかというとお遊びの技術だね。頑張れば誰だって習得できる技」

セリフと同時に、中心に居た以外のジョーカーが全員突っ込んでいく。まるで袋叩きのような状況だが、バーサーカーには一切効いていない。やはり、一定ランク以下の攻撃は問答無用で無効化されるのだろう。

「私の本業は……魔導師なんだよ！」

セリフと同時に。空中に大量の魔方阵が浮かび上がる。一つ一つが最低でも二十メートルはある。それが、12個。どれもが莫大な魔力を発していて、それが大規模な儀式魔術に等しいものだという事が分かる。現代の魔術師では、アレ一つを実行するのに数ヶ月以上の時間を要する。それをたったの数秒で……まさに規格外。

「その前に結界だな。夜天」

『ヤー。封鎖領域展開』

まるで合成音声のような言葉が返ってくると同時に、ジョーカーを中心として大規模な結界が展開される。恐らくだが、これは冬木全域を覆っていると考えて問題ないだろう。

「魔力を持つ人間だけを内部に取り残す結界だ。他の人間は全て結界の外。これは一種の異界空間だからね。幾ら壊したって結界を解除すれば元通りだ」

「うそ……そんなの、魔法の領域よ……」

「ああ、魔法使いだからね。出来て当たり前だよ」

今明かされる衝撃の事実。

「それじゃ、行くか……我が轟然たる魔力の胎動……！奥義！ブラッディカリス！」

血の十字架。まさにその言葉に相応しく、その強大な魔術は十字架の痕跡を地面に残して発射された。分身は跡形もなく。バーサーカーは辛うじて原型を残して。

「バーサーカー！」

「ハッハッハッハ、次はどうやって殺してあげようか？」

その後は一方的だった……バーサーカーの無力化でも解除できない、引っ張る力や弾かれる力を利用して、体を引き千切ったり。地中深くに空間転移で送り飛ばしたり。令呪がなくなった後は、バーサーカーを宇宙に置き去りにしてきたり。

その内現れた青タイトの変態をテレビ見ながら倒したり。ボディコンのお姉さんとスピード勝負したり。侍っぽい奴の攻撃を無防備に全部受け止めても無傷で、侍が泣いたり。ローブ着た変質者に散々着替えさせられて、その時に性別が男で既婚者だと判明したり。金ぴかと宝具の撃ち合いをして勝ったり。

「体は剣で出来ている……」

「この体と力は借り物でも、思いは本物で」

「血潮は鉄で。心は硝子」

「その涙の意味を変えるため、救われぬ者に救いの手を差し伸べる為、私は走ろう」

「幾たびの戦場を越えて不敗」

「強くなくてもいい、憐れみでもいい、同情でもいい、隣人に救いの手を差し伸べる勇気を持ちたい」

「ただ一度の敗走も無く」

「人を救うためなら悪魔にもなろう。神とでも戦って見せよう。正義の味方じゃなくてもいい。私はただ、悪の敵であろう」

「ただ一度の理解もされない」

「その笑顔を守るため、私は戦おう。明日を守る為に戦おう。幾千幾百の年月を経ても、私は戦って見せよう」

「彼の物は常に独り、剣の丘で勝利に酔う」

「この身尽きるその時まで、私は平和の守護者であろう。遙かな昔、私の友であつた男に恥じぬ為に」

「故に、わが生涯に意味は無く」

「理不尽が許せぬと戦つた友が居た。世界を相手に共に戦つた友が居た。世界を救う為に命を投げ打つてまで戦つた友が居た」

「この体は、無限の剣で出来ていた
！」

「私は彼等に恥じぬため。精一杯上を向いて歩こう。輝ける人に、私もなれるように！」

世界と世界のぶつけ合い。互いを否定しあう戦い。

「よう、カナメ。久しぶりだな！」

「ナギ……」

「ガハハハ！俺様が来たからには安心だ！最強の傭兵剣士、ジャック・ラカンさまに任せな！あ、依頼料は前金で三百万ドラクマ。十分で五十万ドラクマ。成功報酬に五百万ドラクマ寄越しな。もしくは……一杯奢れ！」

「ジャック……ああ、飲みに行こう。報酬も払うぜ……」

「フフフ……久しぶりですね。カナメ、戦いが終わった暁には、このスクール水着を着てもらえますか？あと、白スク水も」

「アル、お前も変わってないな……」

「ああ、もう……頭が痛い……なんでカナメはこんな事が出来るんだ……」

「詠春……これがバグキャラの特権だ……諦めろよ」

「ククク……おぬしも変わっておらぬな。弟子の為に老骨に鞭打って来てやったのじゃ。感謝せよ」

「師匠……」

「やれやれ……俺は元捜査官だぞ？直接戦闘は得意じゃないんだが……」

「そんな事いうなよ……ガトウ。お前の事だつて頼りにしてるんだぞ……」

「お久しぶりです。カナメさん。僕も助太刀に来ましたよ」

「タカミチ……お前の腕、見せてもらつぞ……」

「我等夜天の主の下に集いし騎士」

「主ある限り、我等の魂尽きる事なし」

「この身に命ある限り、我等は御身の下にあり」

「我等が主、夜天の王、国後要の名の下に」

「我等、雲耀の騎士団。朽ち果てるその時まで、主が下に」

「皆……」

「フフフ……夫を支えるのは妻の役目。そして、私はお前を支え、お前は私を命ある限り守り続ける。契約は今此処に変更された。私は命尽きても尚お前を支え続け、お前は私を命ある限り守り続ける」

「ああ、分かつたよ……エヴァー！」

集結したのは、彼と共にあつた友達。余りにも純粋な想いと、暖か

な優しさ。それが詰まった世界。他の英雄たちを召喚しえる固有結界。

そして、悲しさと孤独が詰まった、無味乾燥で寂しい世界。それがぶつかり合った。

思いつきり外伝（後書き）

最後らへん手抜き。明日の12時からバイトなのにこんな時間までなにやってんだろ。固有結界の詠唱は思いつきり頭捻りました。力ナメカッコよすぎ？

固有結界についてですけど、この外伝以外に登場させる予定はありません。

詠唱の内容がエミヤシロウの信念に似てますけど、きっと気のせいです。

本編書かないといけないのに、なにやってるんだろ。

どうにも書く気が沸きあがって来ません。NEGIにしたのが失敗だったんでしょうか。まあ、頑張りますが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8229/>

ネギまで夜天の主(偽)

2011年2月4日15時30分発行